第21表　**毛塚32号墳出土円筒埴輪観察表**（第49～58図）

番号	器種	胎土	焼成	色調	残存	外面調整	本/2cm	内面調整	本/2cm	備考
4	円筒	ＡＧＨＪ	A	D	90	縦ハケ	10	斜ハケ	11	基部Ｒ接合　突帯間隔異なる
5	円筒	ＡＦＨＪＫ	A	A	80	縦ハケ	10	ナデ・斜ハケ	11	
6	円筒	ＡＦＨＪ	A	C	70	縦ハケ	11	ナデ・斜ハケ	10	突帯間隔異なる
7	円筒	ＡＦＨＫ	A’	F	90	縦ハケ	12	ナデ・斜ハケ	10	須恵質
8	円筒	ＡＧＨＪ	A	D	75	縦ハケ	12	ナデ・斜ハケ	10	一部須恵質　底面藁状圧痕
9	円筒	ＡＦＨＪ	A	C	80	縦ハケ	12	ナデ・斜ハケ	10	一部須恵質　基部Ｒ接合
10	円筒	ＡＦＨＫ	A	B	70	縦ハケ	12	ナデ・斜ハケ	10	底面棒状圧痕
11	円筒	ＡＦＨＪ	A	B	70	縦ハケ	10	ナデ・斜ハケ	11	基部Ｒ接合
12	円筒	ＡＦＧＨ	A	B	80	縦ハケ	12	ナデ後・斜ハケ	10	
13	円筒	ＡＦＨＪ	A	B	85	縦ハケ	11	ナデ・横ハケ	10	突帯貼付雑　ごまかしナデ
14	円筒	ＡＦＨＪ	A	D	75	縦ハケ	11	ナデ・斜ハケ	12	
15	円筒	ＡＨＪＫ	A’	F	80	縦ハケ	10	ナデ・斜ハケ	10	須恵質　若干焼き歪む
16	朝顔	ＡＦＨＪ	A	B	80	縦ハケ	20	斜ナデ	10	
17	朝顔	ＡＦＨＪ	A	C	20	縦ハケ	11	横ハケ	9	北西周溝下層
18	朝顔	ＡＦＨＪ	A	D	35	縦ハケ	11	横ハケ・ナデ	12	
19	円筒	ＡＧＨＪ	A’	F	40	縦ハケ	10	縦ハケ	10	須恵質　突帯三角形～低台形　口唇内面凹面なし
20	円筒	ＡＦＨＪ	A	B	40	縦ハケ	11	斜ハケ	12	
21	円筒	ＡＦＨＪ	A	A	15	縦ハケ	10	斜ハケ	11	SD10
22	円筒	ＡＦＨＪ	A	D	20	縦ハケ	11	斜ハケ	9	北西周溝　内面「×」ヘラ記号
23	円筒	ＡＦＨＪ	A	B	70	縦ハケ	11	斜ハケ	11	内面ほぼ全面ハケ
24	円筒	ＡＦＨＪ	A	B	45	縦ハケ	11	斜ハケ	9	透孔一部残存
25	円筒	ＡＦＨＪ	A	D	40	縦ハケ	10	斜ハケ	12	
26	円筒	ＡＦＨＫ	A	C	60	縦ハケ	11	ナデ・斜ハケ	11	基部Ｒ接合　基部内面横位ナデ
27	円筒	ＡＦＨＪ	A	C	45	縦ハケ	12	斜ハケ	10	
28	円筒	ＡＦＨＪ	A	C	35	縦ハケ	10	ナデ・斜ハケ	10	透孔一部残存
29	円筒	ＡＦＨＫ	A	B	50	縦ハケ	10	横・斜ハケ	10	
30	円筒	ＡＦＨＪ	A	C	40	縦ハケ	10	ナデ・斜ハケ	10	
31	円筒	ＡＦＨＫ	A	C	60	縦ハケ	11	ナデ・斜ハケ	11	基部Ｒ接合　基部内面横位ナデ
32	円筒	ＡＦＧＨ	A’	F	45	縦ハケ	12	斜ハケ・指ナデ	11	須恵質　突帯低台形
33	円筒	ＡＦＨＪ	A	D	80	縦ハケ	11	ナデ・斜ハケ	11	一部須恵質　凝灰岩粒含む
34	円筒	ＡＦＨＫ	A	C	80	縦ハケ	11	ナデ・斜ハケ	11	基部Ｒ接合
35	円筒	ＡＦＧＨ	A	C	30	縦ハケ	10	指ナデ		
36	円筒	ＡＦＧＨ	A	C	30	縦ハケ	11	斜ハケ	11	
37	円筒	ＡＦＨＪ	A	C	45	縦ハケ	11	ナデ		基部内面横位ナデ　底面赤色粒子付着　基部幅6.6cm
38	円筒	ＡＦＨＪ	A	D	35	縦ハケ	10	縦ハケ	12	底部下端黒色化　一部須恵質
39	円筒	ＡＦＧＨ	A	B	45	縦ハケ	11	ナデ・斜ハケ	10	
40	円筒	ＡＦＧＨ	A	D	45	縦ハケ	10	ナデ・斜ハケ	10	底面平坦　基部幅5.7cm
41	円筒	ＡＦＨＪ	A	D	20	縦ハケ	11	ナデ・斜ハケ	10	北西周溝　基部Ｒ接合
42	円筒	ＡＦＨＪ	A	A	20	縦ハケ	10	斜ハケ	12	SD10　基部幅5.7cm
43	円筒	ＡＦＨＪ	A	A	25	縦ハケ	11	ナデ		北西周溝　底面平坦
44	円筒	ＡＦＨＪ	B	C	20	縦ハケ	11	ナデ		底面平坦
45	円筒	ＡＦＨＪ	B	C	20	縦ハケ	11	指ナデ		基部幅6.4cm
46	円筒	ＡＦＪＫ	A	D	30	縦ハケ	5	ナデ		底面棒状圧痕
47	円筒	ＡＦＨＪ	A	D	20	縦ハケ	11	ナデ・斜ハケ	11	北西周溝下層　基部Ｒ接合
48	円筒	ＡＦＨＪ	A	A	25	縦ハケ	10	指ナデ		北周溝　底面平坦
49	円筒	ＡＦＨＪ	B	C	25	縦ハケ	10	指ナデ・斜ハケ	10	SD10(C8G)　基部Ｒ接合　基部幅5.8cm
50	円筒	ＡＦＨＪ	A	A	破片	縦ハケ	11	斜ハケ	10	SD10　外面棒状工具によるナデ
51	円筒	ＡＦＨＪ	A	A	破片	縦ハケ	10	斜ハケ	10	SD10(B9G)
52	円筒	ＡＦＨＪ	A	C	破片	縦ハケ	10	斜ハケ	10	
53	円筒	ＡＦＨＪ	A	A	破片	縦ハケ	11	ナデ・斜ハケ	9	SD10(B9G)
54	円筒	ＡＦＨＪ	A	C	破片	縦ハケ	10	斜ハケ	11	SD10(C8G)
55	円筒	ＡＦＪＫ	A	D	破片	縦ハケ	17	斜ハケ	17	ブリッジ右脇
56	円筒	ＡＦＨＪ	A	C	破片	縦ハケ	10	斜ハケ	11	SD10(D7G)　透孔一部残存
57	円筒	ＡＦＨＪ	A	A	破片	縦ハケ	10	斜ハケ	10	北西周溝下層　透孔一部残存
58	円筒	ＡＦＨＪ	A	C	破片	縦ハケ	11	斜ハケ	11	
59	円筒	ＡＦＨＪ	A	A	破片	縦ハケ	10	斜ハケ	11	北東周溝　外面ヘラ記号　透孔一部残存
60	円筒	ＡＦＨＪ	A	A	破片	縦ハケ	11	斜ハケ	11	透孔一部残存
61	円筒	ＡＦＨＪ	A	A	破片	縦ハケ	11	斜ハケ	9	透孔一部残存
62	円筒	ＡＦＨＪ	A	C	破片	縦ハケ	10	斜ハケ	9	透孔一部残存
63	円筒	ＡＦＨＪ	B	C	破片	縦ハケ	11	斜ハケ	10	

番号	器種	胎土	焼成	色調	残存	外面調整	本/2cm	内面調整	本/2cm	備　　考
64	円筒	ＡＦＨＪ	A	D	破片	縦ハケ	11	斜ハケ	9	SD10(C8G)　透孔一部残存
65	円筒	ＡＦＨＪ	B	C	破片	縦ハケ	11	斜ハケ	9	透孔一部残存
66	円筒	ＡＦＨＪ	A	A	破片	縦ハケ	10	斜ハケ	10	北西周溝下層　透孔一部残存
67	円筒	ＡＦＨＪ	A	D	破片	縦ハケ	10	斜ハケ	11	透孔一部残存
68	円筒	ＡＦＨＪ	A	C	破片	縦ハケ	11	斜ハケ	11	透孔一部残存
69	円筒	ＡＦＨＪ	B	D	破片	縦ハケ	11	斜ハケ	11	透孔一部残存
70	円筒	ＡＦＨＪ	A	D	破片	縦ハケ	11	斜ハケ	11	透孔一部残存
71	円筒	ＡＦＨＪ	B	C	破片	縦ハケ	11	斜ハケ	10	透孔一部残存
72	円筒	ＡＦＨＪ	B	C	破片	縦ハケ	11	斜ハケ	10	SD10(C8G)　透孔一部残存
73	円筒	ＡＦＪＫ	A	D	破片	縦ハケ	7	横ハケ	6	SD10(D6G)
74	円筒	ＡＦＪＫ	A	D	破片	縦ハケ	6	横ハケ	5	西周溝　透孔一部残存
75	円筒	ＡＦＨＪ	A	B	破片	縦ハケ	9	斜ハケ	9	SD10(C8G)
76	円筒	ＡＨＪＫ	A’	F	破片	縦ハケ	10	斜ハケ	10	須恵質
77	円筒	ＡＦＪＫ	A	D	破片	縦ハケ	11	斜ハケ	11	北西周溝　大型円筒　透孔一部残存
78	円筒	ＡＦＪＫ	A	B	破片	ナデ		ナデ		大型円筒　内面ヘラ記号　透孔一部残存
79	円筒	ＡＦＨＪ	A	D	破片	縦ハケ	10	横ハケ	10	赤彩痕　透孔一部残存
80	円筒	ＡＦＪＫ	A	B	破片	ナデ		ナデ		北西周溝　内面ヘラ記号一部残存
81	円筒	ＡＦＪＫ	A	B	破片	縦ハケ	12	横ハケ	12	北西周溝　内面ヘラ記号一部残存
82	円筒	ＡＦＪＫ	A	B	破片	縦ハケ	11	横ハケ	11	北西周溝　大型円筒　内面ヘラ記号一部残存
83	円筒	ＡＦＪＫ	A	D	破片	縦ハケ	10	斜ハケ	10	北西周溝　内面ヘラ記号一部残存
84	円筒	ＡＦＨＪＫ	A	C	20	縦ハケ	11	ナデ・横ハケ	12	大型円筒
85	円筒	ＡＦＨＪＫ	A	C	40	縦ハケ	11	ナデ・横ハケ	12	大型円筒
86	円筒	ＡＦＨ	A	C	30	縦ハケ	11	ナデ		大型円筒　基部Ｒ接合　内面ごまかしナデ
87	円筒	ＡＦＨＪＫ	A	C	10	縦ハケ	10	ナデ		大型円筒　底面棒状圧痕

【凡例】
胎土　A：白色粒　B：角閃石　C：石英　D：雲母　E：長石　F：赤色粒　G：黒色粒
　　H：白色針状物質　I：片岩　J：砂粒　K：小礫
焼成　A：良好　B：普通　C：不良　A’:須恵質
色調　A：暗赤褐色　B：赤褐色　C：橙褐色　D：淡褐色　E：乳白色　F：灰褐色　G：黒褐色

毛塚33号墳（第60図）

調査区西側のＢ－４・５、Ｃ・Ｄ－４・５・６グリッドに位置し、第１・３～７号溝跡が墳丘や周溝を壊している。また墳丘部分には第２・４・８号住居跡が重複する。

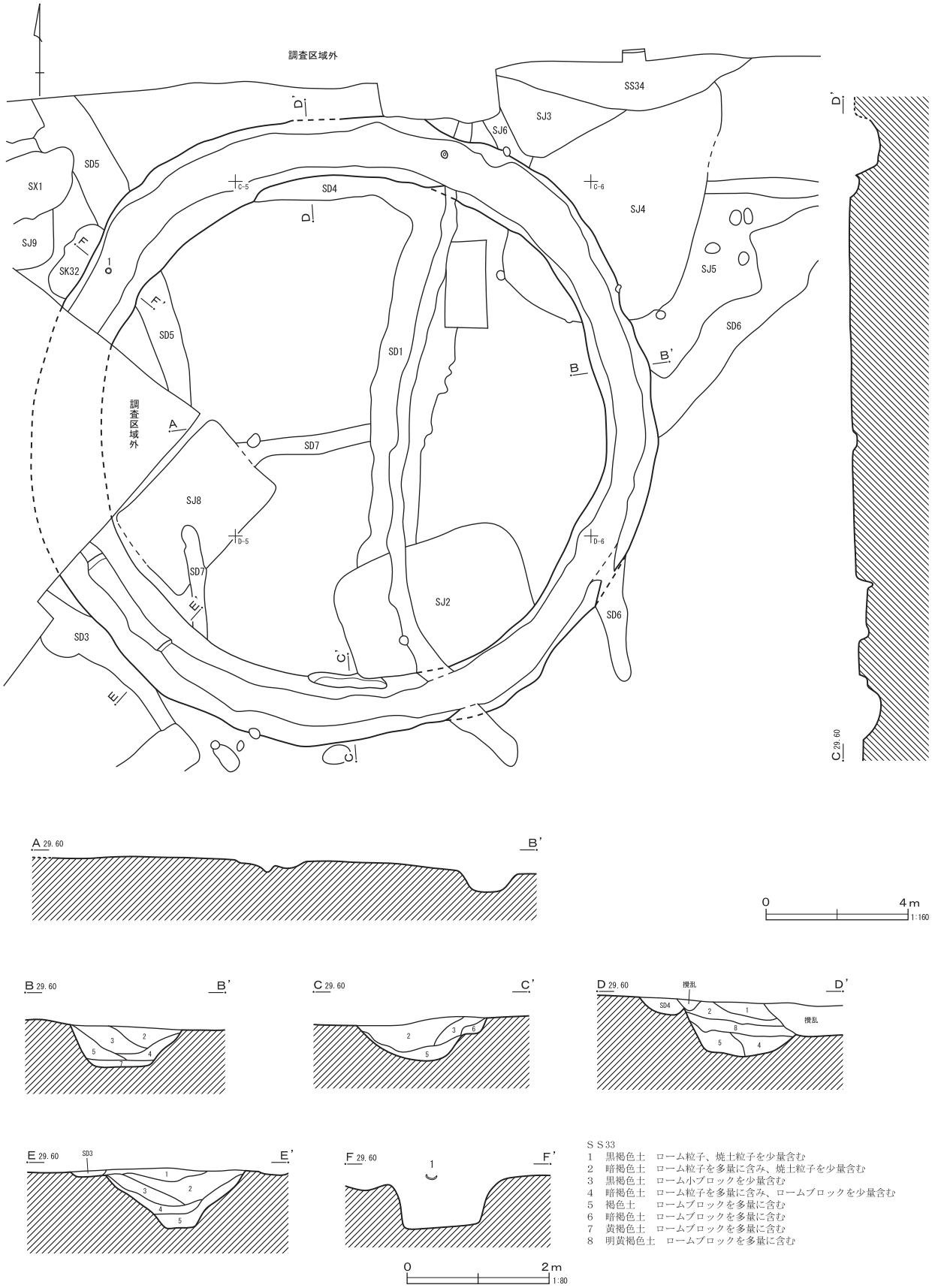
西周溝の一部が保存区域にかかるため完掘することはできなかったが、調査区内には陸橋部は検出されず、周溝の全周する円墳と考えられる。墳丘は既に削平され、主体部等は検出されなかった。規模は、墳丘径13.5ｍ、周溝径17.6ｍで、第32号墳よりも一回り小さい。北側に第34号墳が近接するほか、東に第32号墳、西に第28号墳がほぼ一列に並んだ状態で位置している。

周溝は、斜面の傾斜に沿うように南東部分が浅くなっているほかは全体に均一で、幅1.52～1.96ｍ、深さ0.56～0.88ｍを測る。断面逆台形を呈し、周溝外側に比べ、内側の側壁が急角度で立ち上がっている。底面はおおむね平坦で、南西周溝部分がほかよりも一段深く掘り込まれていた。覆土は８層に分層され、全体に焼土粒子やロームブロックを含み、最下層に周溝掘削残土と想定されるロームブロックを多量に含む黄褐色土（第７層）が認められた。

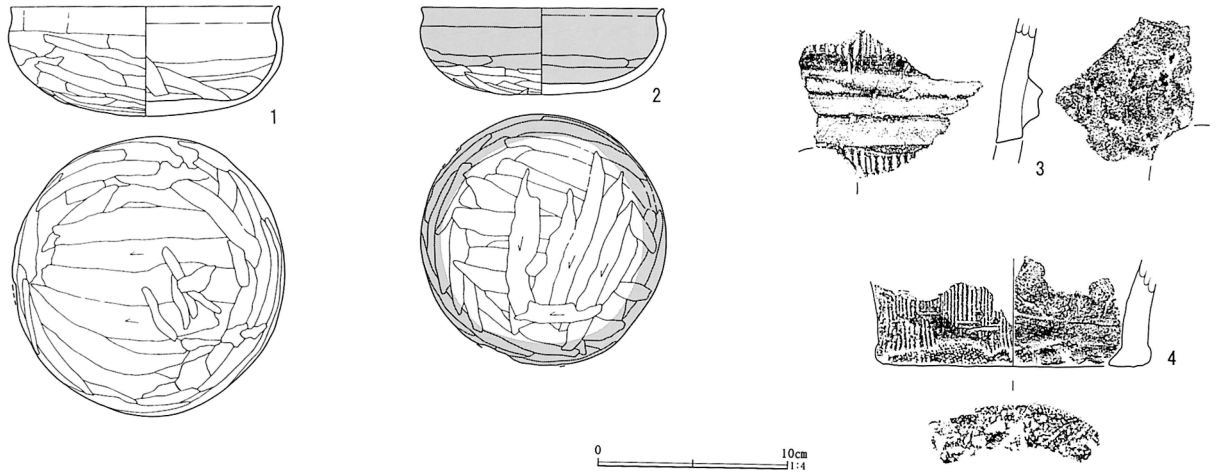
遺物は、北東周溝の上層から口縁を上にした状態で完形の１の土師器坏が出土した（第61図）。また調査の不手際で詳細な記録を残せなかったが、土層断面Ｄ－Ｄ’のセクションベルト内の中・下層から２の赤彩された土師器坏が出土した。このほかに円筒埴輪の破片が出土しているが、量も少なく、築造当初埴輪を樹立していなかったものと想定される。

１・２は比企型坏で、体部が深身で第32号墳から出土したものよりも古い型式的特徴を示す。３・４は円筒埴輪の破片である。３は断面台形の突帯や外面に赤彩を施すことから古相を呈する。４は須恵質の焼き上がりで、外面底部下端に布目圧痕が付着する。

築造年代は、出土した土師器坏の特徴から第32号墳よりも先行する６世紀前葉を中心とする年代に位置づけておきたい。


調査区域外
SS34
SJ3
SJ6
SD5
SX1
SJ9
SK32
SD4
SJ4
SJ5
SD6
SD1
SD7
SJ8
SJ2
SD3
調査区域外
A 29.60
B'
0
4m
1:160
B 29.60
C 29.60
C'
D 29.60
撹乱
D'
SD4
E 29.60
SD3
E'
F 29.60
F'
0
2m
1:80
SS33
1　黒褐色土　ローム粒子、焼土粒子を少量含む
2　暗褐色土　ローム粒子を多量に含み、焼土粒子を少量含む
3　黒褐色土　ローム小ブロックを少量含む
4　暗褐色土　ローム粒子を多量に含み、ロームブロックを少量含む
5　褐色土　ロームブロックを多量に含む
6　暗褐色土　ロームブロックを多量に含む
7　黄褐色土　ロームブロックを多量に含む
8　明黄褐色土　ロームブロックを多量に含む

第60図　毛塚33号墳



第61図　毛塚33号墳出土遺物

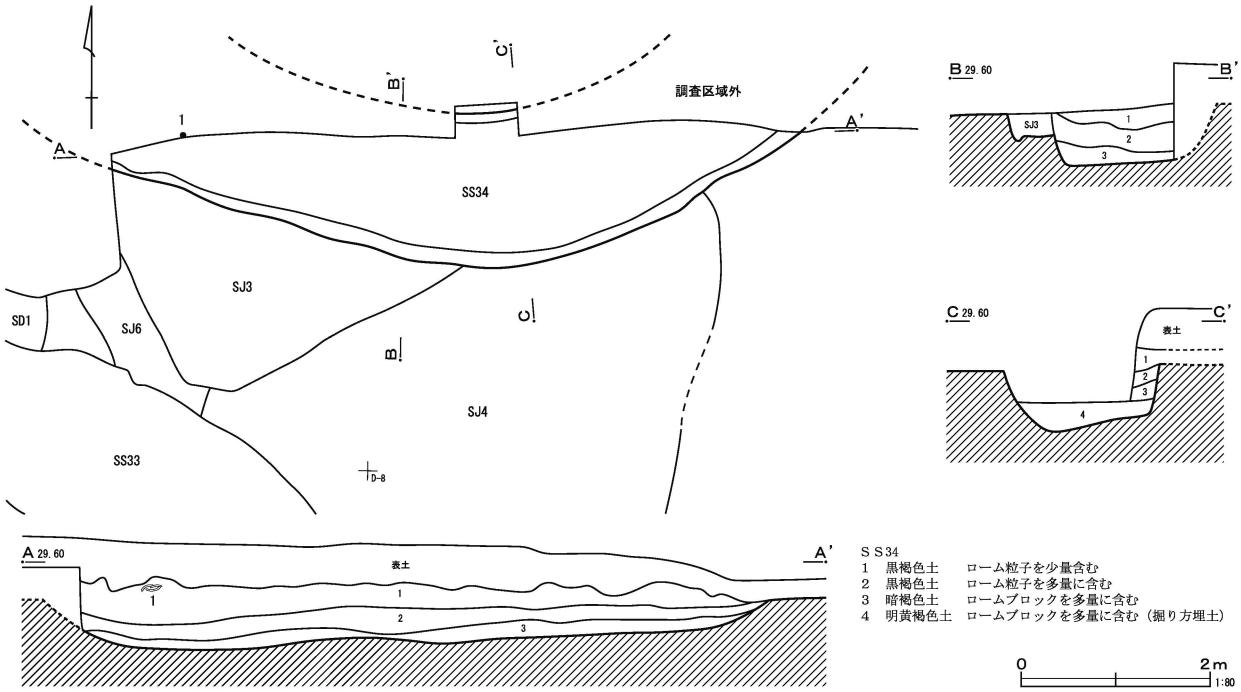
第22表　**毛塚33号墳出土遺物観察表**（第61図）

番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	焼成	色　調	残存	出土位置	備　　考
1	土師器坏	14.3	5.8		ＢＦＨＫ	良好	褐	95	北西周溝	比企型坏　無彩
2	土師器坏	12.8	4.6		ＡＦＨＫ	良好	にぶい褐	95	北周溝	比企型坏　口縁部外面及び内面赤色塗彩

毛塚34号墳（第62図）

調査区中央北端のＢ－５・６グリッドに位置し、第３・４号住居跡を切っている。墳丘の大部分が調査区外に延びており、南周溝の一部を確認したにすぎない。現状は道路下となっており、墳丘は完全に削平された状態である。

周溝は幅約1.7ｍ、深さ0.58ｍの断面台形を呈する。埋土は４層に区分され、上層にローム粒子を含む黒褐色土が堆積し、最下層に周溝掘削残土と想定されるロームブロックを多量に含む明黄褐色土が認められた。規模は円墳と仮定した場合、墳丘径約9.4ｍ、周溝径約12.6ｍと想定される。

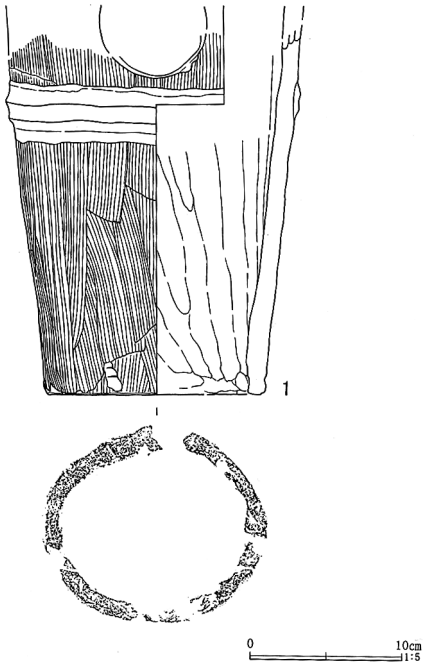


第62図　毛塚34号墳

遺物は埋土中に混入した弥生土器がほとんどで、直接古墳に伴うと考えられる遺物は、調査区壁面の表土直下から円筒埴輪が出土しただけである（第63図）。口縁部を欠いた底部から体部の破片で、土圧によって潰れた状態で出土した。

底径14.3㎝、第１段長19.0㎝のやや最下段の伸長化した２条突帯３段構成の円筒埴輪と考えられる。基部はＲ接合で、外面調整はタテハケ、内面は縦位の指ナデを施す。突帯は低平なＭ字形で、胎土に白色針状物質の混入はなく、角閃石、赤色粒子、小礫などが目立つ。色調は淡褐色である。

本墳の築造年代は、時期を示す遺物が円筒埴輪だけしかないため特定することは難しいが、最下段の伸長化から第32号墳よりも後出する６世紀後葉を中心とする年代に比定しておきたい。



第63図　毛塚34号墳出土遺物

第23表　**毛塚34号墳出土円筒埴輪観察表**（第63図）

番号	器種	胎土	焼成	色調	残存	外面調整　本/2cm	内面調整　本/2cm	備　考
1	円筒	ＡＢＦＫ	Ａ	Ｄ	70	縦ハケ　11	指ナデ	基部Ｒ接合

第24表　**毛塚34号墳出土円筒埴輪計測表**（第63図）　単位（㎝）

番号	口径	器高	底径	1段長	2段長	口縁長	1段/器高	2段/器高	口縁長/器高	底径/口径	第1突帯		第2突帯		透孔	備考
											幅	高さ	幅	高さ	縦×横	
1			14.3	19.0							2.5	0.4				

（２）埴輪棺

第１号埴輪棺（第64図）

第32号墳の北周溝外縁に接して普通円筒埴輪を転用した埴輪棺が１基検出された。埋設土壙は平面長方形で、長軸1.5ｍ、短軸0.4ｍ、深さ0.48ｍ、主軸方位Ｎ－76°－Ｅを指す。後世の撹乱によって天井部は完存していなかったが、周溝底面よりも約40㎝上位の側壁に長辺側を抉り込んだ土壙内に埴輪棺が埋設されていた。第32号墳の調査では、当初このような周辺埋葬の存在を予想していなかったため、周溝埋土との切り合い関係は明確でないが、底面よりも上の側壁に抉り込んでいることから、周溝がある程度埋没した段階に掘削された可能性が大きい。なお、土壙の形態は、所謂「側壁抉り込み土坑」（仲山1990）に類似している。

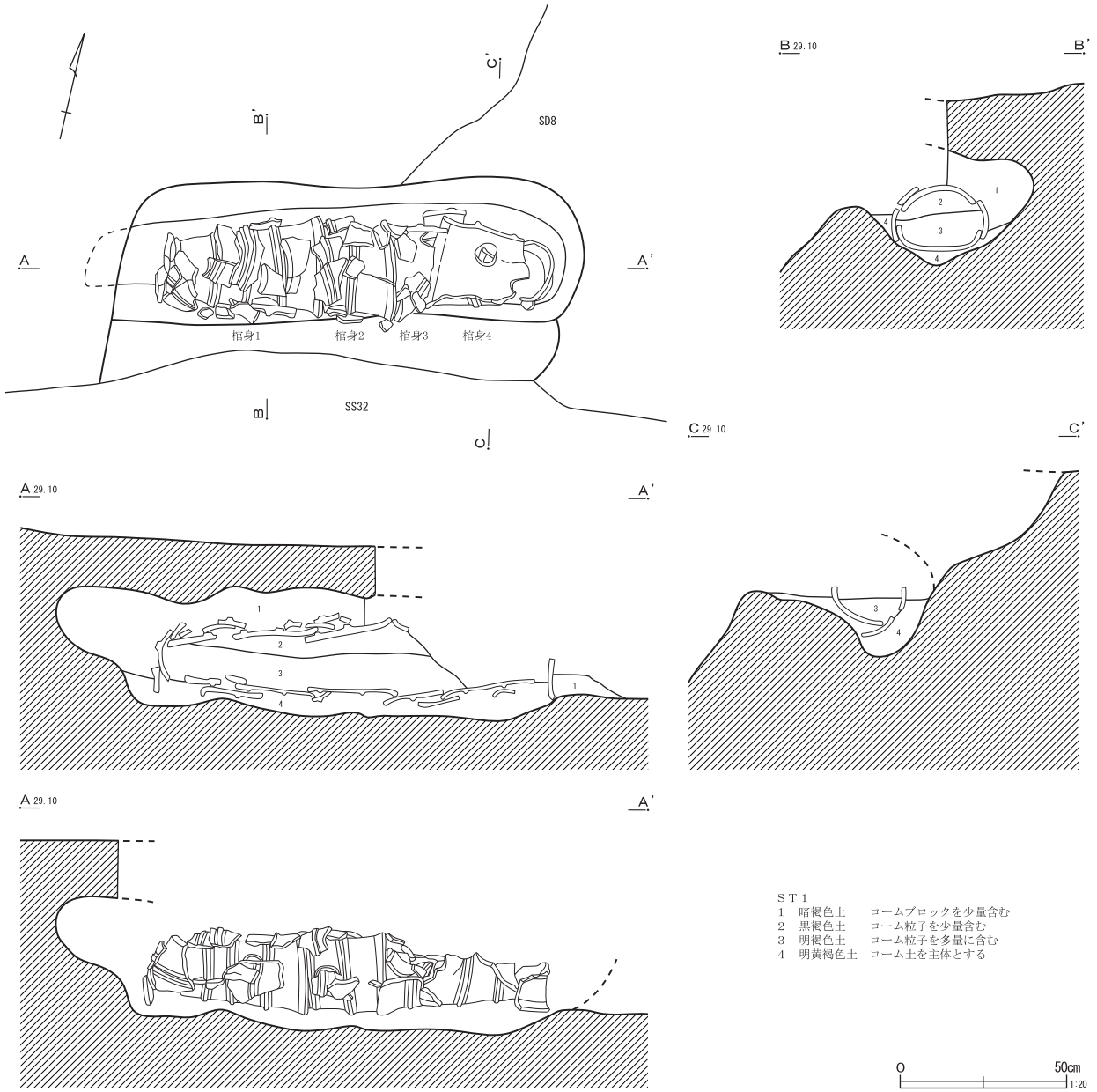
棺体は、入れ子にした２個体の円筒埴輪を口縁部で合わせ口にしたもので、全長1.12㎝を測る。最終的に５個体の円筒埴輪が復元された。その内訳は３条突帯３個体、２条突帯２個体を数える（第65図）。棺身は４個体の円筒埴輪が用いられ、西から棺身１・２・３・４とした。

棺身１（№37：取り上げ№、以下同じ）は３条突帯円筒埴輪である。基部の一部に欠損がみられる。欠損部分を下側に向けて置いていることから、故意に打ち欠いた可能性も考えられる。埋設状態は、口縁を東に向け、２段目の透孔を上に、３段目の透孔を横に置き、口縁部に棺身２を差し込んでいた。

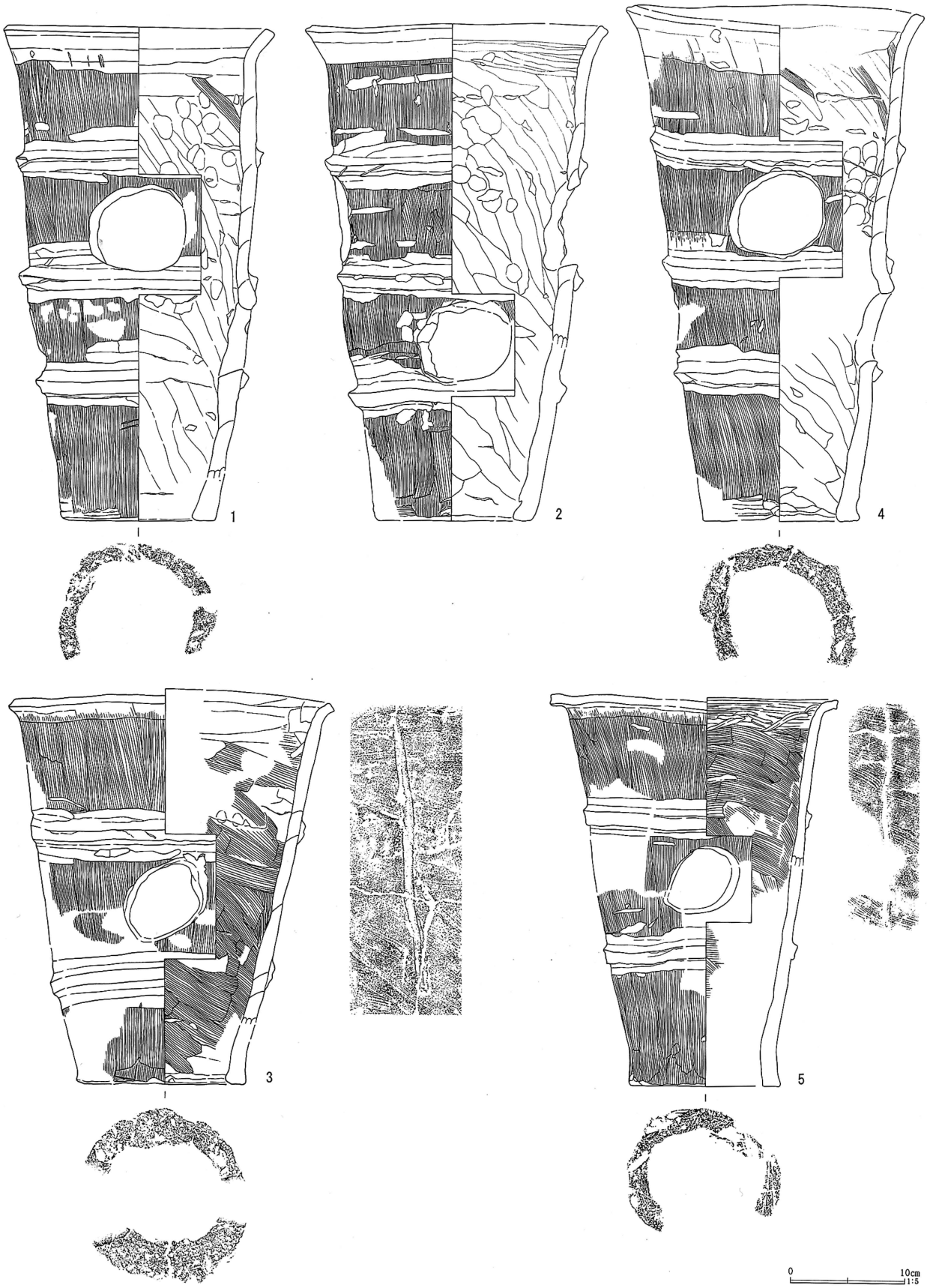
棺身２（№38）は、棺身１と同工品の３条突帯円筒埴輪である。本個体は棺身１に差し込むために底部から２段目までを打ち欠く。破片は、底部片（№27）１片のみが残り、棺身１の底部を塞ぐのに用いられていた。その他の破片は出土しなかった。

棺身３（№.40＋№.12～15・17が接合）は後世の撹乱により上面を欠損していた。２条突帯円筒埴輪に復元され、他の棺身と同じく底部から２段目までを打ち欠き、棺身４の中に差し込む。打ち欠かれた下半部の破片（№.３・５・10・31・33・45・46）は棺身１の上面の透孔を塞ぐもの（№.３・５）、棺身２の上面に置かれたもの（№.10）、棺身１の底部を塞ぐもの（№.31・33）など各所に用いられていた。

棺身４（№.28）は、棺身１・２と同工品の３条突帯円筒埴輪に復元される。しかし、棺身３と同じく後世の撹乱によった上面側を大きく欠損していた。２段目以下が打ち欠かれ、口縁に棺身３が差し込まれる。下半部（№.７～９、11・20・22・24・35・36・39・41・43）は細かく打ち割られ、№.７は棺身２の上面、№.８は棺身１上面の透孔を塞ぎ、№.９は棺身１の口縁に置かれていた。№.11・20は棺身２の口縁部、№.22は棺身２の南側面の透孔を塞ぐため立てられ、№.24は棺身１の南側面に立てられていた。№.35は棺身１の北側面の透孔を塞ぎ、逆に№.36は棺身１の南側面を塞いでいた。また、№.41は棺身



第64図　第１号埴輪棺



第65図　第1号埴輪棺出土遺物

２の南側面に透孔を塞ぐために立てられていた。№39は棺身１の内部から、№36は棺身の下面に敷かれていた。

この他に棺身として用いられず、バラバラに割られた２条突帯円筒埴輪１個体が復元され、棺身５とした。全部で13片に割られていた（№１・２・４・６・19・23・25・26・29・30・32・34・44）。№１・２・４・６は棺身１の上面、19は棺身４の底部、23・25は棺身１の南側面、26は棺身１の底部、29は棺身４の下面に敷かれ、透孔を塞いでいた。30は比較的大きな破片で、口縁を下にした状態で棺身４の底部を塞ぎ、32は棺身１の底部を塞いでいた。また、№34は棺身１の南側面を塞ぎ、№44は下面に敷かれていた。なお、合わせ目や底部、透孔の閉塞には粘土などはまったく用いられていなかった。

円筒埴輪のうち３条突帯の棺身１・２・４は、同一工人による作品と考えられもので、埴輪棺に用いるために一括して入手した可能性がある。一方、２条突帯の棺身３・５は、西側に隣接する第28号墳の円筒埴輪の中に類似したものがあることから、樹立していた円筒埴輪を転用した可能性もあろう。

第25表　**第１号埴輪棺出土円筒埴輪観察表**（第65図）

番号	器種	胎土	焼成	色調	残存	外面調整	本/2cm	内面調整	本/2cm	備　　考
1	円筒	ＡＦＨＪＫ	A	B	90	縦ハケ	20	斜ナデ		基部Ｒ接合
2	円筒	ＡＦＨＫ	A	B	80	縦ハケ	19	斜指ナデ		
3	円筒	ＡＦＨＪＫ	A	C	70	縦ハケ	12	斜ハケ	16	内面縦位の指ナデ
4	円筒	ＡＨＪＫ	A	B	80	縦ハケ	19	斜指ナデ		基部Ｒ接合　外面に板目圧痕
5	円筒	ＦＧＨＫ	A	C	75	縦ハケ	14	斜ハケ	13	基部Ｒ接合　内面縦位の指ナデ

第26表　**第１号埴輪棺出土円筒埴輪計測表**（第65図）　単位（cm）

番号	口径	器高	底径	1段長	2段長	3段長	口縁長	1段/器高	2段/器高	3段/器高	口縁長/器高	底径/口径	第1突帯		第2突帯		第3突帯	
													幅	高さ	幅	高さ	幅	高さ
1	23.8	43.6	(13.5)	12.4	9.1	10.0	12.1	28.4%	20.9%	22.9%	27.8%	56.7%	1.3	0.7	1.9	0.8	2.0	0.8
2	26.5	43.9	(13.8)	11.7	9.5	10.2	12.5	26.7%	21.6%	23.2%	28.5%	52.1%	2.3	1.0	1.9	0.9	2.2	0.8
3	28.5	34.7	14.9	9.7	12.6		12.4	28.0%	36.3%		35.7%	52.3%	2.5	0.5	2.4	0.5		
4	(26.2)	44.7	13.7	13.2	9.7	9.9	11.9	29.5%	21.7%	22.1%	26.6%	52.3%	1.4	0.8	1.9	0.7	2.2	0.8
5	25.2	34.4	(13.3)	11.3	12.2		10.9	32.8%	35.5%		31.7%	52.8%	1.8	0.5	2.0	0.5		

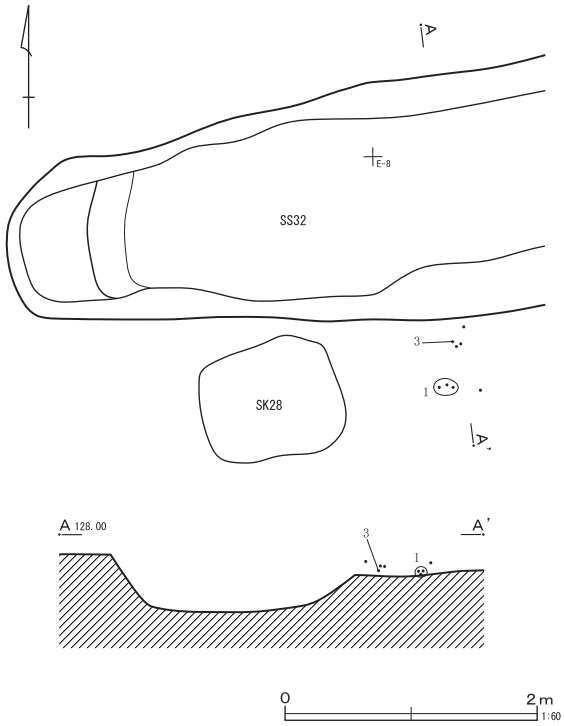
（３）その他の遺構と遺物

埴輪集中区（第66図）

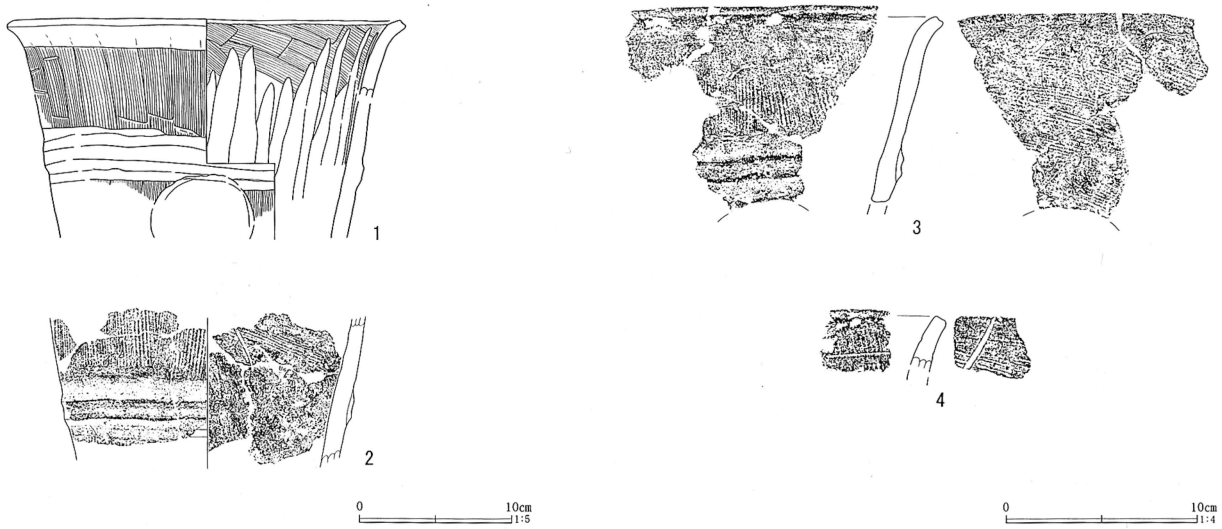
Ｅ－８グリッドに位置する。試掘調査の際に、第32号墳の周溝外側から円筒埴輪が単独で出土したことから、埴輪棺の可能性が指摘されていた。口縁部を中心とする円筒埴輪の破片がややまとまった状態で出土した。

本調査の結果、出土地点には明確な掘り込みを確認することができず、円筒埴輪の破片がわずかに検出された。周溝外からの単独出土であり、通有のあり方とはやや異なるが、埴輪棺などの埋葬施設と断定するには根拠が乏しく、ここでは埴輪集中区と呼称し、その性格については明確にし得ない。

出土した円筒埴輪は同一個体の可能性のある共通した特徴のもので、４点を図示した（第67図）。１は口径26.0㎝、口縁部長9.0㎝を測る口縁の大きく開く短胴タイプのものである。突帯が低平なＭ字形



第66図　埴輪集中区遺物出土状況図



第67図　埴輪集中区出土遺物

第27表　**埴輪集中区出土円筒埴輪観察表**（第67図）

番号	器種	胎土	焼成	色調	残存	外面調整　本/2cm	内面調整　本/2cm	備　　考
1	円筒	ＡＦＧＫ	Ｂ	Ｅ	55	縦ハケ　14	斜ハケ・指ナデ 14	
2	円筒	ＡＦＪＫ	Ｂ	Ｆ	30	縦ハケ　10	ナデ・斜ハケ　10	透孔一部残存
3	円筒	ＡＦＪＫ	Ａ	Ｅ	破片	縦ハケ　12	斜ハケ　12	
4	円筒	ＡＦＪ	Ｂ	Ｅ	破片	縦ハケ　10	横ハケ　10	内面にヘラ記号あり

を呈し、乳白色に焼き上がる。２～４もほぼ同じ特徴を示し、４は内面にヘラ記号が一部残存する。これらの特徴は、第28号墳出土の円筒埴輪の中に類似するものが含まれており、何らかの目的で埴輪を再利用した可能性も考えられよう。

時期的には６世紀中葉の古い段階に比定される。

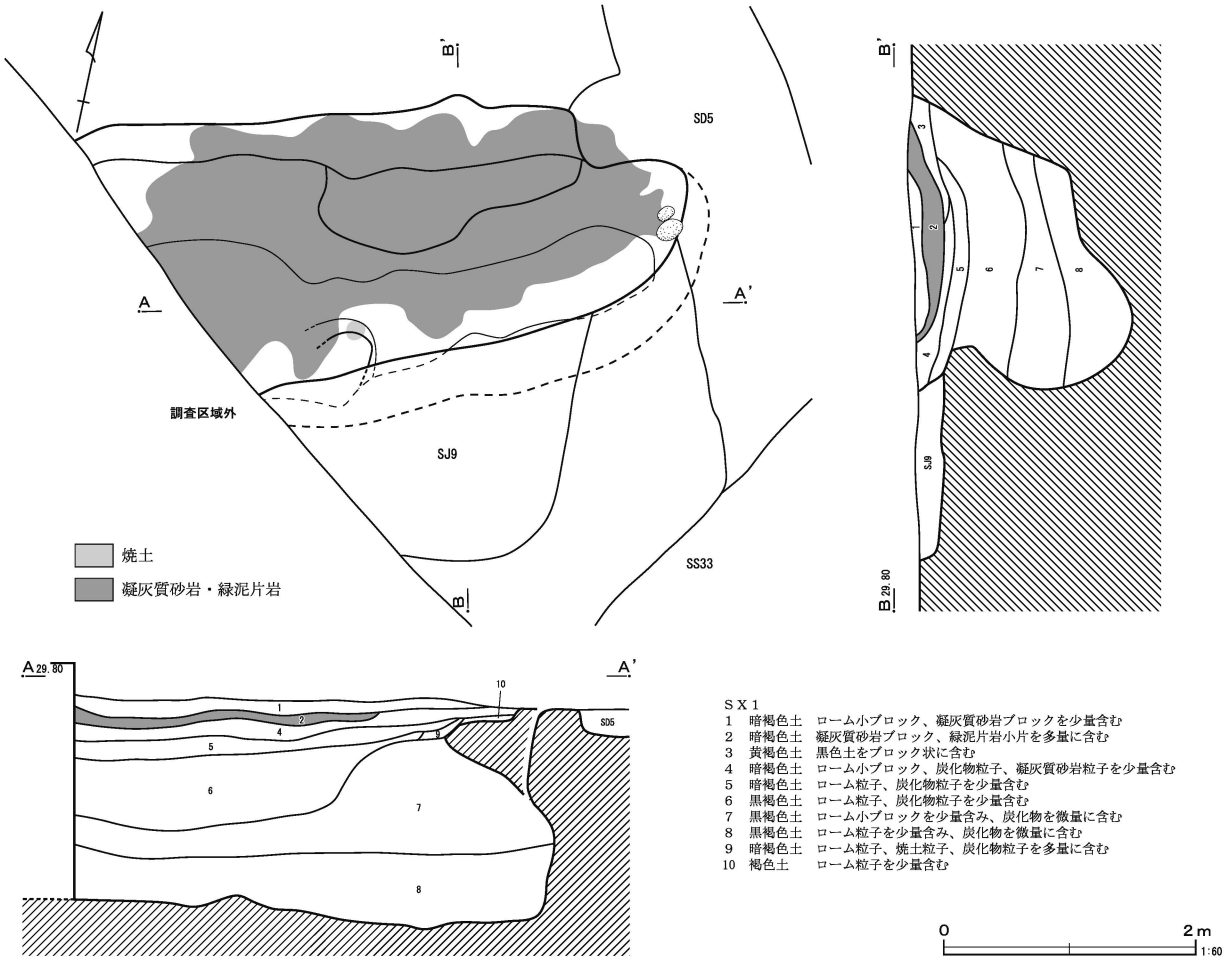
第１号性格不明遺構（第68図）

調査区北西端、Ｂ・Ｃ－４グリッドに位置する。第９号住居跡を壊して構築された大型の土壙である。試掘調査の際、一面に凝灰質砂岩の削屑と緑泥片岩の細片が広がり、また上面から湖西産の須恵器長頸瓶が出土したこともあって、横穴式石室の痕跡の可能性が指摘されていた。

慎重に確認作業をおこなった結果、確かにチョウナによって削った痕跡を残す凝灰質砂岩（**写真１**）が多量に出土しているものの、その多くは拳大ほどの不定形に割られており、石室構築材とは考えにくい。また、伴出する緑泥片岩もハッタ際に生じた細片（**写真２**）が多い。これらの点から、石室の構築過程において生じた不要な削屑を一括廃棄した可能

写真１　加工痕の残る凝灰質砂岩片
（チョウナ削りの連続加工痕。刃幅７～８㎝。）

写真２　緑泥片岩の細片
（玄門石や天井石に使用されたのであろうか。）

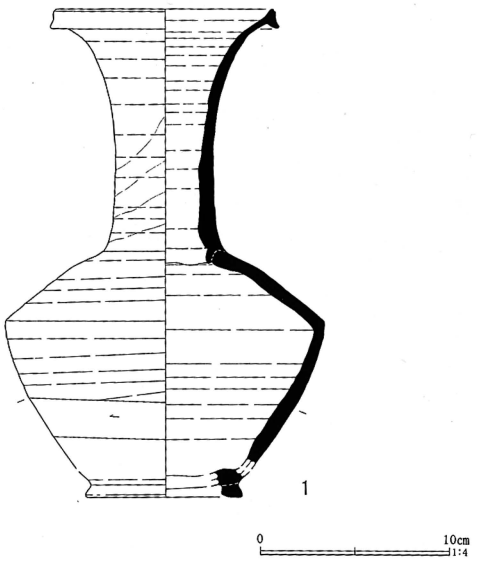


第68図　第１号性格不明遺構

性が考えられる。また、土層断面の観察によれば、これらの加工石材を含む土砂が北側から流入したことが明らかであった。

さらに下層を調査すると、長軸4.7ｍ以上、短軸2.5ｍ、深さ1.75ｍのローム土を袋状に大きく掘り込んだ不整形の土壙であることが判明した。壁面はオーバーハングし、天井部が大きく張り出していた。底面は凹凸があり、北側にステップ状の掘り残し部分と南側には焼土が認められた。

遺物は、第９号住居跡に伴う弥生土器が多く出土しているが、試掘調査の際に確認面から破砕された須恵器長頸瓶が出土した（第69図）。須恵器長頸瓶は、高台がつき外面に自然釉が付着する。湖西産と



第69図　第１号性格不明遺構出土遺物

第28表　**第１号性格不明遺構出土遺物観察表**（第69図）

番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	焼成	色　調	残存	出土位置	備　　考
1	須恵器長頸瓶	(11.5)	<25.7>	(8.2)	ＡＧＪ	良好	灰白	50	2トレンチ	口頸部～体部上半自然釉　湖西産

推定され、７世紀末葉から８世紀初頭の所産である。

これらの点からやや想像をたくましくすれば、この土壙の性格については、近隣における横穴式石室墳の築造に伴って、石室の裏込め、あるいは墳丘築成に必要なローム土を採土した土壙を黒色土で埋め戻し、さらにその上面に石室構築時に生じた加工石材の削屑を意図的に敷き詰めたものと考えられる。また湖西産須恵器の長頸瓶を破砕し、廃棄していることから古墳築造に伴う一連の儀礼行為の一端をうかがわせるものとして、注目されよう。

調査区出土遺物

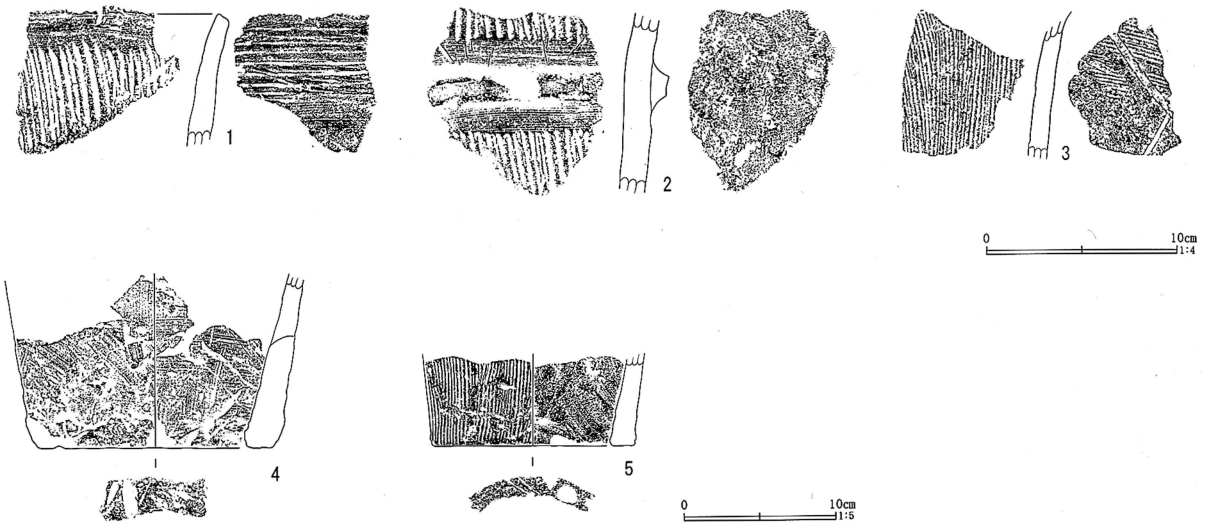
円筒埴輪（第70図）

帰属遺構の不明な円筒埴輪を一括する。１・２はハケメが粗く、突出度のある断面台形の突帯をもつもので、口縁部が外反せずに開く。１は外面を赤彩し、古相を呈する。６世紀前半にさかのぼるものと想定される。なお、第32号墳（第57図73・74）や第33号墳（第61図３）からも同様のものが出土しており、周辺にこの時期の古墳の存在を示唆する。３は内面に「×」と考えられるヘラ記号がみられる。４は外面に木口ナデ調整を施し、やや粗雑な仕上げである。５は胎土・焼成・色調・調整手法など第32号墳の円筒埴輪に共通しており、第１号溝跡に混入したものであろう。

形象埴輪（第71・72図）

形象埴輪は、第32号墳を東西に横断するように走行する第９・10号溝跡を中心に出土しており、第32号墳に伴うものが含まれている可能性が高い。

１～13は人物埴輪の破片である。１～３は島田髷の破片で、１・２は台形、３は撥形を呈する。４・５は顔の破片で、円環状の耳や顎の表現などが酷似しており、同一工人による作品と考えられる。頬から顎にかけて赤彩を施す。６は人物の顎から頸部にかけての破片で、背面を中心に頸飾の表現が残る。７は大刀の柄の部分で、粘土紐成形である。８は、掌に粘土紐を貼り付け、指を一本一本表現する。９～11は腕の破片で、いずれも木芯中空成形である。９は基部の破片、10は手首に近い部分、11は左腕



第70図　調査区出土円筒埴輪

第29表　**調査区出土円筒埴輪観察表**（第70図）

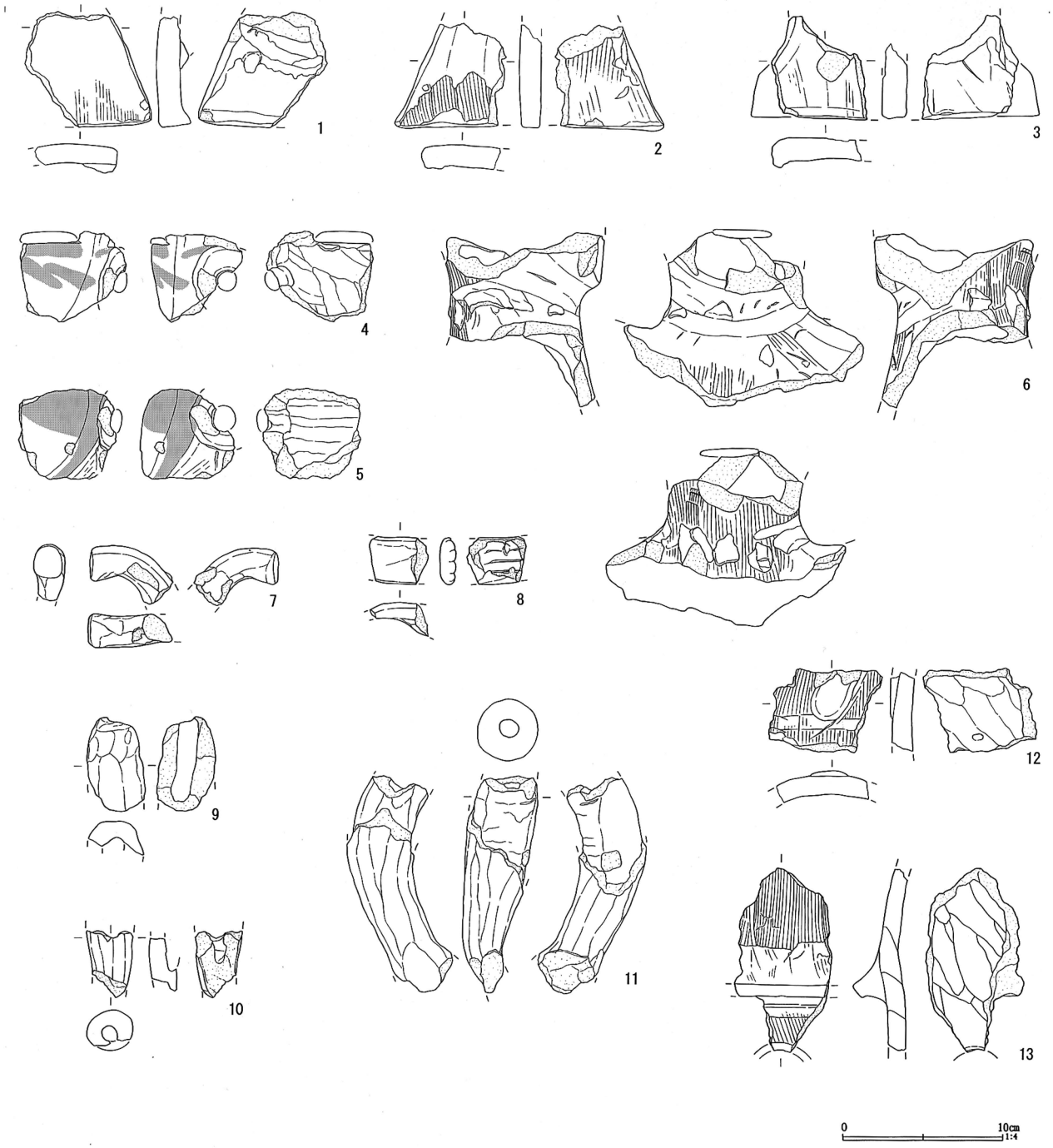
番号	器種	胎土	焼成	色調	残存	外面調整	本/2cm	内面調整	本/2cm	備　　考
1	円筒	ＡＦＪＫ	A	E	破片	縦ハケ	6	横ハケ	5	表採　外面赤彩
2	円筒	ＡＦＪＫ	A	E	破片	縦ハケ	7	ナデ		SD1 (C5G)
3	円筒	ＡＦＪＫ	A	D	破片	縦ハケ	10	ナデ・斜ハケ	10	B6G　内面ヘラ記号「×」か
4	円筒	ＡＦＪ	A	D	20	木口ナデ		ナデ		SD1 (C5G)　底面棒状圧痕
5	円筒	ＡＦＨＪ	A	B	25	縦ハケ	11	ナデ		SD1 (C5G)　底面平坦

であろう。12は胴においた掌を表現したものであろうか。13は円筒部に粘土紐を貼り付け裾部を表現した半身像であろう。

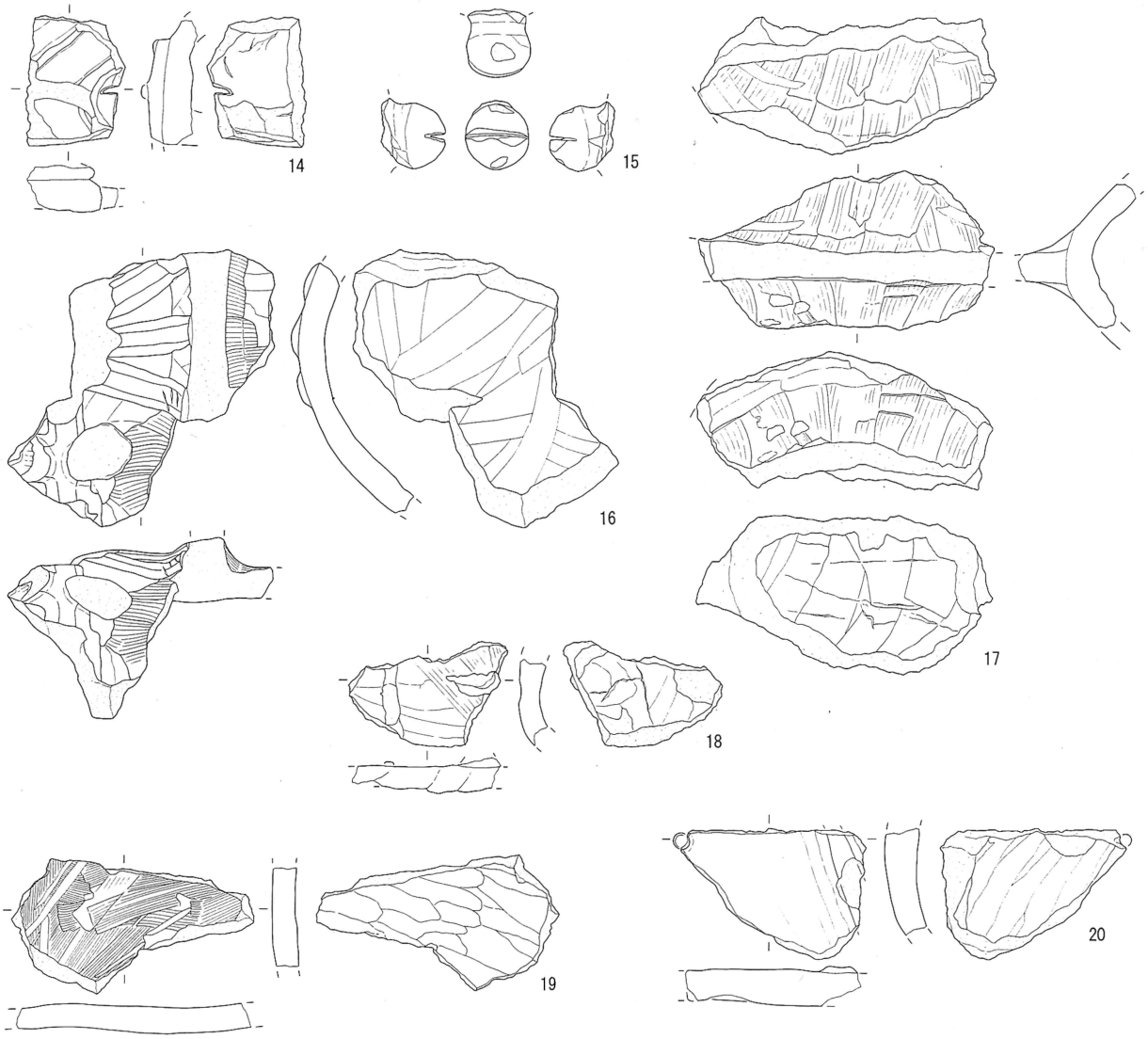
14～17・19は馬形埴輪の破片である。14はｆ字鏡版を装着した口部の破片で、口の切り込みがある。15は中実の鈴。16は後輪から雲珠に向ってのびる３本の革帯を粘土紐によって表現する。剥離しているが三鈴杏葉を垂下している。17は鬣部分の破片である。19は馬形埴輪の腹部の破片と考えられる。

18・20は不明形象埴輪である。18は板状の破片で、外面に粘土紐を貼付した剥離痕が残る。20は図示した左端に小円孔がみられる板状の破片である。

形象埴輪は木芯中空成形の腕や円環状の耳表現などに桜山窯跡群との共通表現がみられる。



第71図　調査区出土形象埴輪（1）



第72図　調査区出土形象埴輪（2）

0　10cm 1:4

第30表　**調査区出土形象埴輪観察表**（第71・72図）

番号	器種	胎土	焼成	色調	外面調整　本/2cm	内面調整　本/2cm	備　　考
1	人物　髷	ＡＦＨＪ	B	C	ハケメ・ナデ	ハケメ・ナデ	SD10 (C8G)　板状台形髷
2	人物　髷	ＡＦＨＪ	A	D	ハケメ・ナデ　10	ハケメ・ナデ　8	SD9 (B9G)　板状台形髷
3	人物　髷	ＡＦＨＪ	A	C	縦ハケ　11	ナデ・斜ハケ　10	SD10 (B9G)　板状撥形髷
4	人物　顔面	ＡＦＨＪ	A	C	ナデ	ナデ	SR1東溝　目から頬にかけて赤彩
5	人物　顔面	ＡＦＨＪ	A	C	ナデ	ナデ	SD10 (B9G)　頬から顎にかけて赤彩
6	人物　頭部	ＡＦＨＪ	A	D	ハケメ・ナデ　10	ナデ	SD10 (試掘)　顎粘土帯貼付　頸飾剥離
7	人物　刀柄	ＡＦＨＪ	A	B	ナデ	ナデ	C7G　粘土紐成形
8	人物　掌	ＡＧＨ	A	D	ナデ	ナデ	SD9 (B9G)　指粘土紐成形　掌に剥離痕あり
9	人物　腕	ＡＦＧＨ	A	D	指頭圧痕	ナデ	SK13 (E9G)　腕基部　木芯中空成形
10	人物　腕	ＡＦＧＨ	A	D	ナデ		E9G　木芯中空成形　中空部螺旋状痕あり
11	人物　左腕	ＡＦＨＪ	A	C	ナデ	ナデ	SD10　木芯中空成形
12	人物　胴部	ＡＦＧＨ	A	F	縦ハケ　10	ナデ	C6G　外面粘土紐貼付 (掌か)
13	人物　裾部	ＡＦＧＨ	A	B	縦ハケ・横ナデ　11	指ナデ	SD10 (B9G)　外面白泥付着　透孔一部残存
14	馬　鏡板	ＡＦＨＫ	A	C	ナデ	ナデ	SD10 (D6G)　ｆ字形鏡板　右側頭部
15	馬　鈴	ＡＦＨＪ	A	B	ナデ		SD10 (D7G)　粘土塊成形
16	馬　尻繋	ＡＦＨＪ	A	D	ハケメ　10	ナデ	SD1 (C5G)・SD9 (B9G)　三鈴杏葉の表現
17	馬　鬣	ＡＦＨＫ	A	D	ハケメ　11	ナデ	SD10 (C8G)　鬣粘土板貼付
18	不明	ＡＦＨＪ	A	C	ハケメ・ナデ	ナデ・粘土紐痕	SD9　外面粘土紐剥離痕　馬か
19	馬　腹部	ＡＦＨＪ	A	D	ハケメ　18	ナデ	SD10 (C5G)　粘土帯成形
20	不明	ＡＦＨＪ	B	C	ナデ	ナデ	SD10　外面突帯貼付　小円孔あり

4．中・近世の調査

今回の調査で検出された中・近世の遺構は、溝跡９条、室跡３基、集石土壙１基、土壙57基、ピット78基である。遺物には板碑や北宋銭などの中世のものも若干含まれているが、17世紀後半から18世紀前半のものが中心である。

次に、今回調査された中・近世の遺構・遺物の位置づけを考える上で重要な歴史的背景について簡単にふれておきたい。天正18年（1590）の徳川氏の関東国替え後、毛塚村は、隣接する宮鼻村、香仏寺村、田木村、岩殿村とともに横田尹松（ただまつ）（1554～1635）に知行され、以後横田氏によって領地支配されることとなった。横田尹松は、武田信玄・勝頼の二代に仕え足軽大将を勤めたが、武田氏没落後、家康に召抱えられている。寛永12年（1635）に尹松が亡くなると、その遺領五千石は三男述松（のぶとし）が継ぎ、そのうち一千石が弟胤松（たねとし）に分知された。その結果、宮鼻五ヶ村は東西両分の相給知行とされ、毛塚村に在郷して地方支配に当たっていた家臣関口孫兵衛・坂本庄右衛門の二人が、それぞれ西分・東分の地役代官となったことが知られている（東松山市1985）。

さて、今回の第４次調査区は東分の地役代官である坂本家の屋敷地の西側に隣接するとともに、その墓所が調査区南側の薬師堂裏手に所在する。また古老の話によれば、地元では調査地点の場所を「中屋敷」と呼んでいたという。このように今回の調査で検出された近世の遺構や遺物は、代官屋敷との関連性のうかがわれるものと考えられる。

（1）溝跡

第１号溝跡（第73図）

Ｃ・Ｄ－５グリッドに位置する。直線的に南北へ延び、南端部は斜面の傾斜に合わせ緩やかに東へ屈曲する。二段に掘り込み、両側にテラス面を作り、数箇所にピットが掘り込まれている。埋土中には拳大から人頭大の円礫が多量に廃棄されており、何らかの境界を意識した区画溝と考えられる。規模は確認長17.2ｍ、幅1.36～2.0ｍ、深さ0.37ｍ。

遺物は、円礫に混じって陶磁器、羽口、板碑、石器が出土したほか、サザエ、アワビ、ハマグリなどの貝殻がまとまって出土した（第80図）。

石器には５の敲石、６・７の磨石がある。敲石は上半部を欠損し、底面は平坦で、敲打による細かい剥離がみられる。ドングリなどの堅果類を潰すために使用したものと考えられ、民俗例にある「トチノミ潰し」に類似する用途に用いられたのであろう。ただし、弥生時代の石器の可能性も残る。

第２号溝跡（第74図）

調査区西端のＤ・Ｅ－４グリッドに位置する。北東から南西に向かって直線的に延び、北東端部で第３号溝跡と重複する。確認長6.0ｍ、幅1.48ｍ、深さ0.36ｍを測り、断面台形である。底面は、土壙状に浅く窪んでいたが、おおむね平坦である。

遺物は総じて少なく、弥生土器、須恵器などの破片が出土しただけで、時期を示す遺物はない。

第３号溝跡（第74図）

調査区西側のＤ－４グリッドに位置する。北西から南東へ向かって延び、第２号溝跡、第33号墳と重複する。確認長5.1ｍ、幅1.34ｍ、深さ0.28ｍで、底面は平坦である。

遺物は少なく、縄文土器や弥生土器とともにロクロ土師器の坏の破片が出土した。

第４号溝跡（第75図）

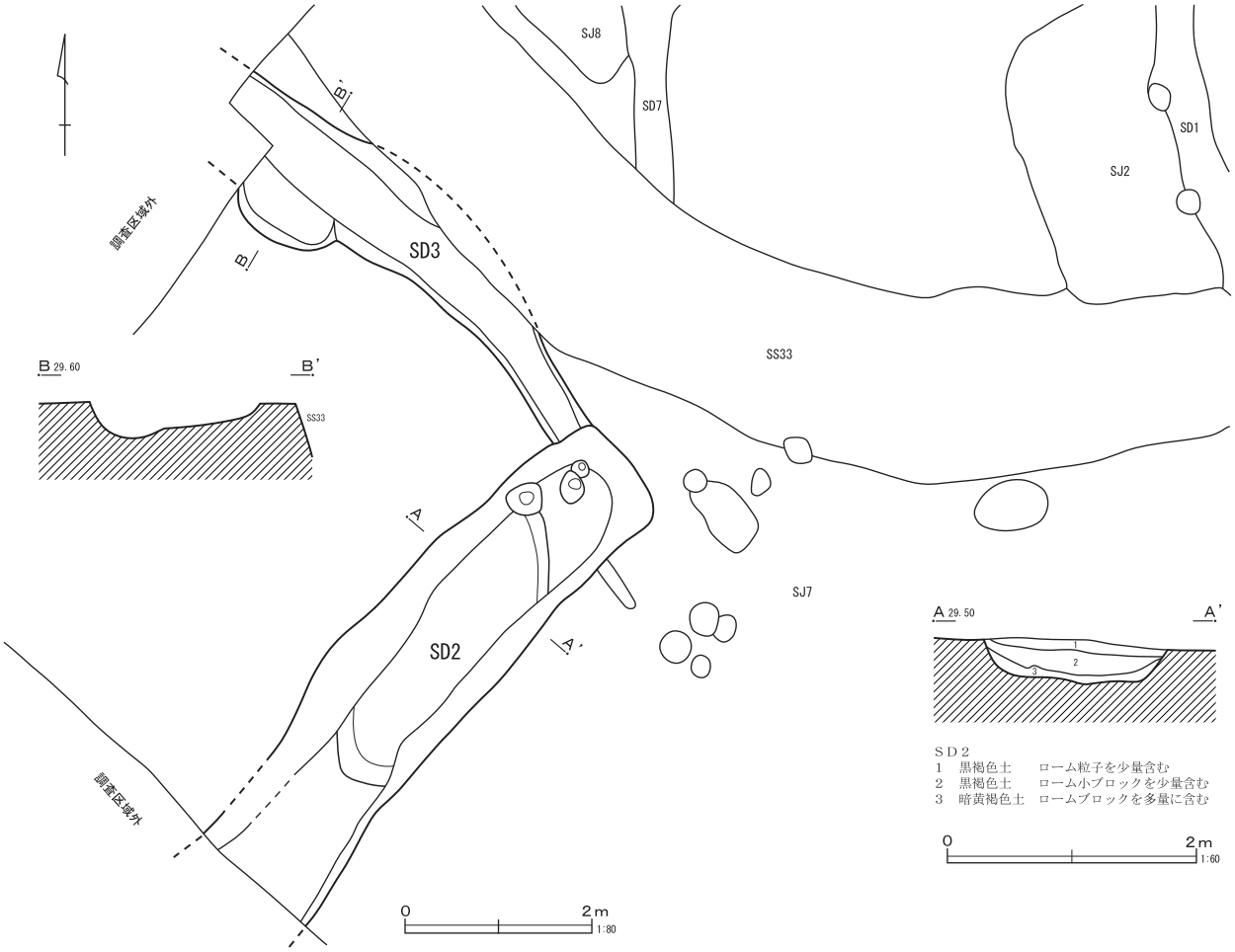
調査区北側のＢ・Ｃ－５～７グリッドに位置する。第32号墳と第33号墳の周溝を結ぶように東西方向に直線的に延び、西側は第33号墳の墳裾をかすめながら、周溝に沿って走行する。確認長23.2ｍ、幅0.58ｍ、深さ0.2ｍを測る幅狭の溝で、断面箱形を呈する。遺物は総じて少なく、弥生土器や埴輪片などのほかに、小鉄塊１点が出土した。

第５号溝跡（第76図）

調査区北西側のＢ・Ｃ－４グリッドに位置する。第１号性格不明遺構、第33号墳と重複する。南北方向に緩やかにカーブを描いて延び、第７号溝跡と

調査区域外
撹乱
SS33
SD4
SJ3
SJ6
SJ4
SJ5
SD6
未調査部分
A
A'
B
B'
SD7
SJ2
A 29.60
A'
B 29.60
B'
SD1
1　明褐色土　ローム粒子を少量含む
2　明褐色土　ローム小ブロックを多量に含む
3　明褐色土　ロームブロックを多量に含む
4　暗褐色土　ローム小ブロックを少量含む
5　黄褐色土　ローム土を主体とする
0
2m
1:60
0
2m
1:80

第73図　第1号溝跡



第74図　第２・３号溝跡

方向が一致することから同一の溝跡と考えられる。確認長9.2ｍ、幅1.27ｍ、深さ0.26ｍで、底面は平坦である。

遺物は少なく、弥生土器が少量出土した。

第６号溝跡（第77図）

調査区中央北側のＣ－６・７グリッドに位置する。第32号墳の周溝と第33号墳の周溝を結ぶように大きくカーブしながら延びている。確認した長さは約12.4ｍを測り、南端部は斜面の傾斜に沿って浅くなる。溝幅は最も広いところで1.76ｍ、狭いところで1.1ｍ、深さは0.37～0.65ｍである。また、第５号住居跡との重複部分には、別遺構と考えられる袋状の土壙が認められた。その規模は径2.1×1.6ｍ、深さ0.6ｍで、壁面は大きくオーバーハングしており、性格については不明である。

遺物は少なく、わずかに焙烙の破片が出土した。

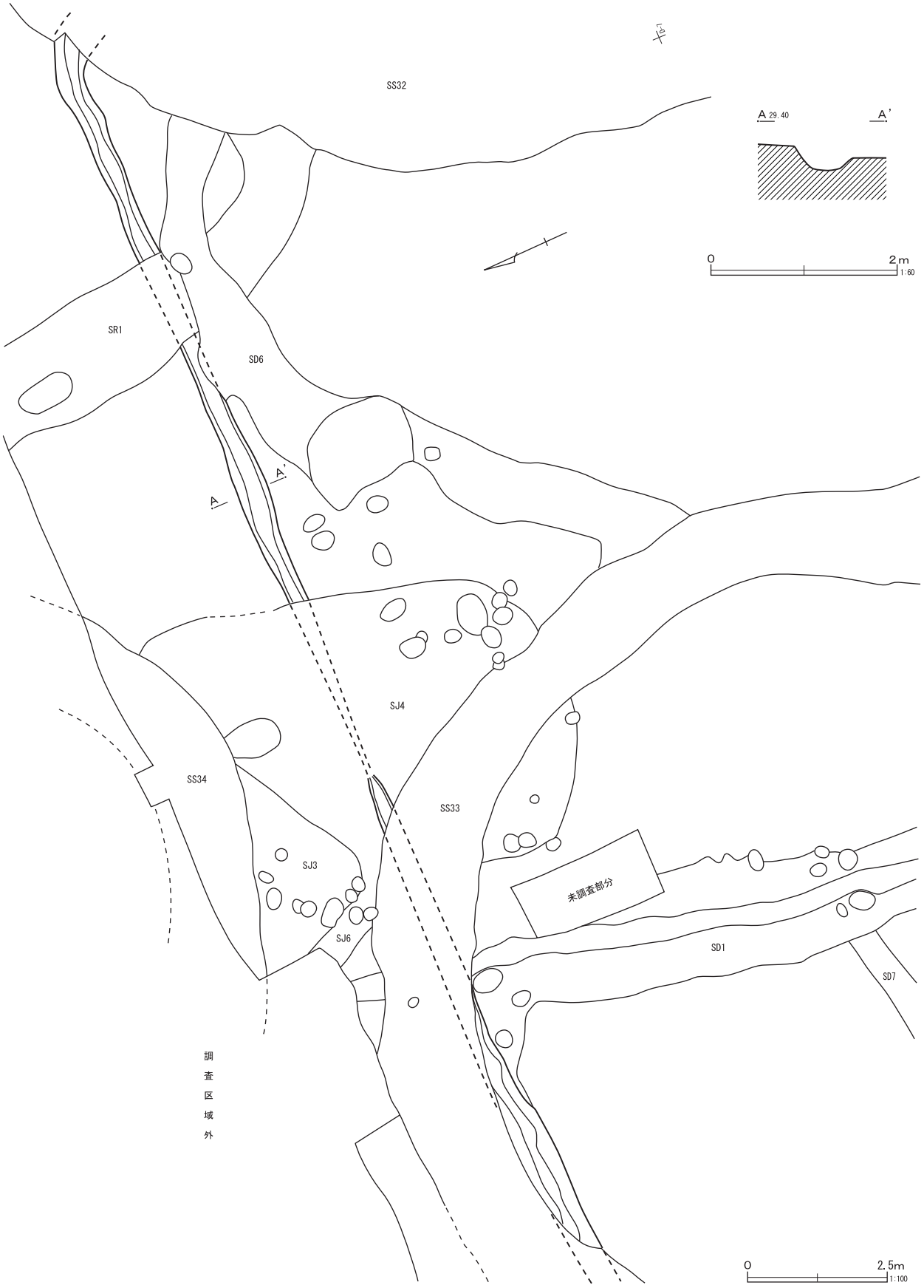
第７号溝跡（第76図）

調査区西側のＣ－４・５、Ｄ－４グリッドに位置する。第１号溝跡から西へ向かい、第８号住居跡との重複部分で南へと向きを変えたようである。しかし、調査時には南流する第５号溝跡との先後関係については明確にし得なかった。幅0.5ｍ前後で掘り込みは全体に浅い。遺物は、弥生土器の小片が出土しただけでほかには出土していない。

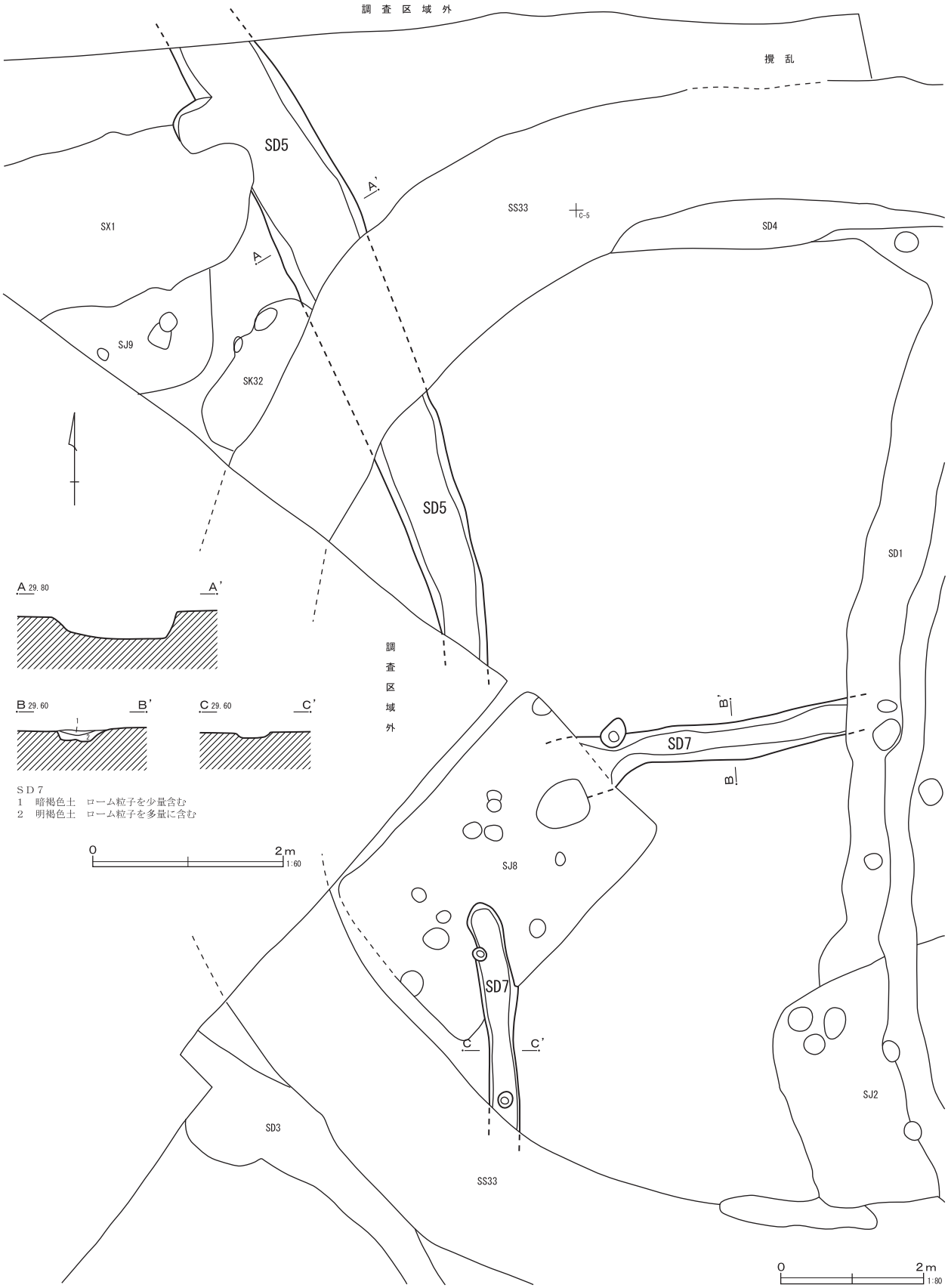
第９号溝跡（第78図）

調査区北東側のＢ－８・９グリッドに位置する。台地平坦部を東西方向に走行し、第10号溝跡と一部重複する。確認長13.6ｍ、幅0.84ｍ、深さ0.3ｍを測り、北側にテラス状の張り出し部が付属する。

遺物は、陶器小皿、灯明皿、常滑の甕、捏鉢、磁器碗、焙烙、羽釜などの土器類と、芯棒受けが残る石臼、敲石、円盤状の銅製飾金具が出土した。


SS32
A 29.40
A'
0
2m
1:60
SR1
SD6
A
A'
SJ4
SS34
SS33
SJ3
SJ6
未調査部分
SD1
SD7
調査区域外
0
2.5m
1:100

第75図　第４号溝跡


調査区域外
撹乱
SD5
SX1
SS33
SD4
SJ9
SK32
SD5
SD1
A 29.80
A'
B 29.60
B'
C 29.60
C'
調査区域外
SD7
SJ8
SD7
SJ2
SD3
SS33
SD7
1　暗褐色土　ローム粒子を少量含む
2　明褐色土　ローム粒子を多量に含む
0
2m
1:60
0
2m
1:80

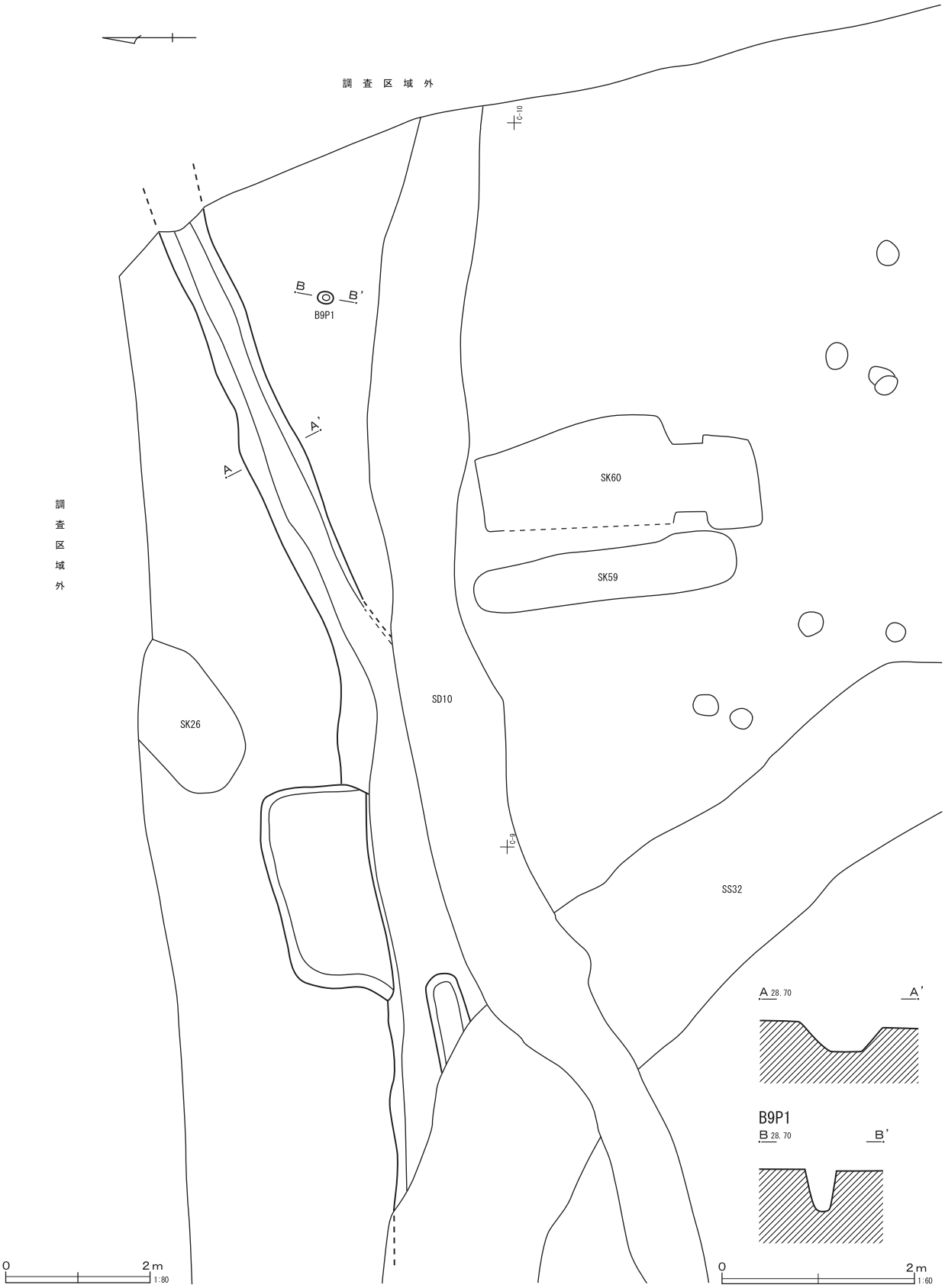
第76図　第５・７号溝跡

第10号溝跡（第79図）

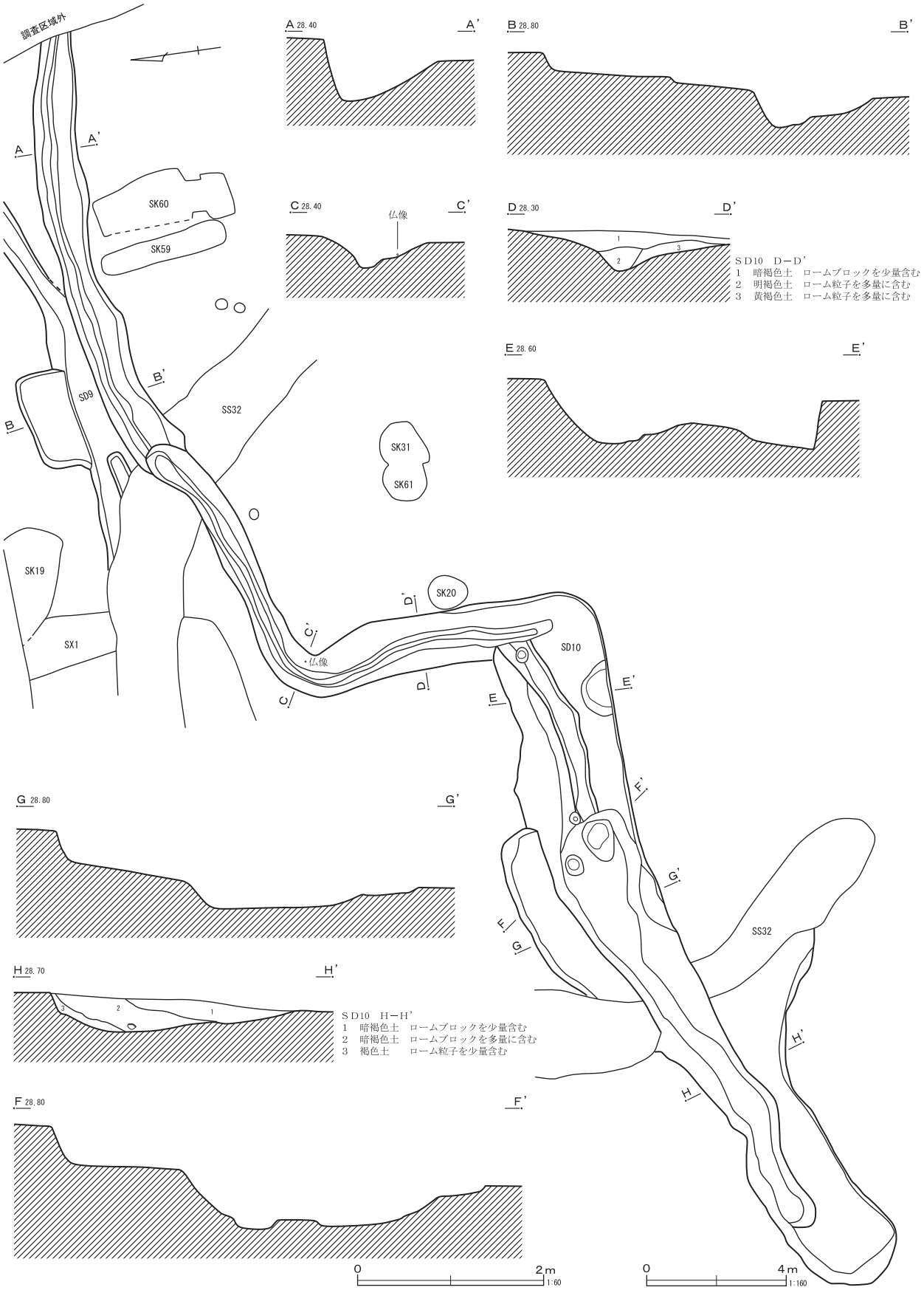
調査区北側のＢ－８～10、Ｃ－７・８、Ｄ－６～８グリッドに位置する。２箇所で直角に屈曲しながら東西方向に延び、第32号墳の墳丘部分を大規模に削平しながら横断する。幅２ｍを越える部分もある。

遺物は、陶磁器、焙烙、擂鉢、土師質皿、砥石、石臼、磨石、板碑、火打金、鉄釘などの多種・多様な遺物が出土した。陶磁器類は主に18世紀代の製

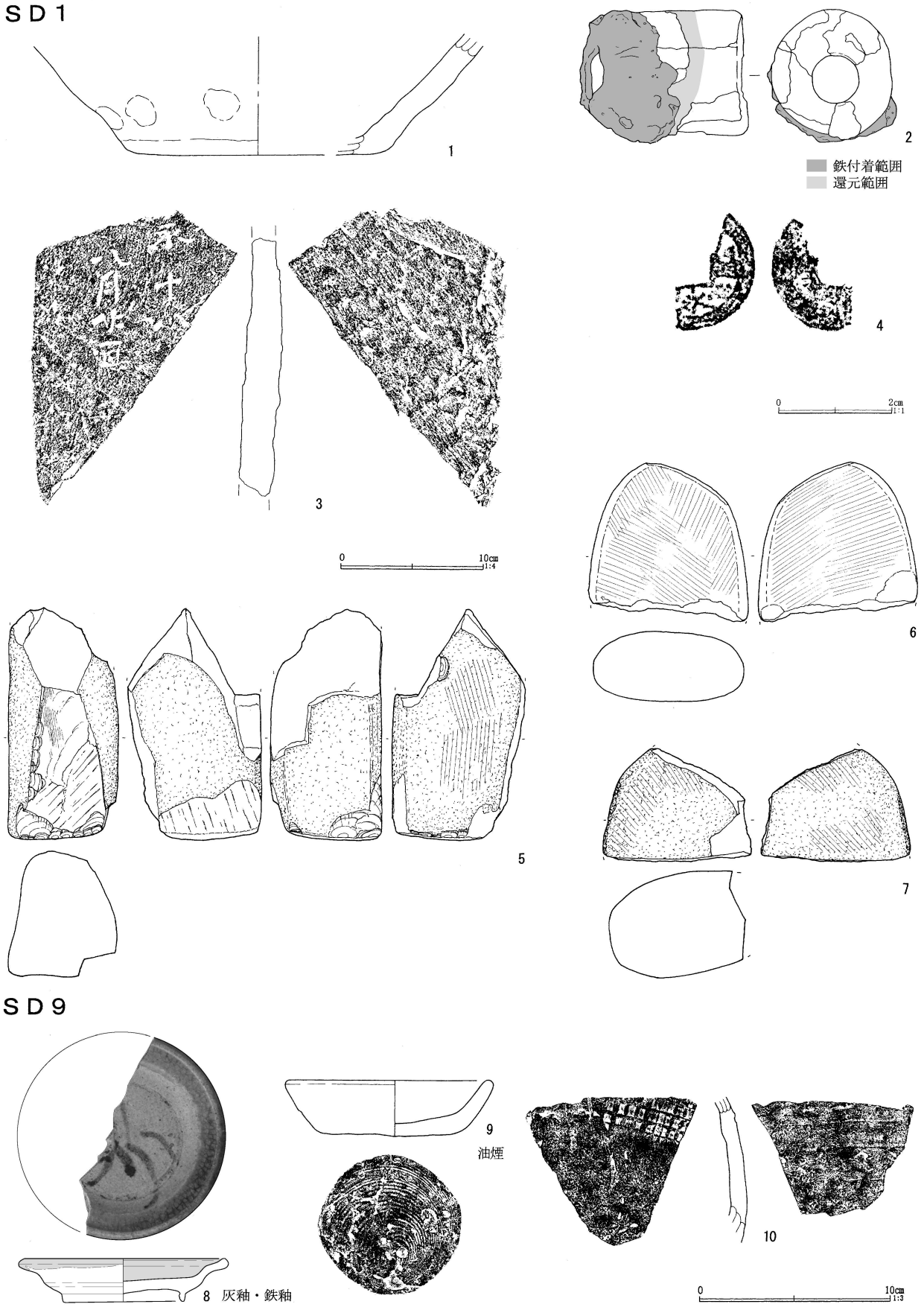
第77図　第６号溝跡


調査区域外
調査区域外
B
B'
B9P1
A
A'
SK60
SK59
SK26
SD10
SS32
A 28.70
A'
B9P1
B 28.70
B'
0
2m
1:80
0
2m
1:60

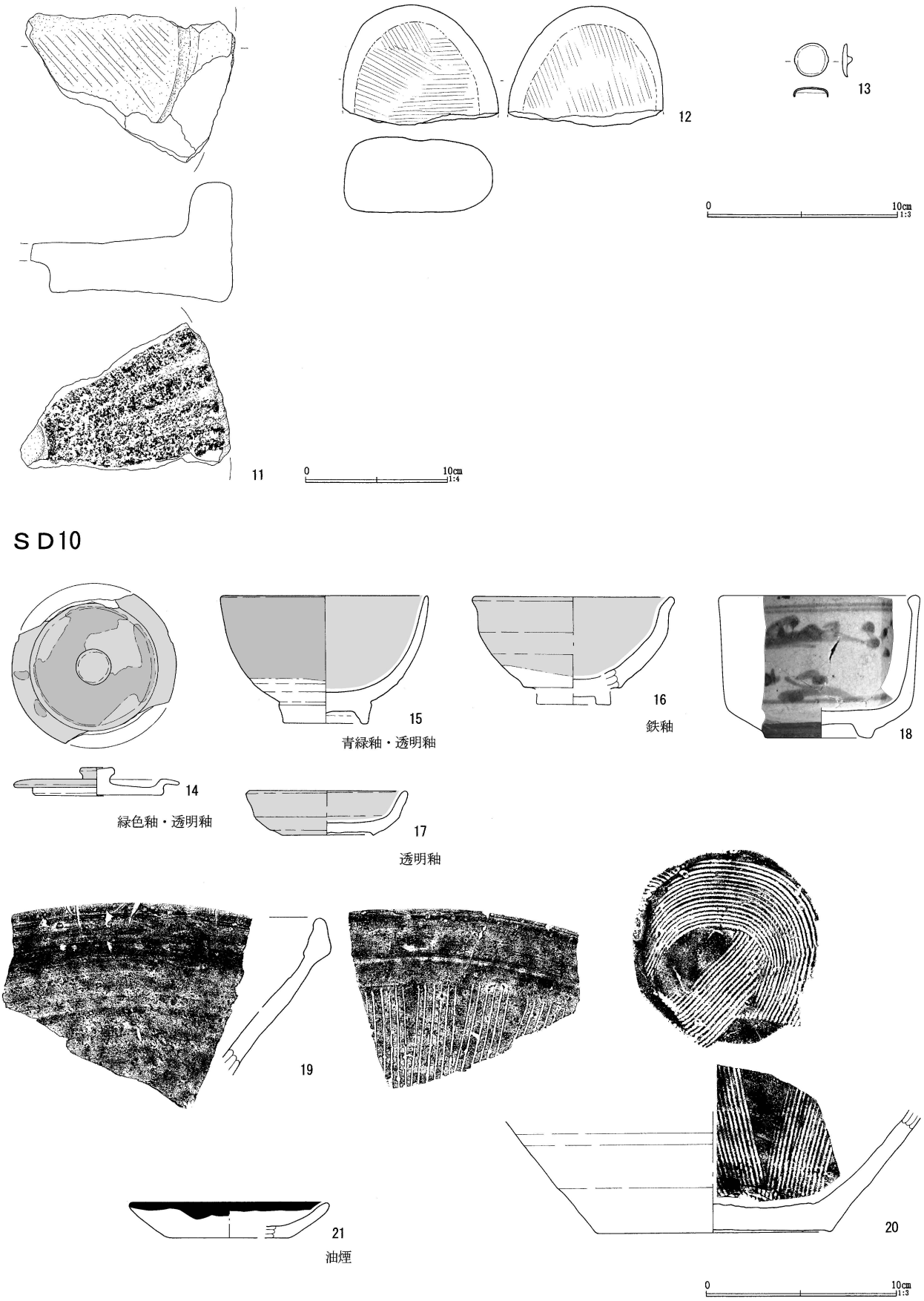
第78図　第９号溝跡


調査区域外
A 28.40
A'
B 28.80
B'
C 28.40
C'
仏像
D 28.30
D'
SD10　D－D'
1　暗褐色土　ロームブロックを少量含む
2　明褐色土　ローム粒子を多量に含む
3　黄褐色土　ローム粒子を多量に含む
E 28.60
E'
SK60
SK59
SD9
SS32
SK31
SK61
SK19
SX1
SK20
SD10
G 28.80
G'
H 28.70
H'
SD10　H－H'
1　暗褐色土　ロームブロックを少量含む
2　暗褐色土　ロームブロックを多量に含む
3　褐色土　ローム粒子を少量含む
F 28.80
F'
0
2m
1:60
0
4m
1:160

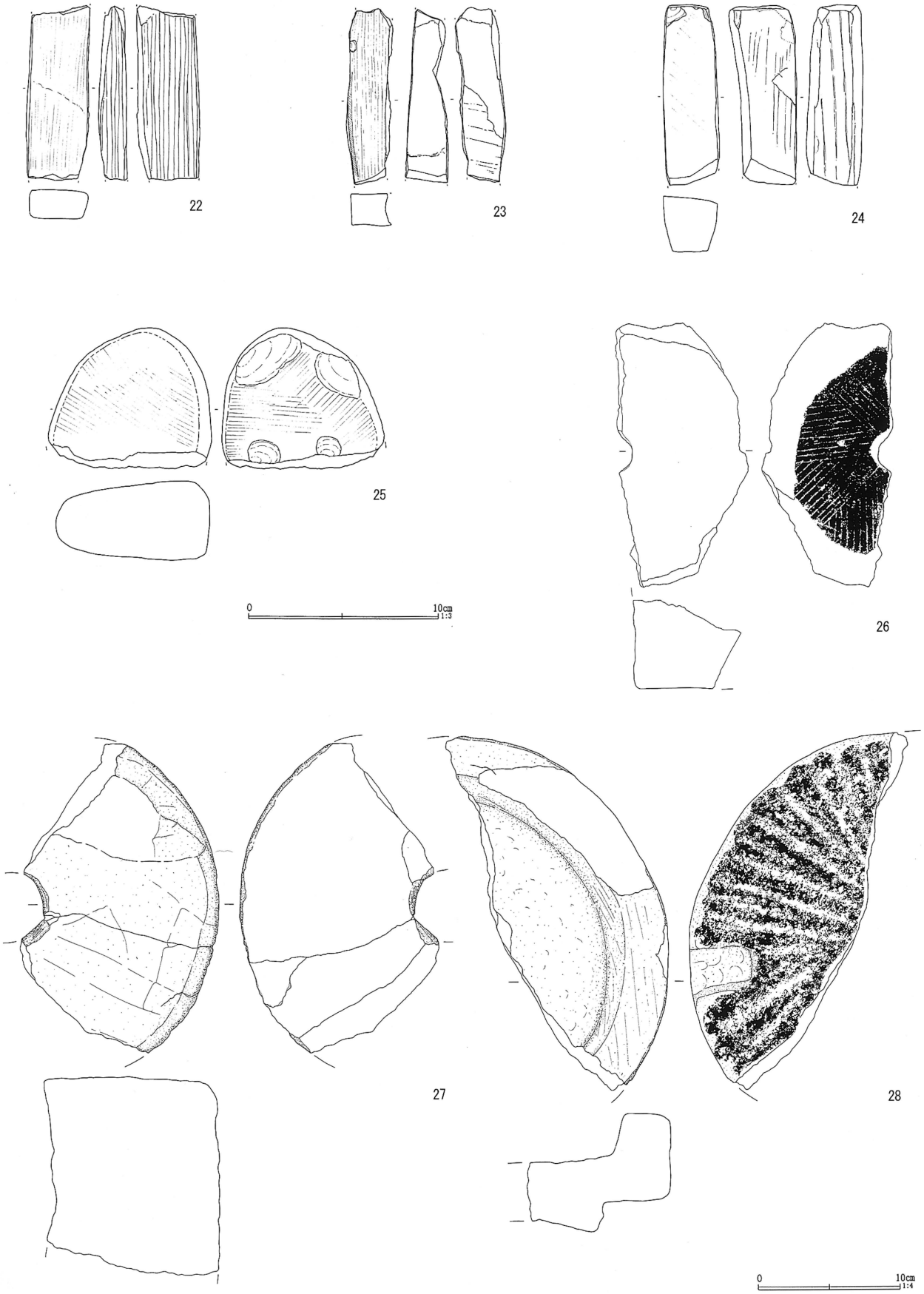
第79図　第10号溝跡



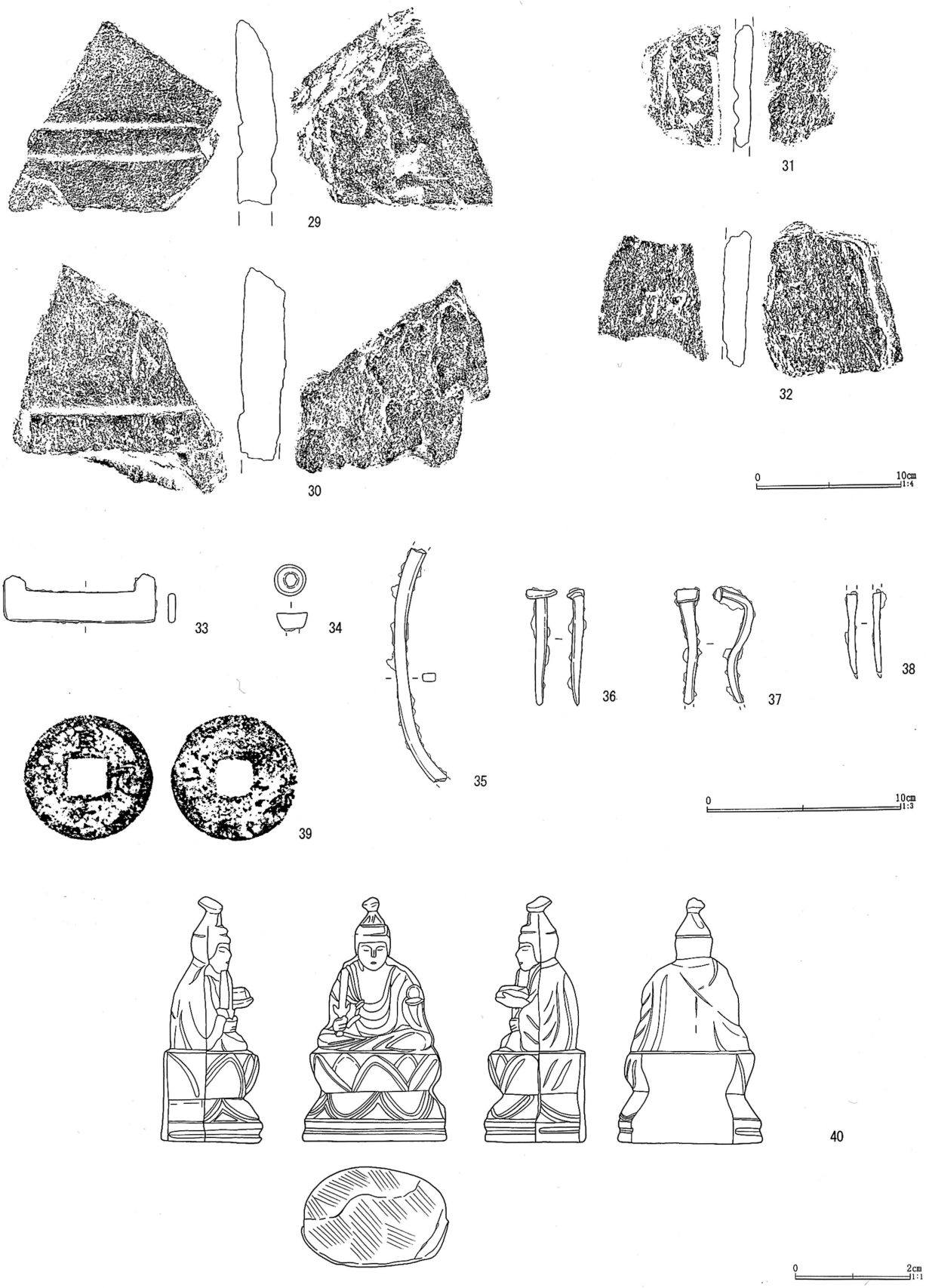
第80図　溝跡出土遺物（1）



第81図　溝跡出土遺物（2）



第82図　溝跡出土遺物（3）



第83図　溝跡出土遺物（4）

品である。中でも、溝が直角に折れ曲がった位置から人頭大の円礫とともに出土した小型の鋳銅製仏像は注目される。蓮華座の上に座り、頭上には大きな髻を結び、右手に宝剣を持っている。その表現から一髻文殊菩薩座像と考えられる。文殊菩薩は通常経巻を左手に持っているが、この場合は篋箱を掌に載せていたようである。衣は線彫りで襞を柔らかく表現する。鋳造製で、鋳型の合せ目が明瞭に残る。底面には鑢がけした擦痕がある。念持仏として日常身に着けたり、身近に置いて拝んでいたのであろう。

第31表　**第１号溝跡出土遺物観察表**（第80図）

番号	材質	器種	法量(cm)(g)	石材	備　　考
1	土器	鉢	現存高6.3　底径(13.8)		
2	土製品	羽口	長径8.9　短径6.1　孔径2.5　厚2.0　重量288		ガラス質付着
3	石製品	板碑	現存長18.3　現存幅15.0　厚2.5	緑泥片岩	□永十八　八月□日
4	銅製品	銭貨	銭径2.3　内径1.7　銭厚0.1　量目1.0		1/2欠損　新寛永通寶か
5	石器	敲石	現存長12.2　幅7.0　厚5.9　重量677.1	砂岩	弥生時代の石器の可能性が残る
6	石器	敲石	現存長8.4　幅8.4　厚3.9　重量399.4	閃緑岩	
7	石器	敲石	現存長6.0　幅7.8　厚5.7　重量362.5	砂岩	

第32表　**第９号溝跡出土遺物観察表**（第80・81図）

番号	材質	器種	法量(cm)(g)				形状	文様 石材	備　　考
			口径	器高	底径	－			
8	陶器	小皿	11.2	2.3	(6.4)		稜皿形	笹か	瀬戸・美濃系　灰釉・鉄釉
9	土器	灯明皿	(10.9)	2.9	7.4		平形 無高台		内外面油煙付着
10	炻器	甕							常滑産　外面格子目文
11	石製品	石臼	現存長14.9　器高8.5				上臼	安山岩	
12	石器	敲石	現存長6.3　幅8.3　厚4.1　重量301.3					安山岩	
13	銅製品	飾金具	径1.8×1.75　高0.5　厚0.1　重量1.4						外縁に一対の爪状の突起がつく

第33表　**第９号溝跡出土遺物観察表**（第80・81図）

番号	材質	器種	法量(cm)(g)				形状	文様 石材	備　　考
			口径	器高	底径	口受幅			
14	陶器	土瓶蓋	8.8	1.5	1.8	7.0			透明釉・緑色釉
15	陶器	中碗	(11.1)	7.8	4.5		丸形		外面青緑釉　内面透明釉
16	陶器	中碗	(10.8)	＜4.9＞			天目形		鉄釉
17	陶器	小皿	(8.6)	2.3	(4.9)		盤形		透明釉
18	陶器	香炉	(10.8)	7.7	5.6		半筒形	草か	
19	炻器	擂鉢					口縁無装飾		常滑産
20	炻器	擂鉢		＜6.4＞	12.4				常滑産
21	土器	灯明皿	(10.6)	1.9	(6.2)		平形 無高台		口縁部に油煙付着
22	石器	砥石	現存長9.3　幅3.4　厚1.5　重量68.5					凝灰岩	三面に鋸切痕
23	石器	砥石	現存長9.3　幅2.6　厚2.3　重量69.3					凝灰岩	
24	石器	砥石	現存長9.6　幅3.0　厚3.6　重量153.8					凝灰岩	三面に鋸切痕
25	石器	敲石	現存長7.5　幅8.6　厚4.5　重量409.8					安山岩	
26	石製品	石臼	現存長18.8　器高<6.3>　孔径(2.6)				上臼	砂岩	茶臼　８分割11本
27	石製品	石臼	現存長22.18　器高18.0					砂岩	
28	石製品	石臼	現存長25.4　器高8.5				上臼	砂岩	６分割６本
29	石製品	板碑	現存長13.1　現存幅14.8　厚2.9					緑泥片岩	山形から二条線にかけての破片
30	石製品	板碑	現存長16.5　現存幅15.0　厚3.4					緑泥片岩	山形から額部の破片
31	石製品	板碑	現存長8.9　現存幅5.5　厚1.1					緑泥片岩	種子あり
32	石製品	板碑	現存長10.8　現存幅9.7　厚1.8					緑泥片岩	銘文あり
33	鉄製品	火打金	長8.0　幅2.4　厚0.4　重量25.4						コの字型
34	銅製品	煙管	火皿径1.6　重量2.5						雁首
35	鉄製品	棒状品	現存長12.3　厚0.45×0.65　重量16.0						断面矩形　緩やかに屈曲
36	鉄製品	釘	長6.1　頭部幅1.65　厚0.6　重量8.1						
37	鉄製品	釘	現存長6.1　頭部幅1.2　厚0.5　重量9.5						
38	鉄製品	釘	現存長4.3　幅0.6　重量2.2						
39	銅製品	銭貨	銭径2.2　内径1.9　銭厚0.1　量目2.1						新寛永通寶
40	銅製品	仏像	総高4.3　像高2.7　台座高1.6　台座幅2.5　重量55.4						鋳型の合せ目が残る

（2）室跡

江戸遺跡において「地下室（ちかむろ）」と呼称される、地下を利用して空間（主体部）を設け、各種の目的に利用された遺構を、ここでは「室跡（むろあと）」として通有の土壙から区分した。構築時期については、共伴遺物がなく明確でないが、近世の所産と考えられる。性格については、貯蔵施設としての「穴蔵」や「地下式麹室」などが想定されているが、特定できない。

今回の調査では室跡が３基検出されている。ただし、調査期間や作業の安全性などを考慮して、縦坑状に掘り込まれた出入口部のみの調査にとどめ、主体部の精査を断念した。

第１号室跡（第84図）

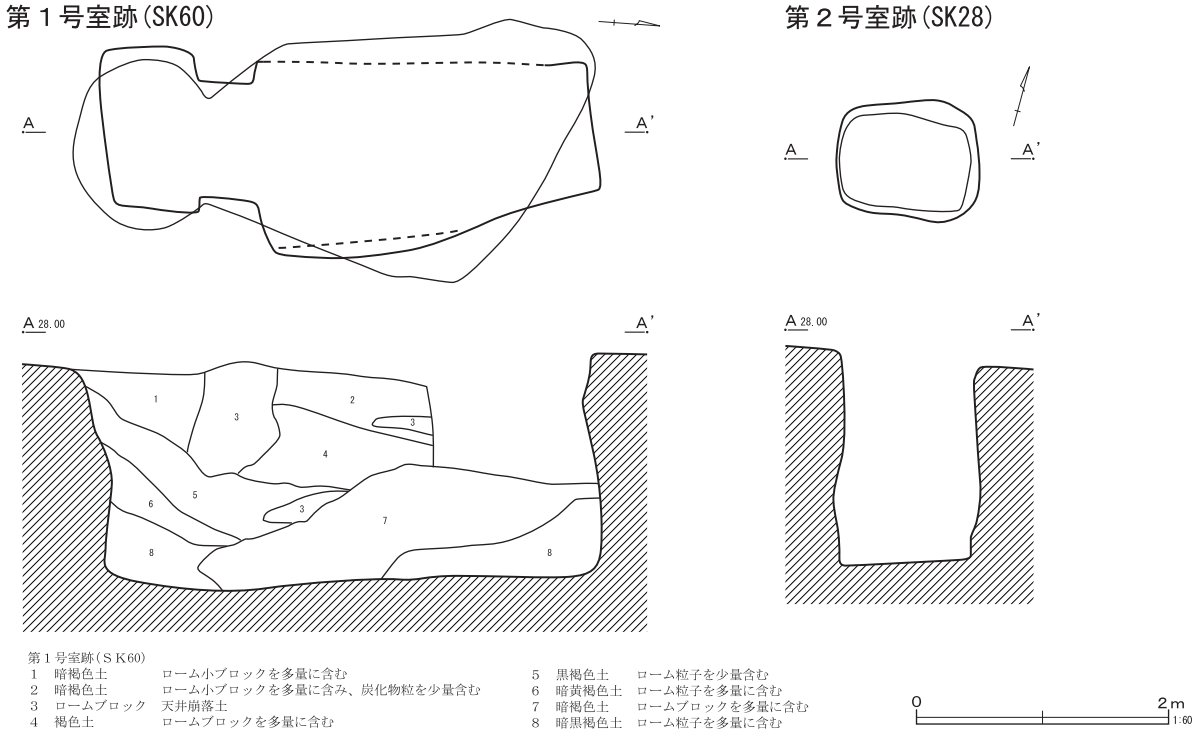
調査区東側のＢ・Ｃ－９グリッドに位置する。旧番号は第60号土壙である（略号：ＳＫ60）。台地平坦部に構築され、第10号溝跡の南に接している。出入口部を南に設け、主体部を北におく。全長3.85ｍ、主体部長2.67ｍを測り、主軸方位はＮ－４°－Ｗを指す。出入口部は、垂直に掘られた縦坑で、平面形は長方形を呈し、確認面からの深さ1.75ｍを測る。出入口部と主体部の間には玄門状の短い通路が介在している。主体部は完掘できなかったが、奥壁に向かって幅を減じる羽子板形と推定され、前壁幅1.5ｍ、奥壁幅1.05ｍを測る。壁面は大半が崩落していたが、遺存部は平滑に仕上げられていた。天井部も同様に崩落していたが、ロームの天井部をもっていたことが土層断面からうかがわれた。

遺物は埋土上層から容器形の不明石製品、石臼片、煙管吸口が出土したほか、図示しなかったが陶磁器、焙烙、土師質皿、在地産擂鉢などが出土している。近世の所産としてよいだろう。

第２号室跡（第84図）

調査区中央のＥ－７グリッドに位置する。旧番号は第28号土壙である（略号：ＳＫ28）。長方形を呈する縦坑状の出入口部を南に設け、主体部は第32号墳の南周溝と重複する。出入口部のみの調査で、確認面からの深さ1.75ｍを測る。壁面は全体に平滑に仕上げられていた。

遺物は、擂鉢、焙烙の破片が出土していることから近世の所産と考えられる。

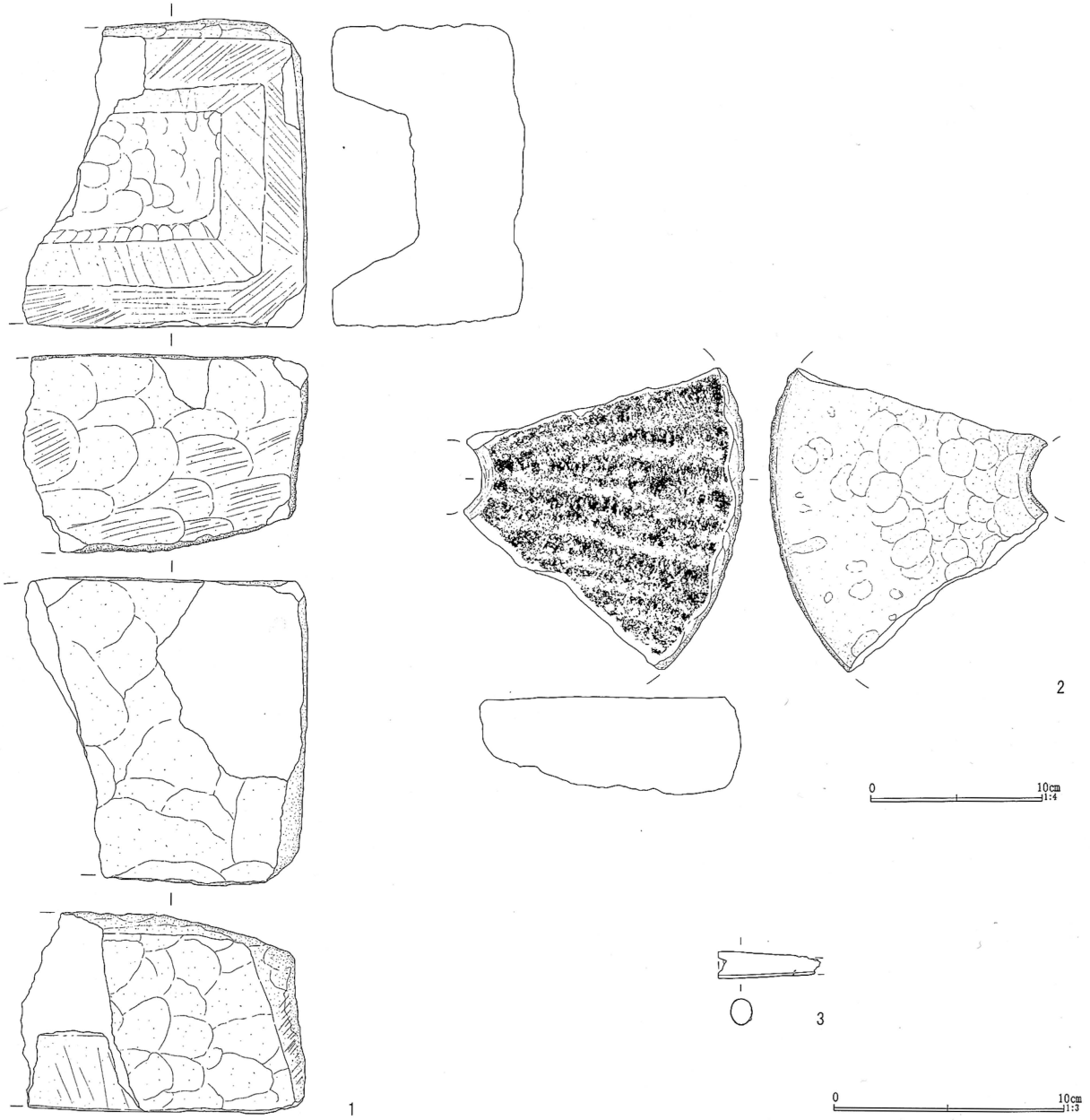


第84図　第１・２号室跡

第３号室跡（第89図）

調査区東側のＣ－８グリッドに位置する。旧番号は第61号土壙である（略号：ＳＫ61）。東側に接する第31号土壙を出入口部が一部壊している。主体部は調査できなかったが、北側に延びることがボーリング探査で確認された。出入口部は不整円形の掘り込みで、確認面からの深さ1.13ｍを測る。

遺物は図示していないが、陶器瓶、磁器、石英（火打ち石か）、焼土塊などが出土した。時期は近世の所産と考えられる。



第85図　第１号室跡出土遺物

第34表　**第１号室跡出土遺物観察表**（第80図）

番号	材質	器種	法量(cm)(g)	形状	石材	備　考
1	石製品	不明製品	現存長18.3×16.7　高11.8		安山岩	容器形　盆栽の鉢か
2	石製品	石臼	現存長16.4　高6.5	下臼	安山岩	
3	銅製品	煙管	現存長4.5　径1.1×0.9　厚0.05　重量2.6			吸口

（3）集石土壙

第１号集石土壙（第86図）

調査区南側斜面部のＦ－７グリッドに位置し、第１号住居跡の南に近接する。

平面形は不整形で、長軸1.35ｍ、短軸1.1ｍ、主軸方向はＮ－42°－Ｗを指す。確認面からの掘り込みは８㎝と浅く、底面上に暗黄褐色粘質土を貼り、その上に拳大の円礫を一ないし二重に敷き詰めていた。おそらく、保水性を高める工夫であろう。集石はややまばらで焼礫などを含まず、埋土にも焼土や炭化物の混入はほとんどなかった。また主軸線上の南東側に接して、径33㎝、深さ13㎝のピットが掘り込まれ、その内部にも礫が詰め込まれていた。埋土はローム粒子を含む暗褐色土である。

遺物がまったく出土していないため、時期や性格については不明である。なお、表土掘削時に周囲に同様の礫の集中箇所が認められており、畠などの耕作に関わる何らかの施設の可能性も考えられる。

（4）土壙

中・近世の所産と考えられる土壙は合計57基を検出した。調査区南東部下位斜面を中心に分布しており、周囲にはピットが多数存在する。とりわけ第40～45号土壙周辺は段切状の削平面が確認されている。土壙の平面形態は、長方形と円形を基調とするものが多い。ここでは、該期の遺物を出土した土壙を中心に説明を加え、その他については第35表の土壙一覧表で説明にかえたい。

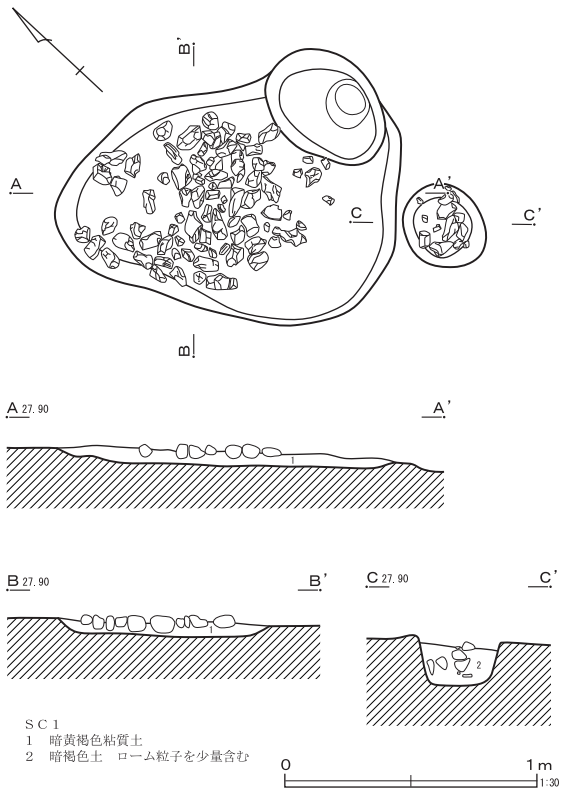
第14号土壙（第88図）

Ｅ・Ｆ－９グリッドに位置し、長方形の土壙が重複したような形態を呈している。

遺物は図示していないが、染付けの磁器、桐の家紋を型押した火鉢の破片などが出土した。

第20号土壙（第88図）

Ｃ－８グリッドに位置する楕円形平面の土壙である。断面箱形を呈し、陶器、染付け大碗、焙烙、土師質皿、砥石、皿状銅製品、鉄釘、貝殻などが出土した。皿状銅製品は薄い銅版を皿状に延ばしたもの



第86図　第１号集石土壙

であるが、性格や用途については不明である。

第21号土壙（第88図）

Ｄ・Ｅ－５グリッドに位置する楕円形平面の土壙である。遺物は図示していないが、磁器の仏飯具、焙烙の破片などが出土した。

第22号土壙（第88図）

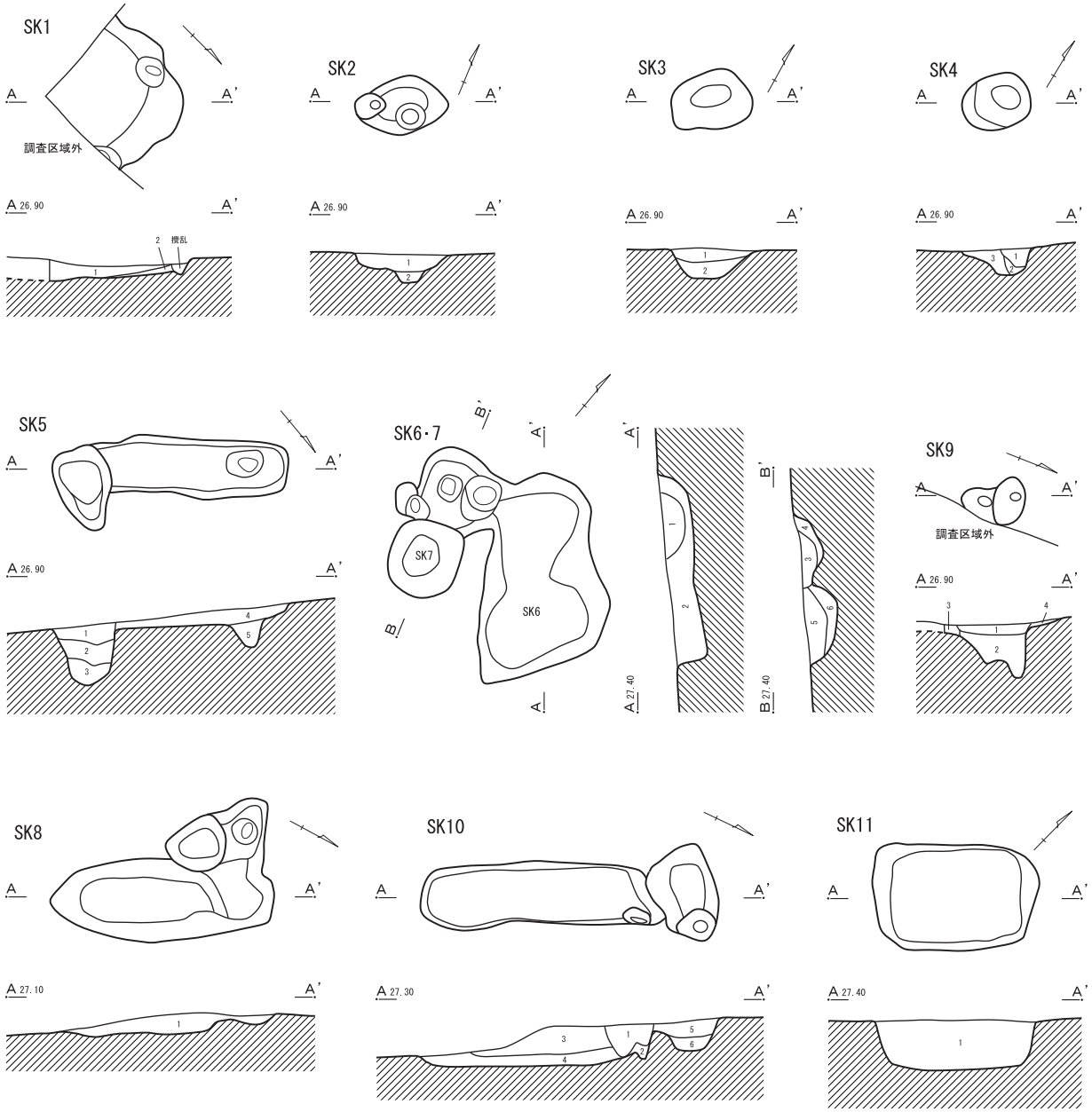
Ｅ－５グリッドに位置する掘り込みの浅い不整形の土壙である。遺物は、陶器香炉、備前系京焼風小鉢片、鉄釘が出土した。

第23号土壙（第89図）

Ｅ－５グリッドに位置する円形の土壙で、断面形は摺鉢状を呈する。埋土上層から中層にかけて人頭大の円礫が出土し、それに混じって陶器三島出鉢、灯明皿（平皿耳付）、染付け瓶、焙烙、砥石、板碑、握り鋏、焼けた土壁が出土した。板碑片には光明真言や「禅門　修」などの銘文が刻まれていた。

第24号土壙（第89図）

Ｅ－６グリッドに位置する不整形平面の土壙で、掘り込みは浅い。遺物は磁器中碗、焙烙が出土した。



ＳＫ１
1　暗褐色土　ローム粒子を少量含む
2　褐色土　　小礫を少量含む

ＳＫ２
1　暗黒褐色土　ローム小ブロックを多量に含む
2　黒褐色土　　ローム小ブロックを少量含む

ＳＫ３
1　暗褐色土　　ローム粒子を少量含む
2　明黄褐色土　ローム土を主体とする

ＳＫ４
1　暗褐色土　ローム粒子を少量含む
2　暗褐色土　ローム小ブロックを少量含む
3　褐色土　　ローム小ブロックを多量に含む

ＳＫ５
1　黒褐色土　ローム粒子を少量含み、焼土粒子を微量に含む
2　黄褐色土　ローム土を主体とする
3　黒褐色土　ローム粒子を少量含む
4　暗褐色土　ローム粒子を多量に含み、ロームブロックを少量含む
5　暗褐色土　ローム土を主体とする

ＳＫ６・７
1　暗褐色土　ローム粒子を少量含む
2　暗褐色土　ローム小ブロックを多量に含み、焼土粒子を少量含む
3　暗褐色土　ローム粒子を少量含む
4　暗褐色土　ロームブロックを多量に含む
5　褐色土　　ローム粒子を多量に含む
6　褐色土　　ロームブロックを多量に含む

ＳＫ８
1　暗褐色土　ロームブロックを多量に含む

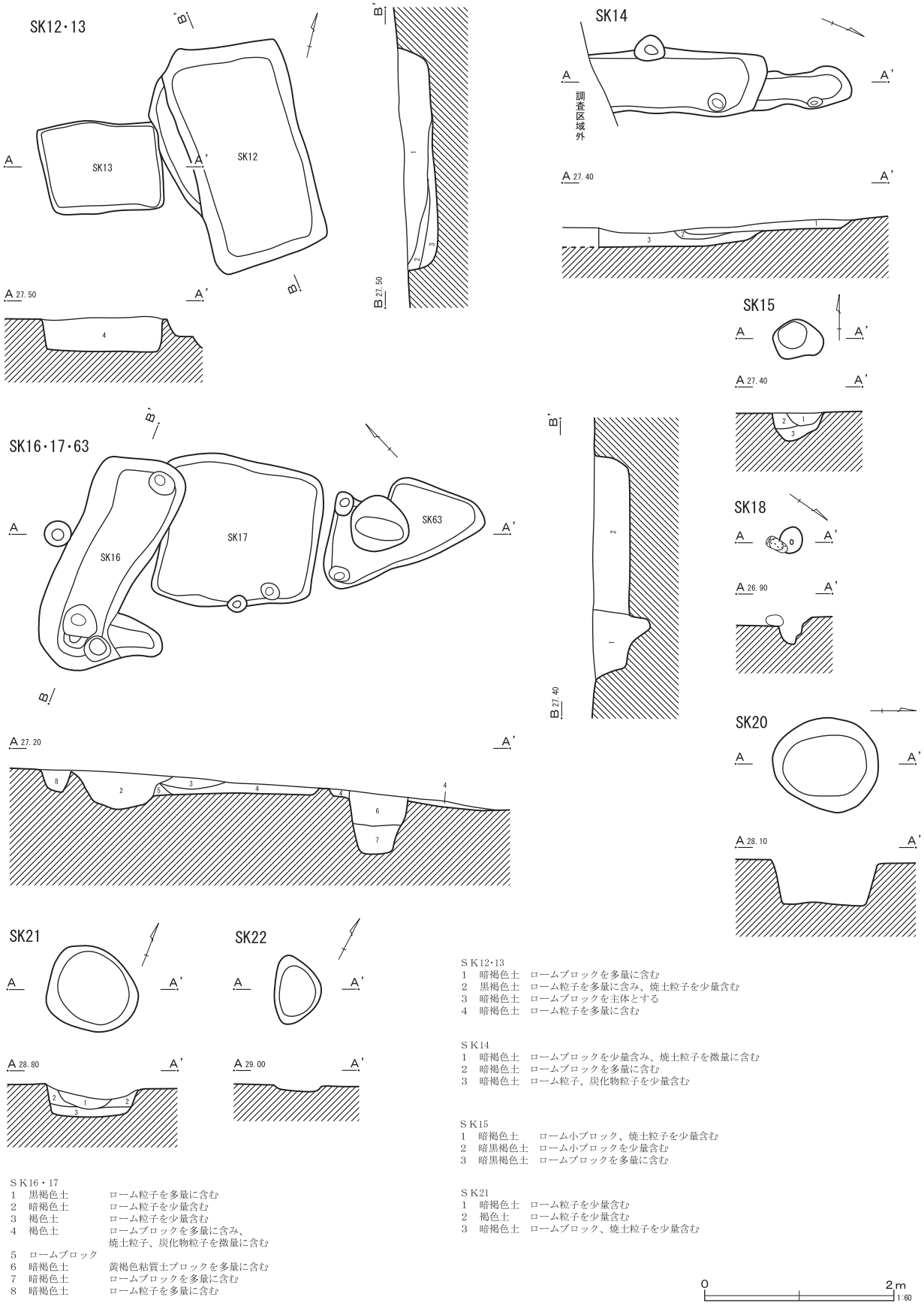
ＳＫ９
1　暗褐色土　　ローム粒子を少量含む
2　暗褐色土　　ローム粒子を多量に含む
3　暗褐色土　　ローム小ブロックを少量含む
4　明黄褐色土　ローム土を主体とする

ＳＫ10
1　暗褐色土　　ローム粒子を少量含む
2　明黄褐色土　ロームブロックを多量に含む
3　暗褐色土　　ローム粒子を多量に含む
4　暗褐色土　　ロームブロックを多量に含む
5　明黄褐色土　ローム粒子を多量に含む
6　暗黄褐色土　ロームブロックを多量に含み、炭化物粒子を少量含む

ＳＫ11
1　暗褐色土　ローム粒子を多量に含み、ローム小ブロックを少量含む

0　2m
1:60

第87図　土壙（1）



ＳＫ12・13
1　暗褐色土　ロームブロックを多量に含む
2　黒褐色土　ローム粒子を多量に含み、焼土粒子を少量含む
3　暗褐色土　ロームブロックを主体とする
4　暗褐色土　ローム粒子を多量に含む

ＳＫ14
1　暗褐色土　ロームブロックを少量含み、焼土粒子を微量に含む
2　暗褐色土　ロームブロックを多量に含む
3　暗褐色土　ローム粒子、炭化物粒子を少量含む

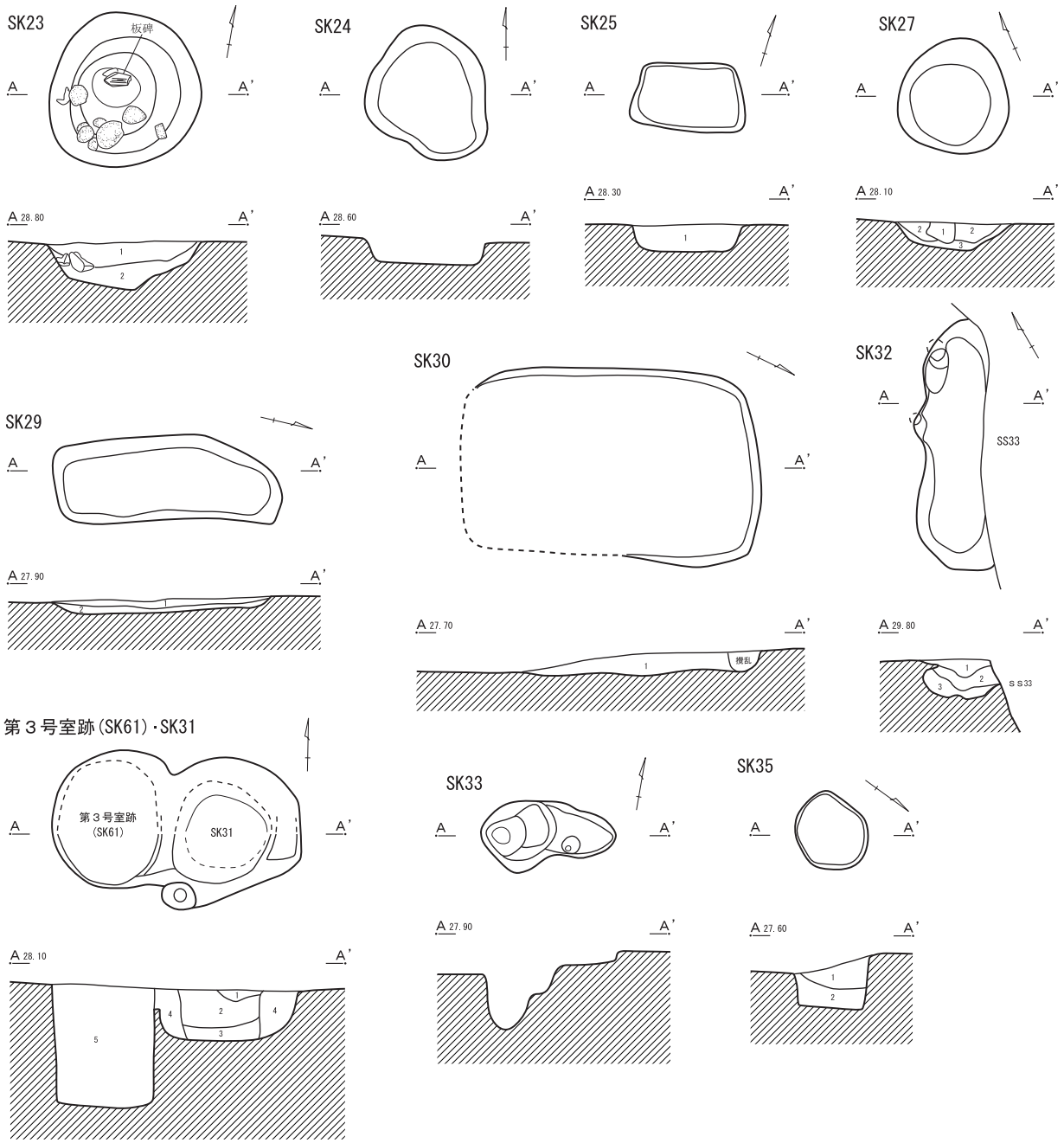
ＳＫ15
1　暗褐色土　　ローム小ブロック、焼土粒子を少量含む
2　暗黒褐色土　ローム小ブロックを少量含む
3　暗黒褐色土　ロームブロックを多量に含む

ＳＫ21
1　暗褐色土　ローム粒子を少量含む
2　褐色土　　ローム粒子を少量含む
3　暗褐色土　ロームブロック、焼土粒子を少量含む

ＳＫ16・17
1　黒褐色土　　ローム粒子を多量に含む
2　暗褐色土　　ローム粒子を少量含む
3　褐色土　　ローム粒子を少量含む
4　褐色土　　ロームブロックを多量に含み、焼土粒子、炭化物粒子を微量に含む
5　ロームブロック
6　暗褐色土　　黄褐色粘質土ブロックを多量に含む
7　暗褐色土　　ロームブロックを多量に含む
8　暗褐色土　　ローム粒子を多量に含む

0　2m
1:60

第88図　土壙（2）



ＳＫ23
1　褐色土　　ロームブロックを多量に含む
2　暗褐色土　ローム粒子を多量に含み、焼土ブロック・炭化材を含む

ＳＫ25
1　褐色土　ローム粒子を少量含む

ＳＫ27
1　灰褐色土　焼土粒子、炭化物粒子を少量含む
2　褐色土　　焼土ブロック、炭化物を多量に含む
3　褐色土　　ロームブロック、焼土ブロックを多量に含む

ＳＫ29
1　暗褐色土　炭化材を多量に含む
2　褐色土　　炭化物粒子を少量含む

ＳＫ30
1　暗褐色土　ローム粒子を多量に含み、焼土粒子を微量に含む

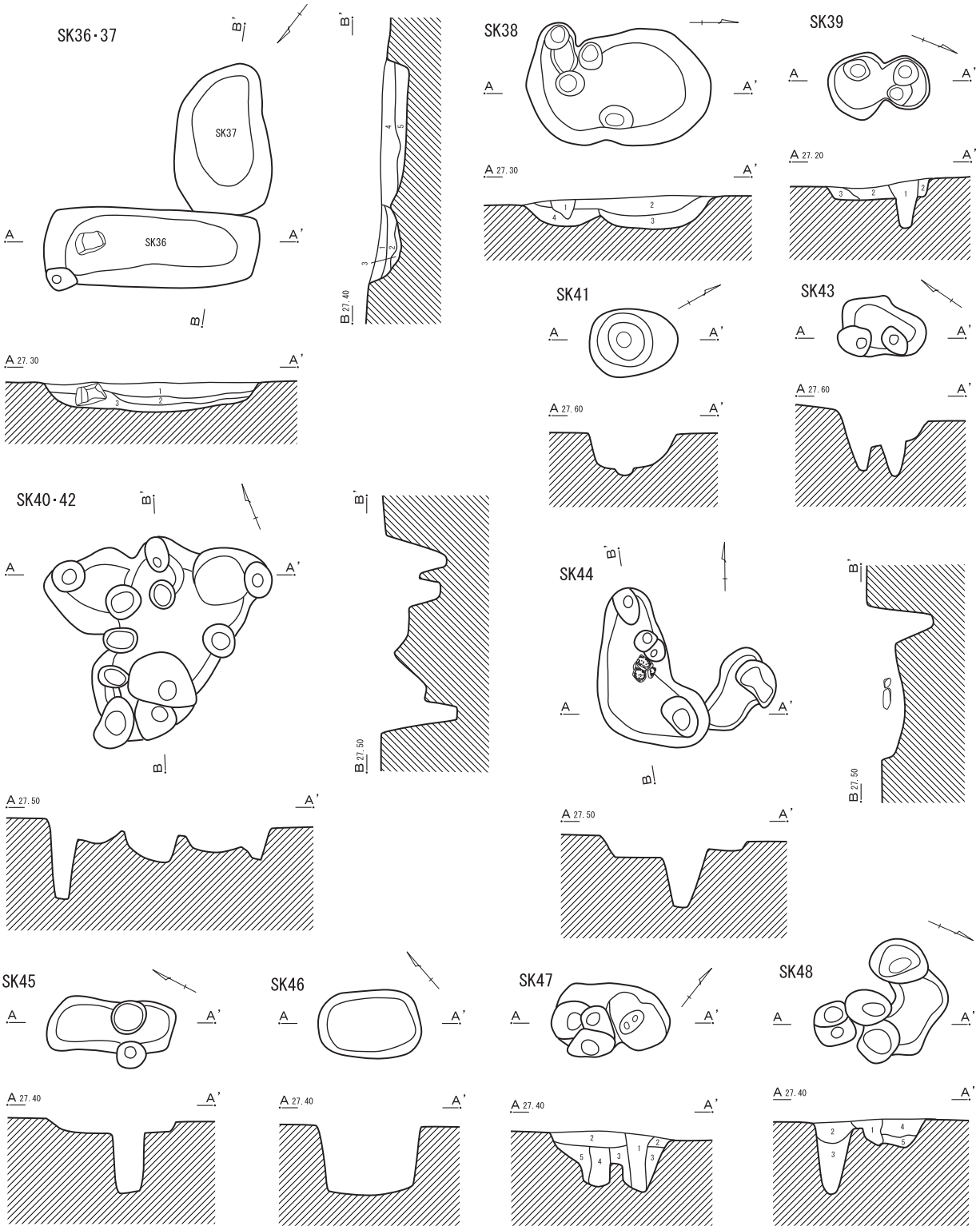
第３号室跡（ＳＫ61）・ＳＫ31
1　暗褐色土　　焼土粒子、炭化物粒子を少量含む
2　暗褐色土　　炭化材、焼けた土壁片を多量に含む
3　暗黒褐色土　焼土粒子を少量含む
4　暗褐色土　　ローム粒子を多量に含む
5　明褐色土　ロームブロックを少量含む

ＳＫ32
1　暗黒褐色土　ロームブロックを多量に含む
2　黄褐色土　　ロームブロックを多量に含む
3　暗黄褐色土　ロームブロックを少量含む

ＳＫ35
1　暗褐色土　ローム粒子を少量含む
2　暗褐色土　ローム粒子を多量に含む

0　2m
1:60

第89図　土壙（3）



ＳＫ36・37
1　褐色土　　ローム粒子を少量含む
2　暗褐色土　ローム粒子を少量含む
3　褐色土　　ローム粒子を多量に含む
4　暗褐色土　凝灰質砂岩の削屑を少量含む
5　明褐色土　ロームブロックを多量に含む

ＳＫ38
1　暗黒褐色土　ローム粒子、焼土粒子を少量含む
2　暗褐色土　　ローム小ブロックを多量に含む
3　暗褐色土　　ローム小ブロックを少量含む
4　明褐色土　　ローム小ブロックを多量に含む

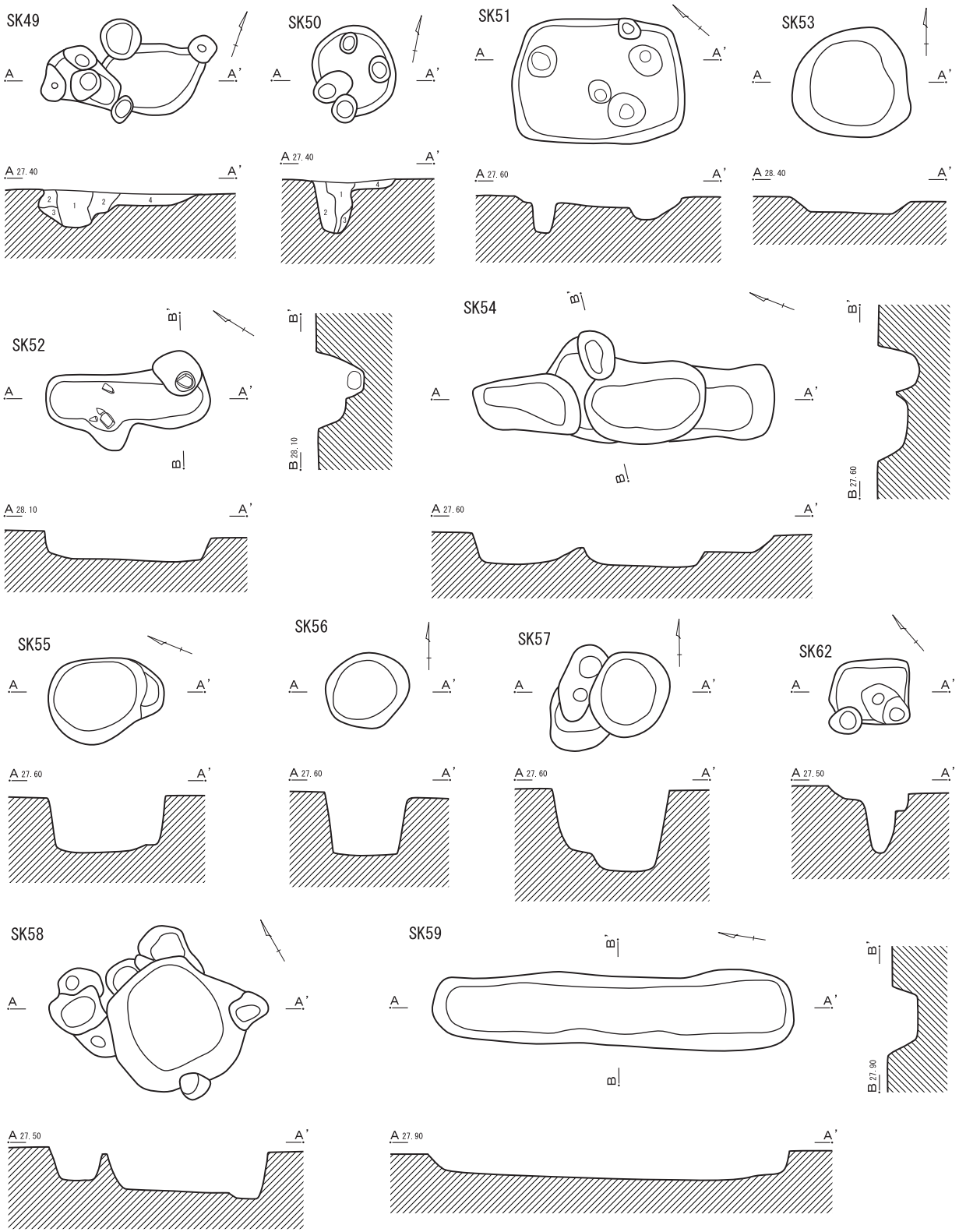
ＳＫ39
1　暗褐色土　ローム粒子を多量に含む
2　褐色土　　ローム粒子を多量に含む
3　明褐色土　ローム粒子を多量に含み、炭化物を少量含む

ＳＫ47
1　暗褐色土　ロームブロックを少量含む
2　褐色土　　ローム粒子を多量に含む
3　褐色土　　ローム小ブロックを多量に含む
4　明褐色土　黒色土粒子を多量に含む
5　明褐色土　ローム粒子を多量に含む

ＳＫ48
1　暗褐色土　　ローム小ブロックを多量に含む
2　暗黒褐色土　ロームブロックを少量含む
3　褐色土　　ローム粒子を多量に含む
4　黒褐色土　　ローム粒子を少量含む
5　明黄褐色土　ロームブロックを多量に含む

0　2m
1：60

第90図　土壙（4）



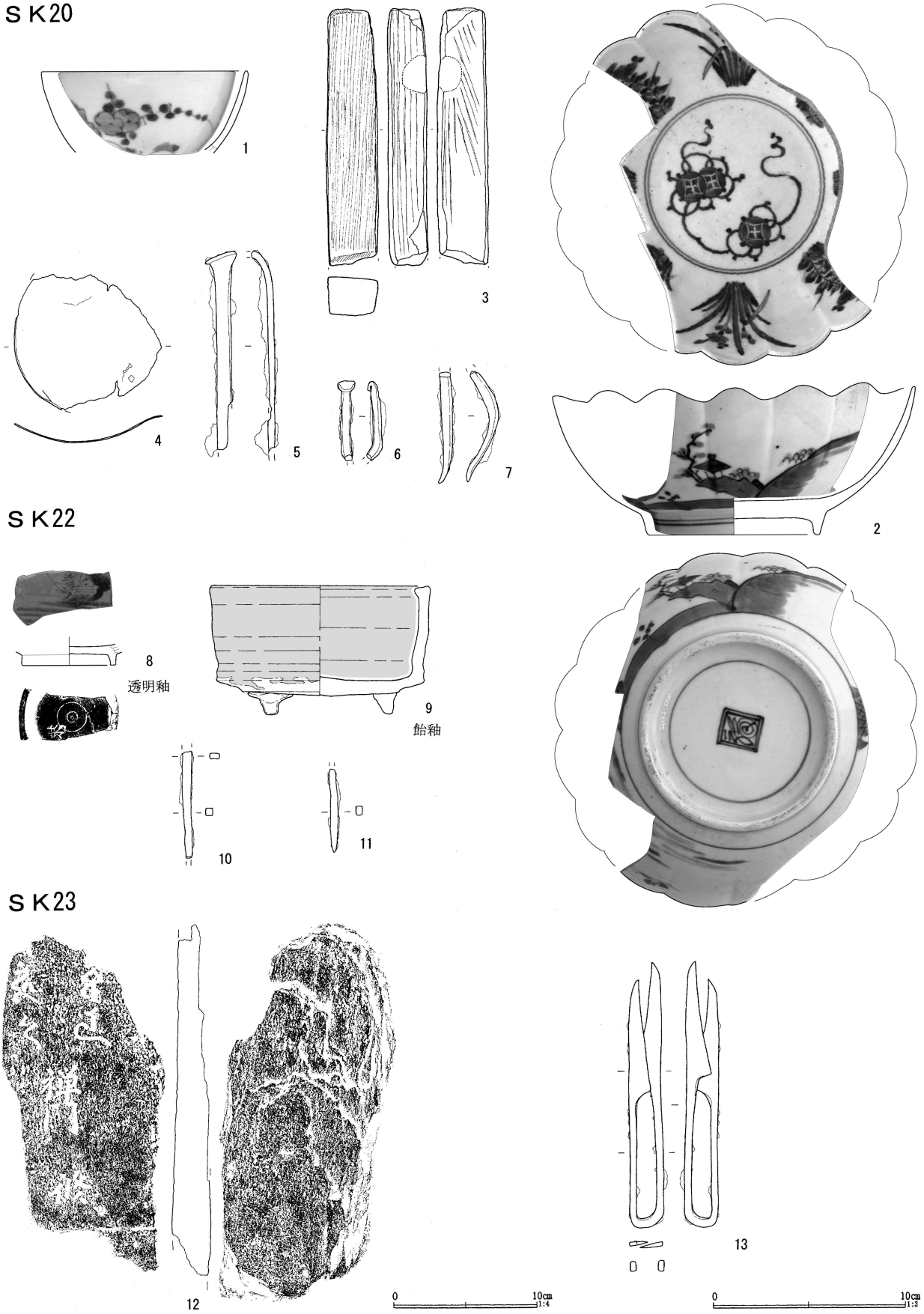
ＳＫ49
1　暗褐色土　ローム粒子を多量に含む
2　暗褐色土　ローム粒子を少量含む
3　明褐色土　ロームブロックを多量に含む
4　褐色土　ローム粒子を多量に含む

ＳＫ50
1　暗褐色土　ロームブロックを多量に含む
2　暗褐色土　ローム粒子を少量含む
3　明黄褐色土　ローム土を主体とする
4　暗褐色土　ローム粒子を少量含む

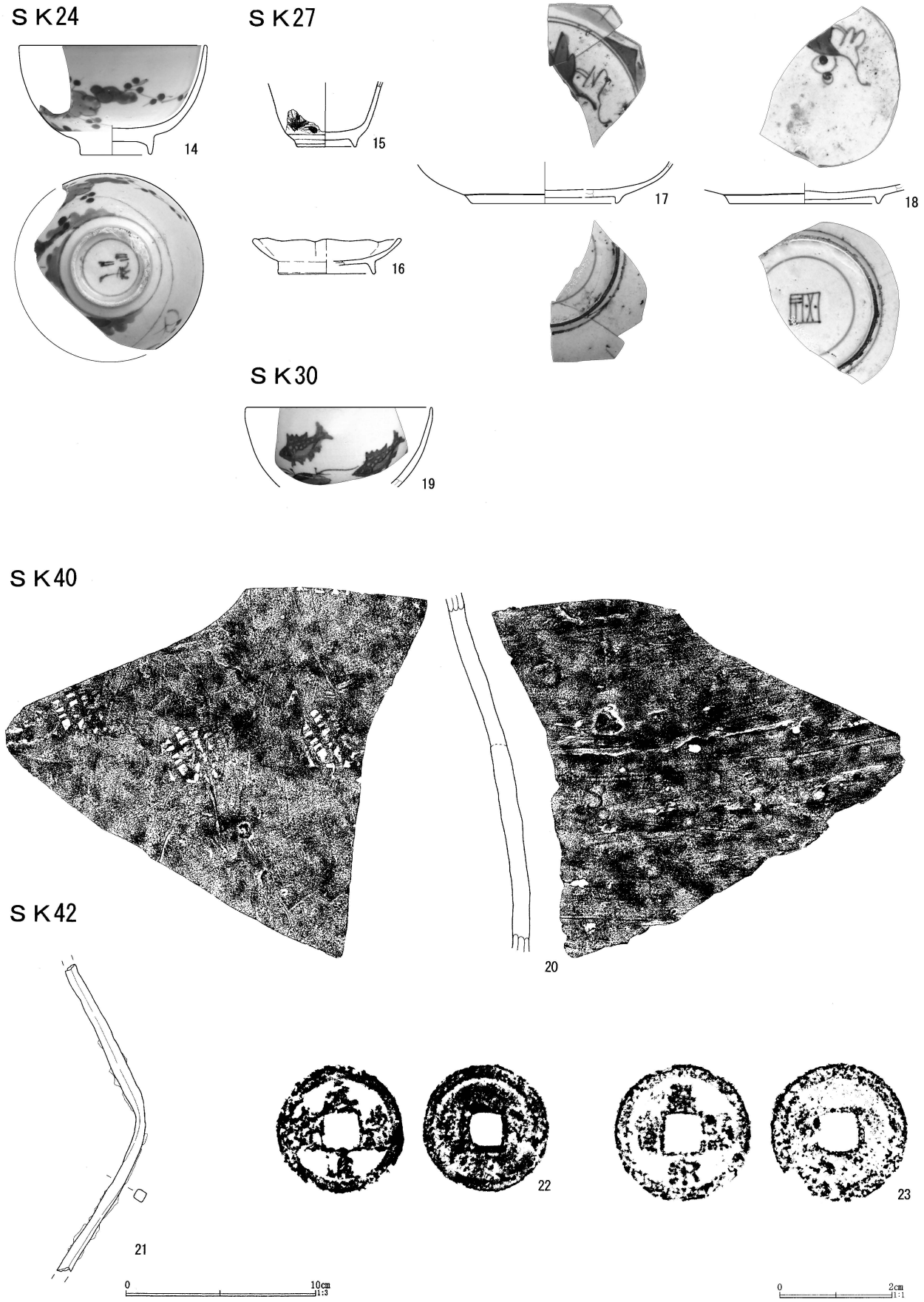
第91図　土壙（5）

第35表　**土壙・室跡一覧表**

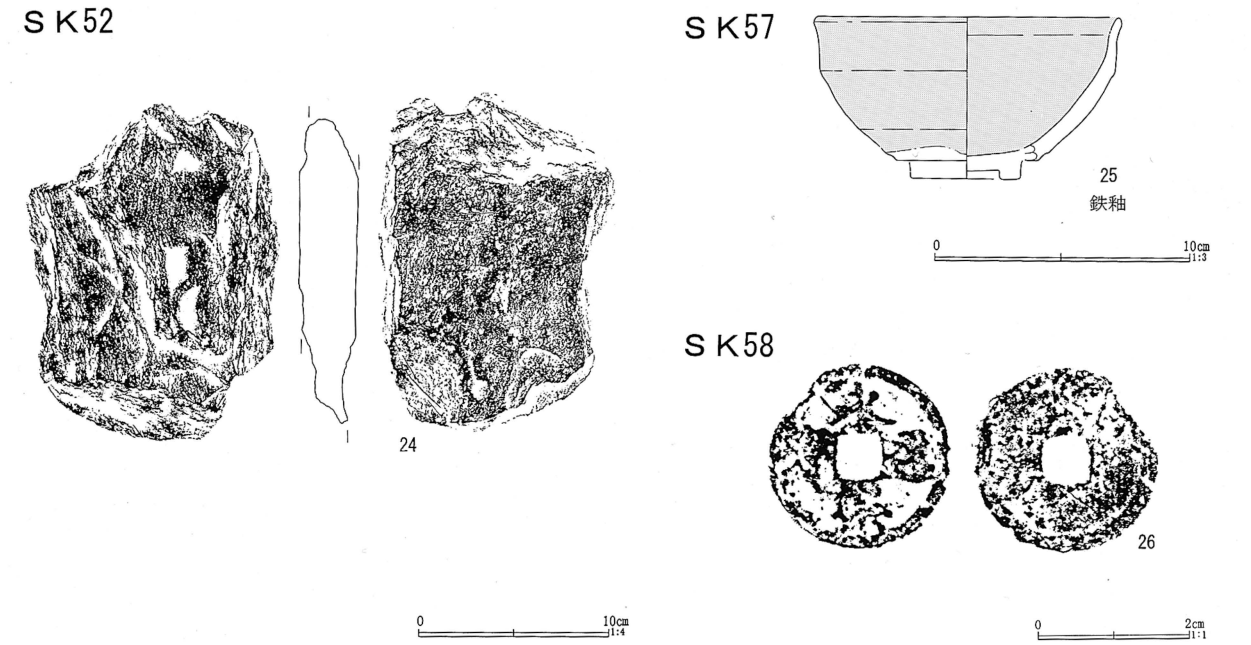
番号	グリッド	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	主軸方位	平面形態	重複遺構	遺　物	挿図
1	E-9	(104)	(102)	19	N- 0° -S	不整形		弥生土器	第87図
2	E-9	72	50	15	N-42° -E	不整形		弥生土器	第87図
3	E-9	72	52	28	N-60° -E	不整形		弥生土器	第87図
4	E-9	62	48	23	N-40° -E	楕円形		土師質皿	第87図
5	E-9	210	52	64	N-42° -W	不整形		土師質皿　焼土塊	第87図
6	E-9	174	113	44	N-41° -W	不整形	SK7	弥生土器　円筒埴輪	第87図
7	E-9	136	72	42	N-18° -W	不整形	SK6	土師質皿	第87図
8	E-9	198	108	19	N-28° -W	不整形		焙烙	第87図
9	E-9	56	42	43	N-15° -W	不整形			第87図
10	E-9	264	54	39	N-25° -W	不整形		焙烙	第87図
11	E-9	144	94	42	N-47° -E	長方形		弥生土器	第87図
12	E-9	229	144	43	N-29° -W	長方形	SK13	弥生土器　円筒埴輪	第88図
13	E-8・9	125	97	35	N-72° -E	長方形	SK12	弥生土器　円筒埴輪	第88図
14	E・F-9	(263)	68	32	N-21° -W	不整形		磁器　火鉢	第88図
15	E-8・9	54	41	30	N-90° -E	不整形			第88図
16	E-9	234	85	63	N-64° -E	不整形	SK17	弥生土器　円筒埴輪	第88図
17	E-9	(166)	154	15	N-42° -W	長方形	SK16	土師質皿	第88図
18	E-9	26	22	28	N-40° -W	楕円形			第88図
19	B-8	(224)	(138)	55	N-61° -W	楕円形か	SR1	**弥生土壙**／弥生土器	第38・39図
20	C-8	110	98	44	N- 0° -S	楕円形		陶磁器 焙烙 土師質皿 砥石 銅皿 鉄釘	第88・92図
21	D・E-5	95	86	35	N-90° -E	楕円形		磁器(仏飯具)　焙烙	第88図
22	E-5	72	49	3	N-64° -E	不整形		陶器(香炉・京焼風小鉢)　鉄釘	第88・92図
23	E-5	147	133	45	N-25° -E	円形		陶器　焙烙　板碑　砥石　握り鋏	第89・92図
24	E-6	121	108	25	N-44° -W	不整形		磁器　焙烙	第89・93図
25	E-6	99	62	25	N-74° -E	長方形		磁器	第89図
26	B-9	(207)	128	25	N-57° -E	楕円形か		**弥生土壙**／弥生土器	第38・39図
27	E-7	104	102	23	N-67° -W	円形		磁器　ごみ穴か	第89・93図
28	E-7	112	96	175	N-75° -E	長方形	SS32	**２号室跡**／擂鉢　焙烙	第84図
29	E-8	205	75	13	N-12° -W	不整形		擂鉢	第89図
30	E-8	(273)	172	22	N-26° -W	長方形か		陶器(香炉)　磁器	第89・93図
31	C-8	160	122	48	N-61° -E	楕円形か	３号室跡	陶磁器 石英(火打石) 焼土塊 ごみ穴か	第89図
32	C-4	230	82	33	N-31° -E	不整形	SS33	磁器　焙烙	第89図
33	F-7	123	63	72	N-11° -W	不整形		焙烙	第89図
34	F・G-7・8	(257)	177	86	N-28° -W	不整形		**弥生土壙**／弥生土器	第38・39図
35	F-7	72	62	48	N- 0° -S	楕円形			第89図
36	F-8	210	78	28	N-52° -E	長方形	SK37	弥生土器	第90図
37	F-8	145	96	28	N-40° -W	楕円形	SK36	陶器	第90図
38	F-8	182	116	33	N- 0° -S	不整形		青磁　土師質皿	第90図
39	F-8	100	65	51	N-21° -W	不整形		弥生土器	第90図
40	E・F-8	227	123	37	N-54° -E	不整形	SK42	炻器(甕)	第90・93図
41	E-7・8	87	68	42	N-30° -E	楕円形		須恵器甕	第90図
42	E-8	88	(76)	79	N-53° -W	不整形	SK40	鉄釘　銭貨(元豊通寶・皇宋通寶)	第90・93図
43	E-8	86	58	65	N-34° -W	不整形		土師器　円筒埴輪	第90図
44	E-8	152	100	73	N- 8° -W	不整形			第90図
45	E-8	120	50	71	N-24° -W	不整形			第90図
46	E-8	102	68	66	N-49° -W	長方形		弥生土器　円筒埴輪	第90図
47	E-8	117	72	64	N-51° -E	不整形		青磁　陶器	第90図
48	E-8	117	114	72	N-22° -W	不整形			第90図
49	E-8	155	105	39	N-71° -E	不整形			第91図
50	E-8・9	90	80	52	N-35° -W	不整形		弥生土器	第91図
51	D・E-8	174	124	36	N-40° -W	長方形			第91図
52	E-7	166	77	48	N-32° -W	不整形		陶器　板碑	第91・94図
53	F-6	114	110	10	N-90° -S	楕円形			第91図
54	D-9	304	112	38	N-21° -W	不整形		陶器	第91図
55	D-9	118	86	55	N-22° -W	楕円形			第91図
56	D-9	86	76	58	N-56° -E	楕円形		焙烙　焼土塊	第91図
57	D-9	118	106	82	N-88° -E	不整形		陶器　土師質皿	第91・94図
58	D-9	222	169	43	N-60° -W	不整形		陶器 土師質皿 銭貨(永楽通寶) 墓壙か	第91・94図
59	B・C-9	366	68	27	N-10° -W	長方形	１号室跡	青磁　陶器　焙烙	第91図
60	B・C-9	385	150	175	N- 4° -W	―	SK59	**１号室跡**／陶磁器 焙烙 石臼 煙管吸口	第84・85図
61	C-8	122	(108)	113	N- 2° -W	楕円形か	SK31	**３号室跡**／焙烙	第89図
62	E-8	80	66	65	N-49° -W	不整形			第91図
63	E-9	157	98	9	N-39° -W	不整形			第88図



第92図　土壙出土遺物（1）



第93図　土壙出土遺物（2）



第94図　土壙出土遺物（3）

第27号土壙（第89図）

Ｅ－７グリッドに位置する平面円形の土壙である。覆土中に多量の焼土や炭化物を含む。遺物は、磁器の碗・小坏・皿の破片がまとまって出土しており、廃棄土壙と考えられる。

第30号土壙（第89図）

Ｅ－８グリッドに位置する長方形平面の土壙である。遺物は、陶器香炉、染付け磁器中碗、鬢水入れなどが出土した。

第31号土壙（第89図）

Ｃ－８グリッドに位置する平面楕円形の土壙である。第３号室跡と重複し、一部壊される。遺物は陶磁器、石英（火打石か）、焼土塊が出土しており、廃棄土壙と考えられる。

第32号土壙（第89図）

Ｃ－４グリッドに位置する不整形の土壙である。第33号墳の周溝外縁に接し、横断面形が抉込土壙のようになっていることから古墳に伴う土壙墓の可能性を考えた。しかし、埋土に締まりがなく、陶磁器の破片を出土したことから、近世の所産と判断した。

第36号土壙（第90図）

Ｆ－８グリッドに位置する長方形の土壙である。覆土中に人頭大の加工痕をもつ凝灰質砂岩が置かれていた。遺物はほとんど出土しなかった。

第52号土壙（第91図）

Ｅ－７グリッドに位置する不整形の土壙である。壁面を掘り込んだピットの底面に円礫が置かれていた。遺物は陶器、種子を刻んだ板碑片が出土した。

第36表　**第20号土壙出土遺物観察表**（第92図）

番号	材質	器種	法量(cm)(g)				形状	文様	備　考
			口径	器高	底径	―			
1	磁器	中碗	(10.8)	<4.4>			丸形	草花	
2	磁器	大鉢	19.3	8.1	9.6		丸形・輪花	桜閣山水・花	銘「二重角に渦福」
3	石器	砥石	現存長13.5　幅2.7　高2.1　重量133.5						三面に鋸切痕
4	銅製品	皿状品	長径(7.8)　短径(7.1)　厚0.05　重量12.8						土圧により歪む
5	鉄製品	釘	現存長10.4　頭部幅1.6　厚0.3　重量16.0						
6	鉄製品	釘	現存長4.1　頭部幅0.9　厚0.4　重量3.0						
7	鉄製品	釘	現存長5.8　厚0.6　重量4.6						

第57号土壙（第91図）

Ｄ－９グリッドに位置する不整形の土壙である。遺物は、埋土中から天目茶碗の破片が出土した。見込みに円を描くような明瞭な擦痕が認められることから、茶を点てた時の茶筅の擦痕と考えられる。

第58号土壙（第91図）

Ｄ－10グリッドに位置する不整形の土壙である。遺物は、陶器、土師質皿の破片と永楽通寶１枚が出土した。土壙の平面形や断面形から墓壙の可能性が考えられる。

第37表　**第22号土壙出土遺物観察表**（第92図）

番号	材質	器種	法量(cm)(g)				形状	文様	備　考
			口径	器高	足幅	底径			
8	陶器	小鉢				(4.9)	浅丸形 底狭	桜閣山水	備前系京焼風　呉須絵・透明釉
9	陶器	香炉	(11.6)	6.8	6.2	(10.9)	有三足半筒形		瀬戸・美濃系　飴釉
10	鉄製品	釘	現存長5.7　厚0.3×0.5　重量4.0						
11	鉄製品	釘	現存長4.4　厚0.5×0.4　重量2.6						

第38表　**第23号土壙出土遺物観察表**（第92図）

番号	材質	器種	法量(cm)(g)	石材	備　考
12	石製品	板碑	現存長26.5　現存幅12.2　厚2.8	緑泥片岩	「禅門　修」　光明真言
13	鉄製品	握り鋏	長13.9　幅1.7　刃部幅1.2　刃部厚0.2　重量21.8		完存　U字形

第39表　**第24号土壙出土遺物観察表**（第93図）

番号	材質	器種	法量(cm)(g)				形状	文様	備　考
			口径	器高	底径	－			
14	磁器	中碗	(10.2)	5.9	3.9		丸形	草花	銘崩し「大明年製」

第40表　**第27号土壙出土遺物観察表**（第93図）

番号	材質	器種	法量(cm)(g)				形状	文様	備　考
			口径	器高	底径	－			
15	磁器	小坏		(3.5)	3.0		端反形	草花か	
16	磁器	小皿	(7.9)	1.9	(5.2)		輪花		
17	磁器	五寸皿		＜2.2＞	(7.8)		底中		
18	磁器	五寸皿		＜1.0＞	(8.0)		底中		銘崩し

第41表　**第30号土壙出土遺物観察表**（第93図）

番号	材質	器種	法量(cm)(g)				形状	文様	備　考
			口径	器高	底径	－			
19	磁器	中碗	(5.0)	＜4.3＞			丸形	魚	

第42表　**第40号土壙出土遺物観察表**（第93図）

番号	材質	器種	法量(cm)(g)				形状	文様	備　考
			口径	器高	底径	－			
20	炻器	甕							外面格子目文

第43表　**第42号土壙出土遺物観察表**（第93図）

番号	材質	器種	法量(cm)(g)	備　考
21	鉄製品	棒状品	現存長16.3　幅0.55　重量35.5	
22	銅製品	銭貨	銭径2.2 内径1.8 銭厚0.1 量目1.8 元豊通寶　行書(北宋　1078年)	
23	銅製品	銭貨	銭径2.4 内径2.0 銭厚0.1 量目2.6 皇宗通寶　真書(北宋　1038年)	

第44表　**第52号土壙出土遺物観察表**（第94図）

番号	材質	器種	法量(cm)(g)	石材	備　考
24	石製品	板碑	現存長16.2　現存幅12.0　厚3.1	緑泥片岩	種子あり

第45表　**第57号土壙出土遺物観察表**（第94図）

番号	材質	器種	法量(cm)(g)				形状	文様	備　考
			口径	器高	底径	－			
25	陶器	中碗	(12.0)	(5.6)			天目形		鉄釉　内面磨耗

第46表　**第58号土壙出土遺物観察表**（第94図）

番号	材質	器種	法量(cm)(g)	備　考
26	銅製品	銭貨	銭径2.4　内径2.1　銭厚0.1　量目2.8	永楽通寶

（5）ピット

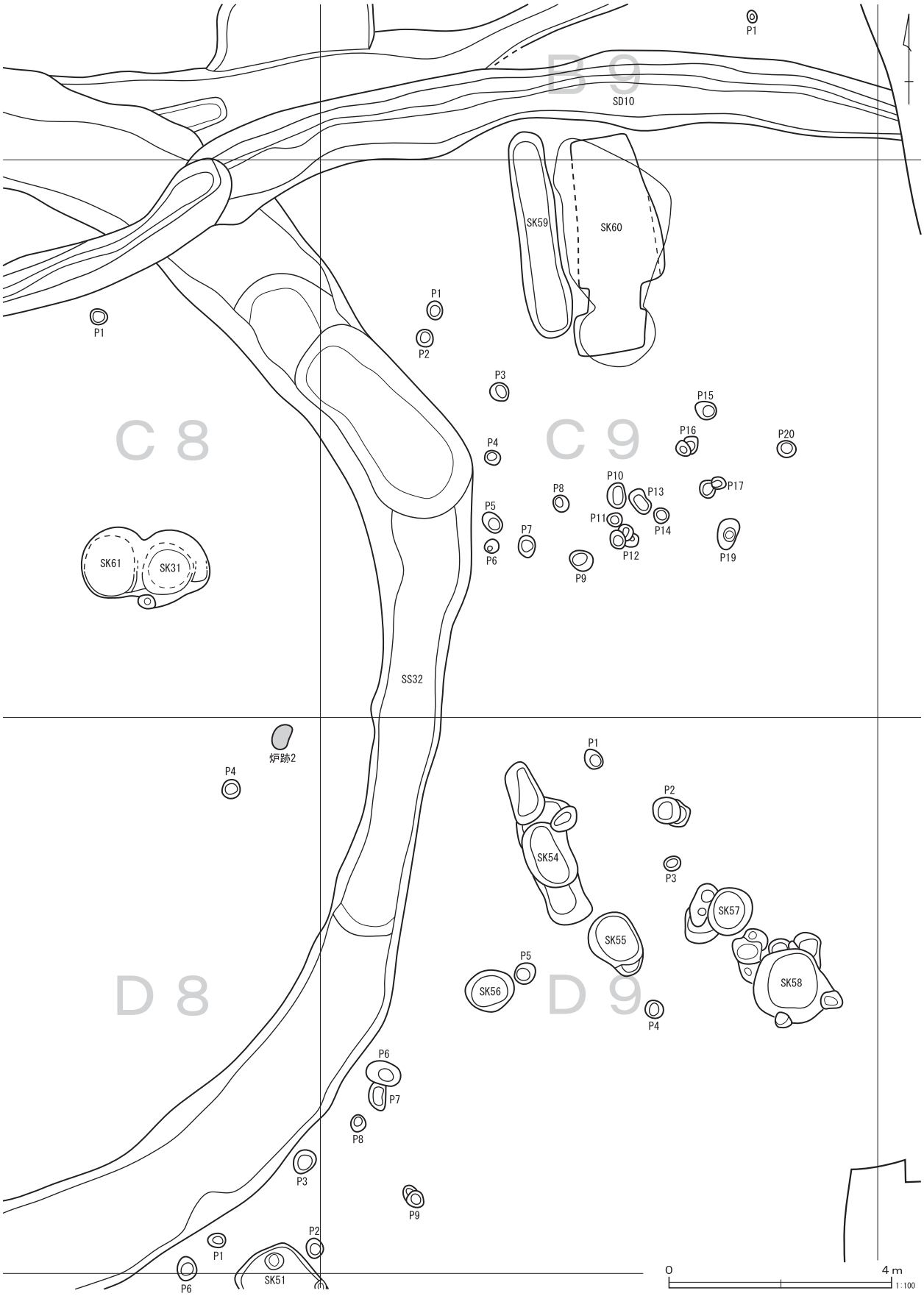
検出されたピットは、合計78基を数え、その大半が近世以降に属するものと考えられる（第95～99図）。調査区東側から南東側の斜面部にかけてまとまって分布し、特に土壙群の広がりと一致するＥ－８グリッドに集中していた。建物跡を構成するような並びをもつピット群は確認できなかったが、明らかに柱穴と考えられるものも多く認められた。なかでも、Ｅ－８グリッドピット８では扁平な河原石を平らに並べ、礎石のようにした造作が認められた。

遺物は、埋土中に混入した弥生土器や埴輪片が多く、時期を示すものは少ない。第100図に代表的な遺物を図示した。

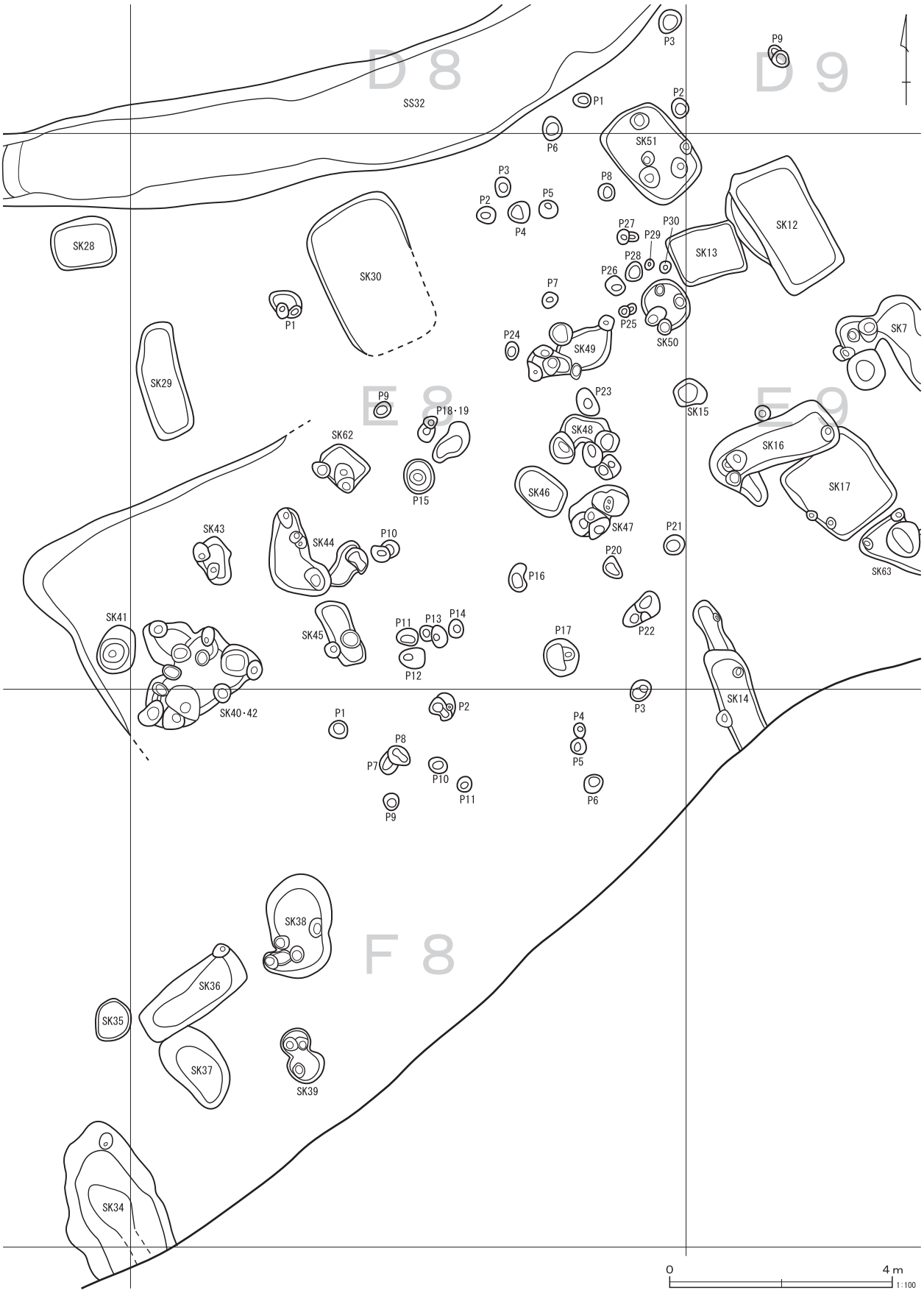
１は煙管の吸口で、口付けの部分が潰れている。Ｃ－９グリッドピット１出土。２は瀬戸・美濃系の灰釉小皿、Ｃ－９グリッドピット８出土。３はＣ－９グリッドピット19から出土した鑿削痕を良く残す凝灰岩製の砥石である。４はＤ－８グリッドピット２から出土した銭貨の小片で、緑青に覆われ脆い。銭種は不明。Ｄ－９グリッドのピット４は遺物が比較的多く、17世紀後半の天目茶碗、磁器片、土師質皿片とともに焼土塊、緑泥片岩の破片が出土した。

第47表　**ピット一覧表**

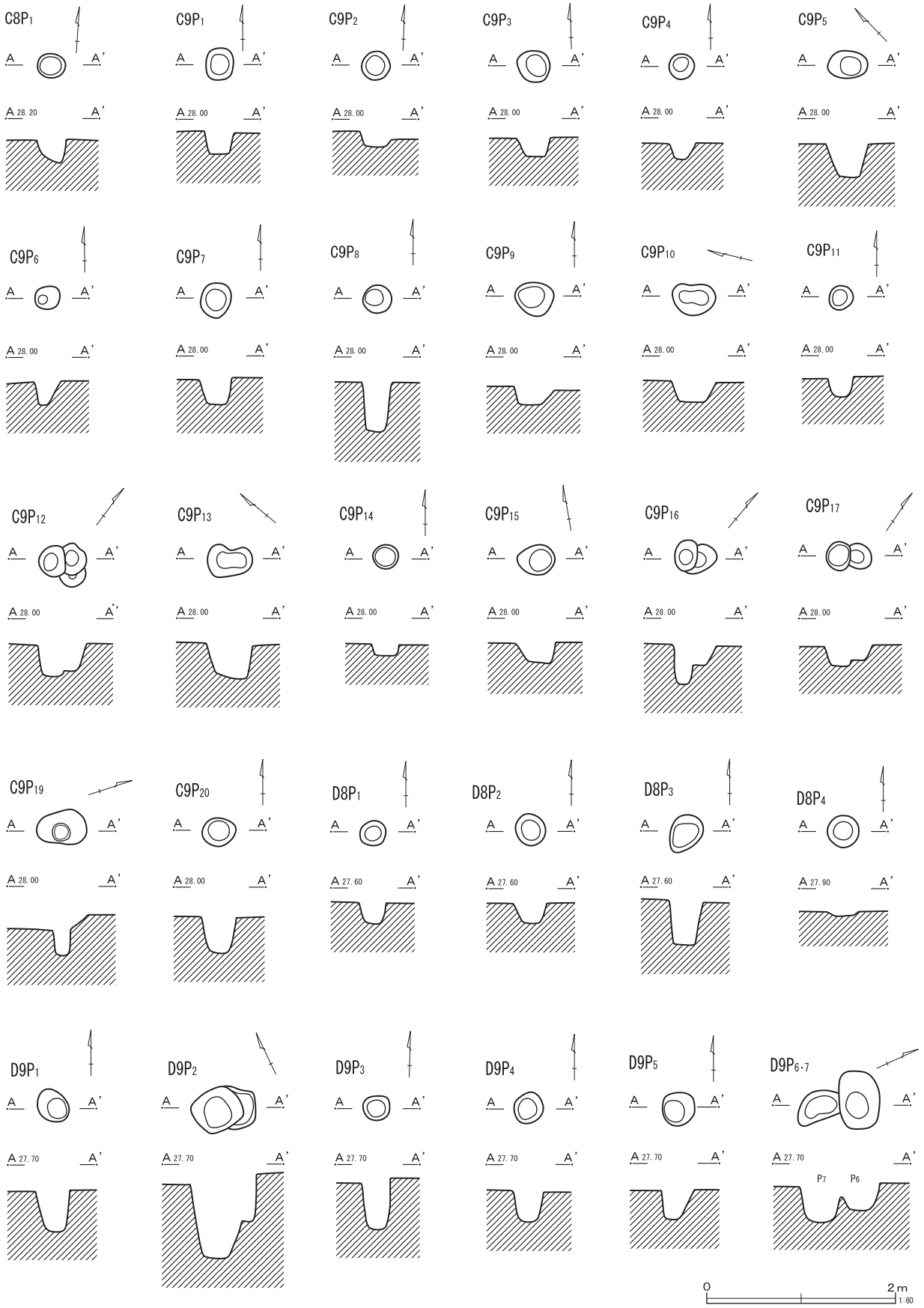
グリッド	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	遺　　物
B-9	P1	23	18	45	
C-8	P1	30	26	18	
C-9	P1	34	29	24	煙管吸口
C-9	P2	31	30	17	
C-9	P3	36	33	21	弥生土器
C-9	P4	27	27	18	
C-9	P5	42	29	36	
C-9	P6	26	24	26	焙烙
C-9	P7	38	32	29	
C-9	P8	30	30	53	灰釉小皿
C-9	P9	41	35	25	
C-9	P10	45	32	22	磁器碗　土師質皿
C-9	P11	26	25	18	
C-9	P12	50	46	33	
C-9	P13	48	34	38	
C-9	P14	28	26	12	
C-9	P15	40	32	22	
C-9	P16	44	34	42	
C-9	P17	31	(24)	22	
C-9	P18	25	(24)	15	
C-9	P19	53	37	43	砥石　円筒埴輪
C-9	P20	36	30	40	土師器甕
D-8	P1	28	26	22	
D-8	P2	34	31	21	永楽通寶　弥生土器
D-8	P3	44	33	46	
D-8	P4	34	33	3	
D-9	P1	38	30	50	
D-9	P2	68	46	85	弥生土器
D-9	P3	28	26	54	
D-9	P4	33	30	34	陶磁器　土師質皿
D-9	P5	34	34	33	陶器
D-9	P6	62	42	28	弥生土器
D-9	P7	52	31	41	
D-9	P8	30	24	31	
D-9	P9	42	30	40	
E-8	P1	61	50	31	
E-8	P2	34	30	21	弥生土器
E-8	P3	30	28	32	
E-8	P4	38	38	44	
E-8	P5	33	32	26	
E-8	P6	40	34	22	
E-8	P7	29	25	38	
E-8	P8	31	28	33	土師器甕
E-8	P9	27	22	26	
E-8	P10	51	34	58	
E-8	P11	40	31	34	
E-8	P12	48	38	52	
E-8	P13	48	40	66	土師器甕
E-8	P14	35	26	53	
E-8	P15	60	52	73	土師質皿
E-8	P16	51	34	47	弥生土器
E-8	P17	68	64	50	土師器甕
E-8	P18	48	32	62	円筒埴輪
E-8	P19	75	52	64	
E-8	P20	41	30	14	
E-8	P21	38	35	16	
E-8	P22	78	44	46	
E-8	P23	55	30	44	
E-8	P24	28	23	21	
E-8	P25	30	19	23	焙烙
E-8	P26	35	30	47	
E-8	P27	38	24	22	
E-8	P28	36	29	26	
E-8	P29	18	14	11	
E-8	P30	22	18	6	
F-7	P1	35	35	36	弥生土器
F-7	P2	32	26	39	
F-8	P1	34	30	42	
F-8	P2	42	32	65	土師質皿
F-8	P3	42	37	14	
F-8	P4	24	20	19	
F-8	P5	31	28	14	
F-8	P6	34	33	33	縄文土器
F-8	P7	33	(22)	33	
F-8	P8	48	30	46	
F-8	P9	30	27	65	
F-8	P10	33	27	26	弥生土器
F-8	P11	25	24	50	



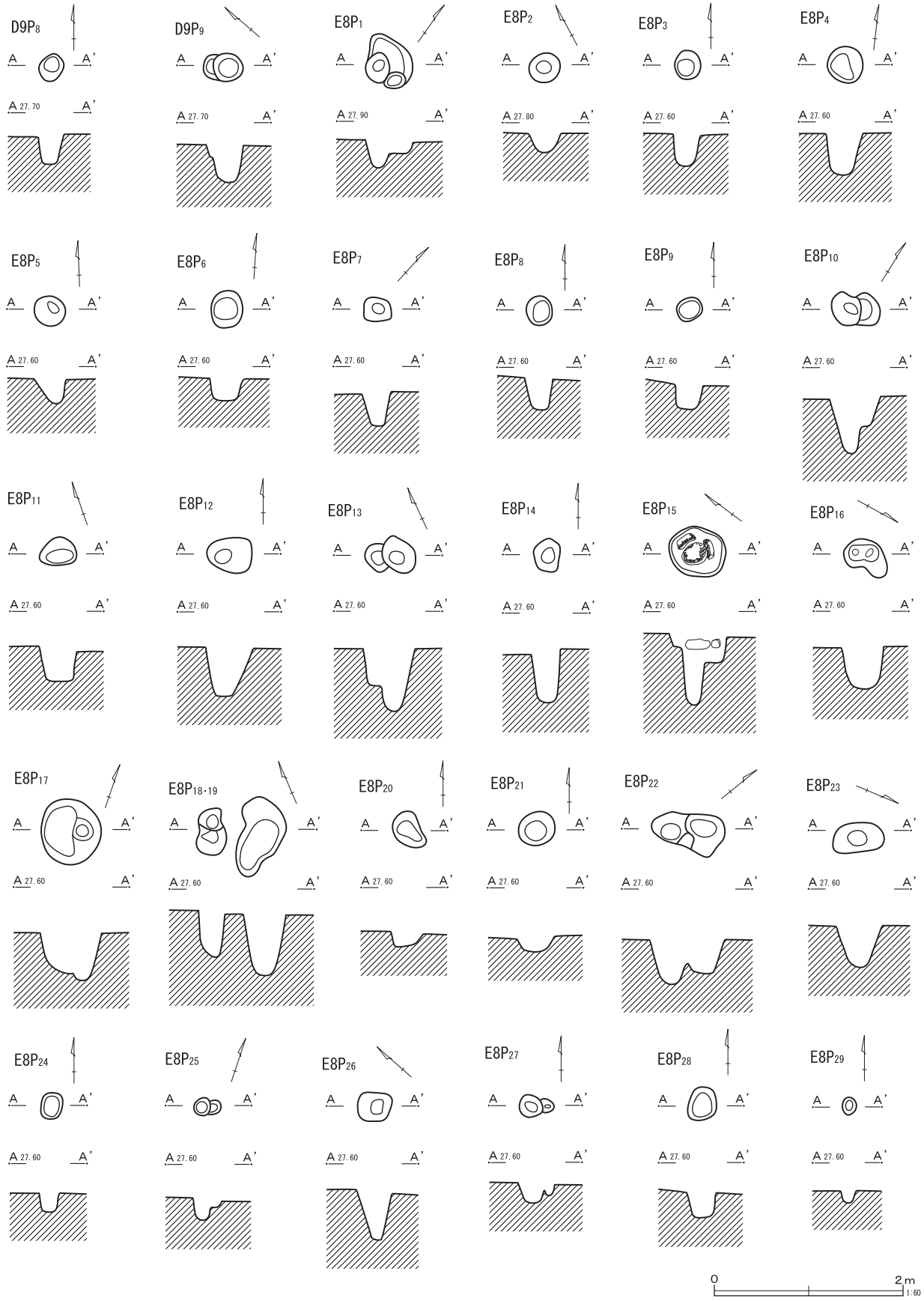
第95図　ピット全体図（1）



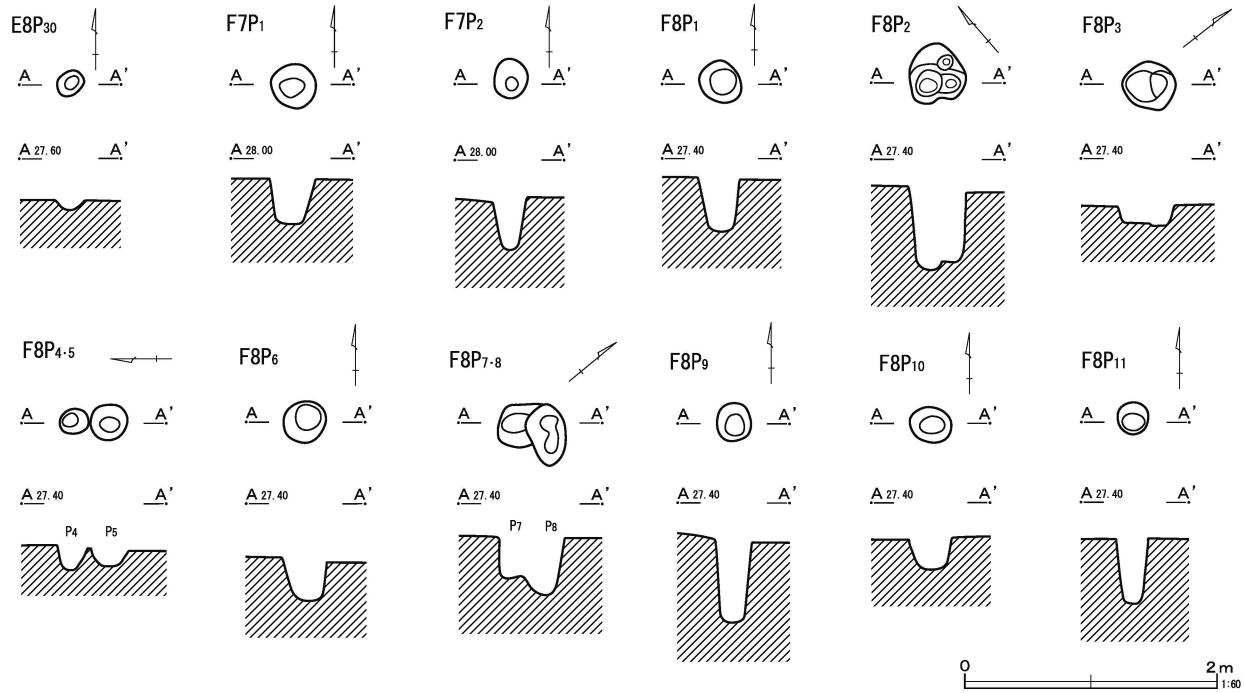
第96図　ピット全体図（2）


C8P1
C9P1
C9P2
C9P3
C9P4
C9P5
C9P6
C9P7
C9P8
C9P9
C9P10
C9P11
C9P12
C9P13
C9P14
C9P15
C9P16
C9P17
C9P19
C9P20
D8P1
D8P2
D8P3
D8P4
D9P1
D9P2
D9P3
D9P4
D9P5
D9P6・7
A 28.20
A 28.00
A 27.60
A 27.90
A 27.70
P7
P6
0
2m
1:60

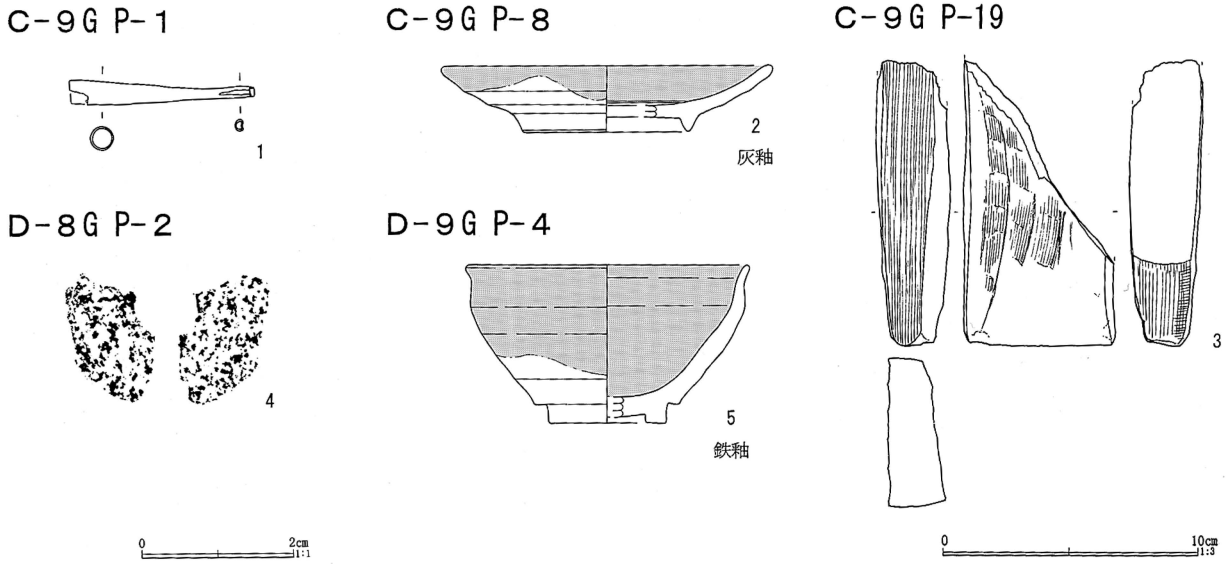
第97図　ピット（1）


D9P8
D9P9
E8P1
E8P2
E8P3
E8P4
E8P5
E8P6
E8P7
E8P8
E8P9
E8P10
E8P11
E8P12
E8P13
E8P14
E8P15
E8P16
E8P17
E8P18・19
E8P20
E8P21
E8P22
E8P23
E8P24
E8P25
E8P26
E8P27
E8P28
E8P29
A
A'
A 27.70
A 27.90
A 27.80
A 27.60
0
2m
1:60

第98図　ピット（2）



第99図　ピット（3）



第100図　ピット出土遺物

第48表　**ピット出土遺物観察表**（第100図）

番号	材質	器種	法量(cm)(g)				形状	文様	備　考
			口径	器高	底径	−			
1	銅製品	煙管	長7.3　径0.9　厚0.1　重量4.5						C-9グリッドP1　吸口
2	陶器	小皿	(12.9)	2.6	(6.4)		底狭		C-9グリッドP8　瀬戸･美濃系 灰釉
3	石器	砥石	現存長11.2　幅2.9　厚6.0　重量193.8						C-9グリッドP19　凝灰岩　鑿削痕
4	銅製品	銭貨	銭径(2.4)　内径(2.0)　銭厚0.1　量目0.5						D-8グリッドP2　銭種不明
5	陶器	中碗	(11.0)	6.2	(4.6)		天目形		D-9グリッドP4　鉄釉　17世紀後半

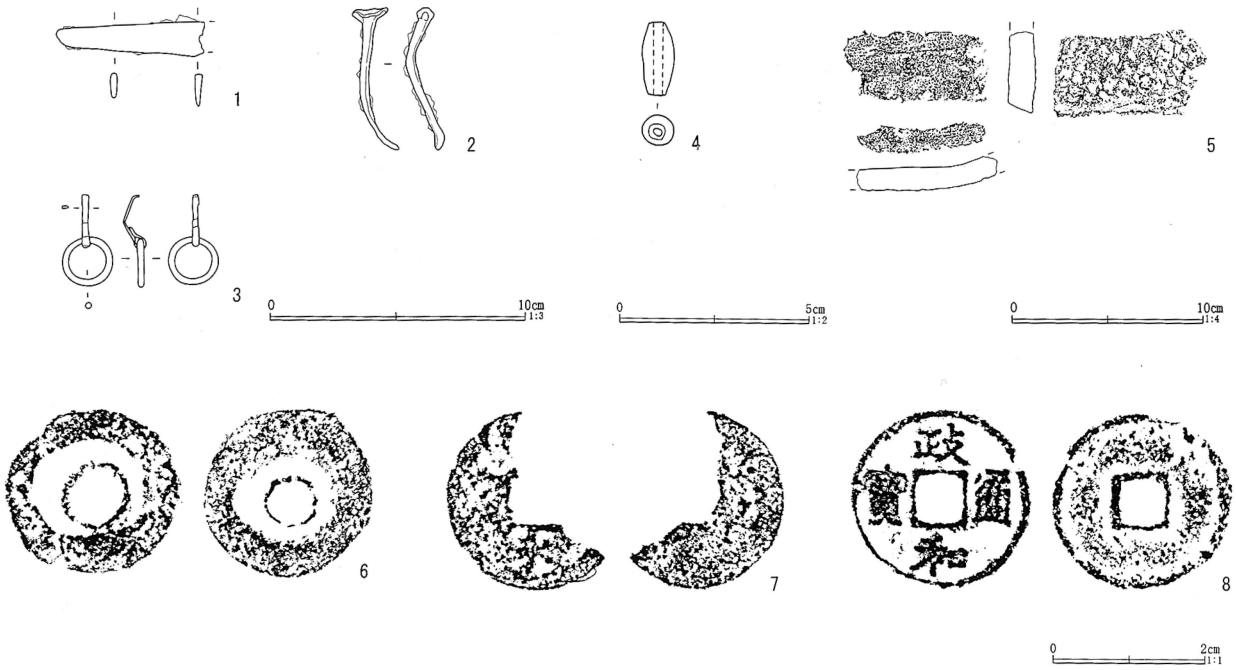
（6）調査区出土遺物

中・近世の遺物のうち帰属遺構の不明なものと、その他の時代の遺物を第101図にまとめた。

１は刀子の茎から刀身にかけての破片である。刀身は断面長三角形を呈する。茎は棟幅が薄く、茎尻を丸くおさめ、木質が一部付着する。２はほぼ完存する鉄製の和釘で、いわゆる頭巻釘である。３は銅製吊金具である。円環に断面矩形の棒状金具を巻きつけ、その端部をかしめたもので、円環は遊環となる。４は小型の土錘で、紡錘形を呈し、端部に平坦面をつくる。硬質の焼き上がりで、オレンジ色を呈する。

５は平安時代の平瓦と考えられる。一枚作りで、凸面に格子叩き、端面をヘラ切りする。須恵質の焼き上がりで、光沢をおびた降灰がかかる。

６～８は銭貨である。６はいわゆる雁首銭で、調査区中央北側のＣ－７グリッドから出土した。煙管の火皿部分が意識的に平らに潰されたもので、緡に混ぜたとも、緡縄の固定に用いられたものともいわれる。７・８は試掘調査の際に出土したもので、７は調査区東端の９トレンチ、８は７トレンチ南端の斜面部からの出土である。７は腐食のため半折しているが、残る文字から寛永通寶と考えられる。８は政和通寶で、土壙群の検出された斜面部から４の土錘とともに出土した。両者とも墓壙に副葬された六道銭の一部であろうか。



第101図　調査区出土遺物

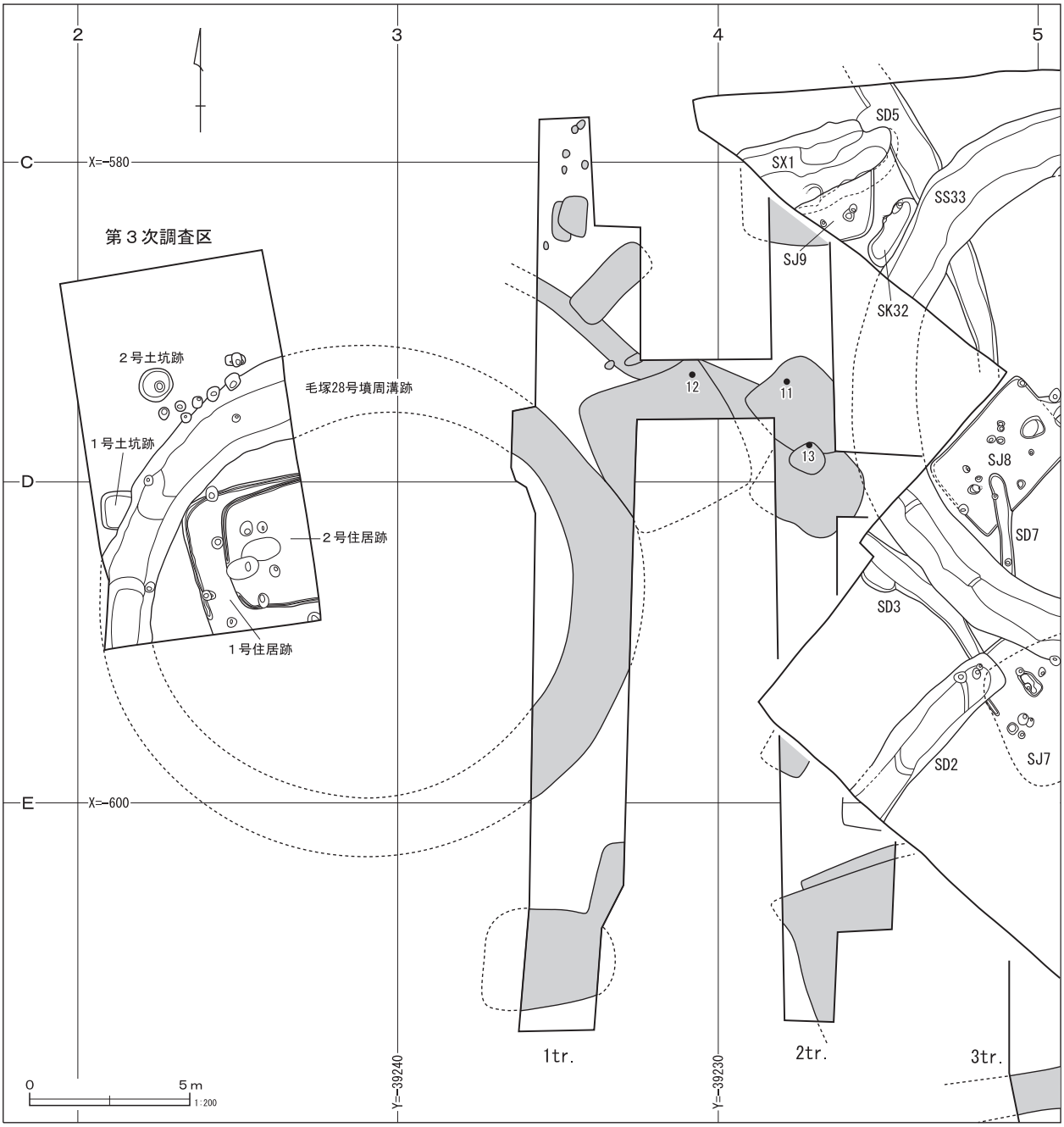
第49表　**調査区出土遺物観察表**（第101図）

番号	材質	器種	法量(cm)(g)	備　　考
1	鉄製品	刀子	現存長5.9　茎幅1.4　棟厚0.2～0.3　重量5.4	B-6グリッド　茎に木質付着
2	鉄製品	釘	長5.6　頭部幅1.4　厚0.4　重量4.0	C-4グリッド　頭巻釘　ほぼ完存
3	銅製品	吊金具	長3.6　円環径1.9　厚0.2　重量2.7	E-6グリッド　円環に留金具が付属
4	土製品	土錘	長3.9　幅1.7　孔径0.5×0.4　重量9.8　色調:オレンジ色	F-8グリッド　(試掘7トレ№158)
5	瓦	平瓦	厚1.3　胎土色:黒灰色	表採　古代　凸面格子叩き
6	銅製品	銭貨	銭径2.3　内径1.6　銭厚0.1　量目2.8　雁首銭	C-7グリッド
7	銅製品	銭貨	銭径2.5　内径2.0　銭厚0.1　量目1.3　寛永通宝	D-10グリッド(試掘9トレ№181)
8	銅製品	銭貨	銭径2.4　内径2.2　銭厚0.1　量目2.7　政和通寶(北宋　1111年)	F-8グリッド(試掘7トレ№157)

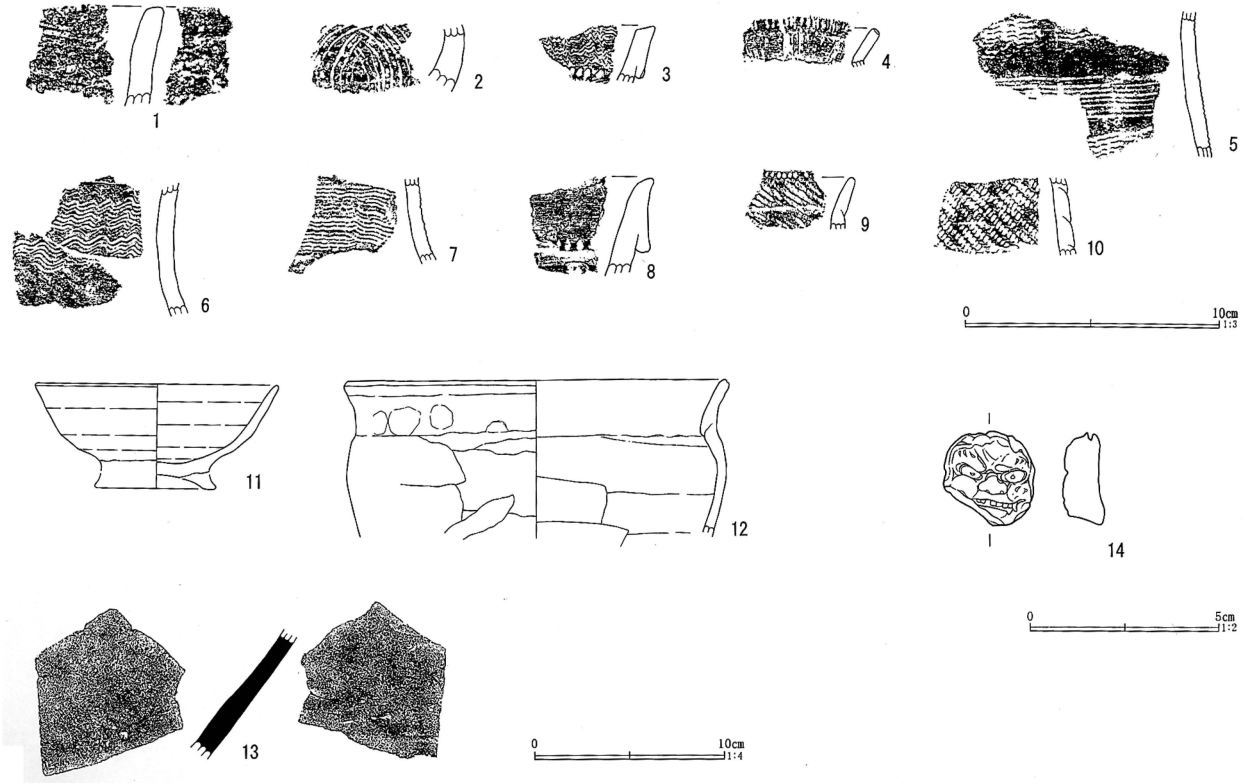
5．試掘調査

事前調査として、東松山市教育委員会が平成17年３月８～10日にかけて試掘調査を実施した。開発予定地内に９本のトレンチを設定し、古墳跡４基をはじめとする多くの遺構・遺物が検出された。とりわけ第３次調査で調査された毛塚28号墳の続きと考えられる周溝部分から、人物や馬などの形象埴輪がまとまって出土した。

試掘調査の結果、西側の台地平坦部に古墳跡や住居跡が集中していることが判明したため、緑地帯として現状保存されるよう措置が講じられた。保存地区には毛塚28号墳のほかにも、弥生時代や平安時代の住居跡や土壙などの遺構の所在を示す黒色土の落ち込みが確認されており、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、埴輪などが出土した。



第102図　試掘調査（保存地区）全測図



第103図　試掘調査出土遺物

（1）縄文土器（第103図）

1は早期末葉の条痕文系土器。口縁部の破片で、断面角頭状を呈し、わずかに外反する。2は前期後葉の諸磯b式と考えられる。キャリパー形深鉢の胴部上半の破片で、半裁竹管による渦文が描かれる。

（2）弥生土器（第103図）

3～7は岩鼻式土器である。3は壺の口縁部破片で、折り返し口縁上に櫛描波状文を施文する。4は無文甕の口縁部破片で、端部にヘラ状工具による細かいキザミを施す。5は甕の頸部破片で、8本一単位の施文具で廉状文と波状文を施す。6・7は頸部破片で波状文が施される。

8～10は吉ヶ谷式土器である。8は壺口縁部である。輪積痕下端に木口状工具でキザミを施す。内外面赤彩される。9は甕胴部である。段差のない輪積痕上に輪積痕と関係なくＲＬを施文。10は甕口縁部で端部にヘラ状工具でキザミを施す。輪積痕上に輪積痕の幅合わせて下から上にＲＬを施文する。

（3）その他の遺物（第103図）

11～13は1・2トレンチ連結部周辺の住居跡と推定される落ち込みから出土した平安時代の遺物である。11はロクロ土師器椀で、高台を剥離する。全体にロクロ目は弱い。12は土師器甕で、頸部の括れが弱く、広口となるようである。口縁部外面には指頭圧痕が残り、体部外面は横位の弱いナデ、内面は木口状工具によるナデを施す。13は須恵器甕の体部破片。降灰のかかった外面はナデが施され、内面には無文の当て具痕が残る。胎土に白色針状物質を含む南比企窯産の製品である。

14は鬼面を表した泥面子である。頭頂部に竹串のようなものを刺した小孔が3個並んでいる。型作りによる成形のため裏面に指頭痕がある。

第50表　**試掘調査出土遺物観察表**（第103図）

番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	焼成	色　調	残存	出土位置	備　　考
11	ロクロ土師器	(12.6)	<4.9>		ＡＦＪ	普通	橙	40	2トレ	在地産　№96
12	土師器甕	(20.0)	8.3		ＡＦＨＫ	良好	にぶい赤褐	20	1･2トレ	体部外面煤付着　№94
13	須恵器甕				ＡＧＨＪ	良好	灰	破片	2トレ	外面ナデ　内面無文当て具　№110
14	泥面子	長2.5×幅2.4×厚1.1			ＢＦＪ	良好	橙	100	1トレ	型作り　鬼面　頭部に3箇所小孔を穿つ

（4）毛塚28号墳の調査

第28号墳は、第３次調査の際に周溝の一部が調査され、周溝径約16.9ｍ、墳丘径約11.7ｍの円墳と推定されていた。周溝は幅1.7～2.6ｍ、深さ0.5ｍの断面逆台形を呈し、西側の周溝底面に土橋状のわずかな高まりが確認された。円筒埴輪は２条突帯３段構成のものが主体で、客体的に３条突帯４段構成のものを含み、築造時期は６世紀中頃のやや古い段階に位置づけられている（宮島ほか2003）。

今回の試掘調査では、用地内の西端に設定した１トレンチで第28号墳と考えられる古墳の周溝を検出した。範囲確認調査のため詳細は不明だが、トレンチ北端から南に向って徐々に幅を広げており、最大で上幅2.1ｍを測る。現地表下、わずか20㎝の浅い位置から形象埴輪がまとまって出土したことから記録化及び遺物の取り上げがおこなわれた。

第３次調査の成果を参考に第28号墳の規模を復元すると、周溝径約17ｍ、墳丘径約13ｍの円墳と想定される。遺物は、北東周溝を中心に形象埴輪が出土した（第104図）。その出土状況は、北から女子（２）が墳丘寄りから出土し、それに接して棒状のものを握った左手（８）が出土している。さらに東へ50㎝ほど離れた位置から９の右腕と11の胴部が出土しており、これらは直接接合しなかったが同一個体の可能性が高い。また、墳丘外側寄りから別の女子の髷（４・５）が出土しており、２体以上の女子が存在していたことが判明した。

南へ1.5ｍほど離れた位置から坊主頭の男子（１）と素環状鏡板付轡を装着した馬の破片が伴出した。馬の頭部（26）のほかに鞍・障泥、鈴などの破片が近接して出土している。このことから周溝がある程度埋没した段階で、横倒しになったものと想定される。後脚（36）が集中範囲の南側から出土していることから、頭を北に向けていたものと推定される。

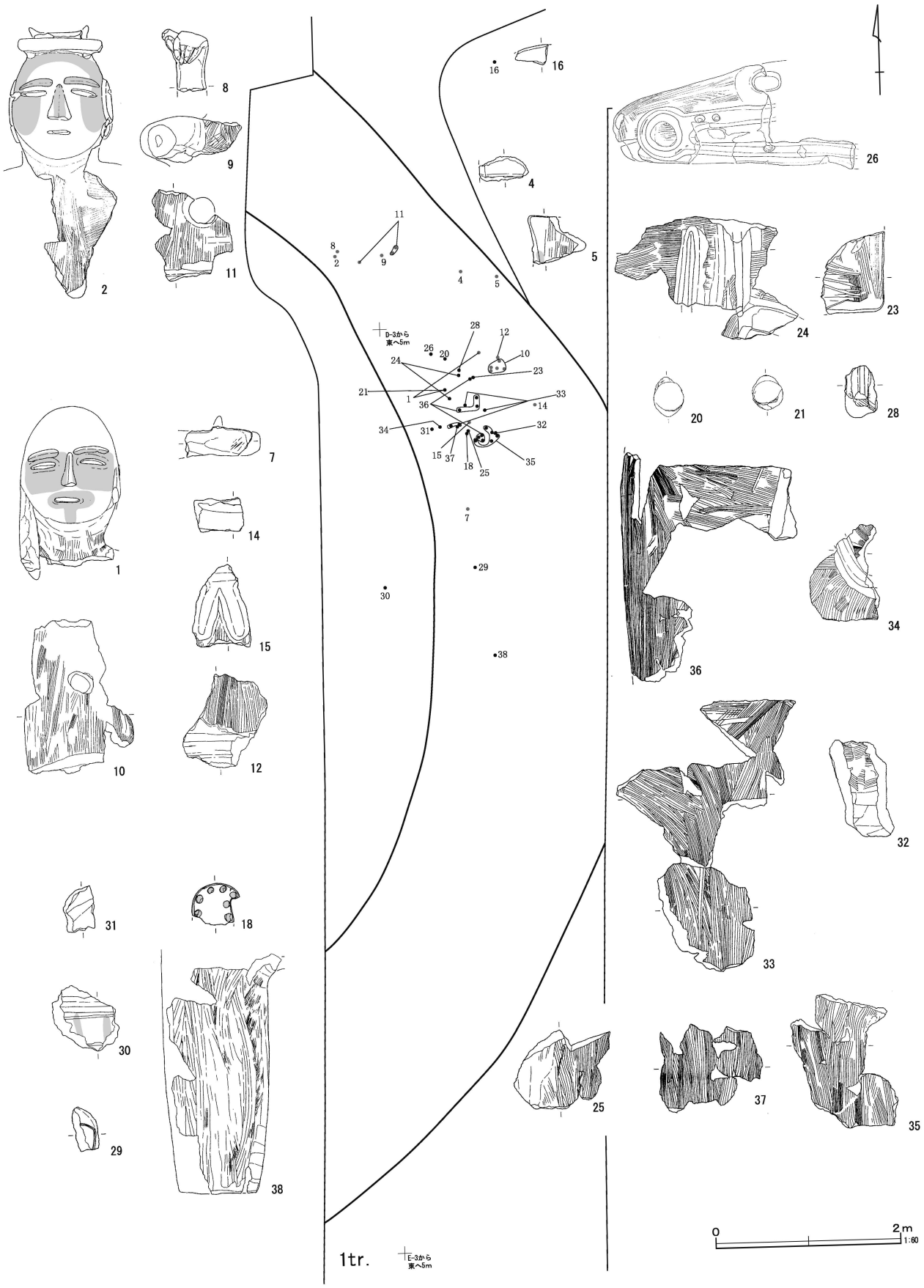
この他に東周溝からｆ字形鏡板付轡（18）や白泥を塗った馬の脚部（38）が出土しており、最低でも２体の馬が樹立されていた。検出された埴輪の出土状態を整理すると、北側に２体以上の女子からなる一群、南に1.5ｍほどの距離をおいて坊主頭の男子と飾り馬のセット、さらにその南に白泥を塗った飾り馬が樹立されていたものと推定される。

形象埴輪（第105～108図）

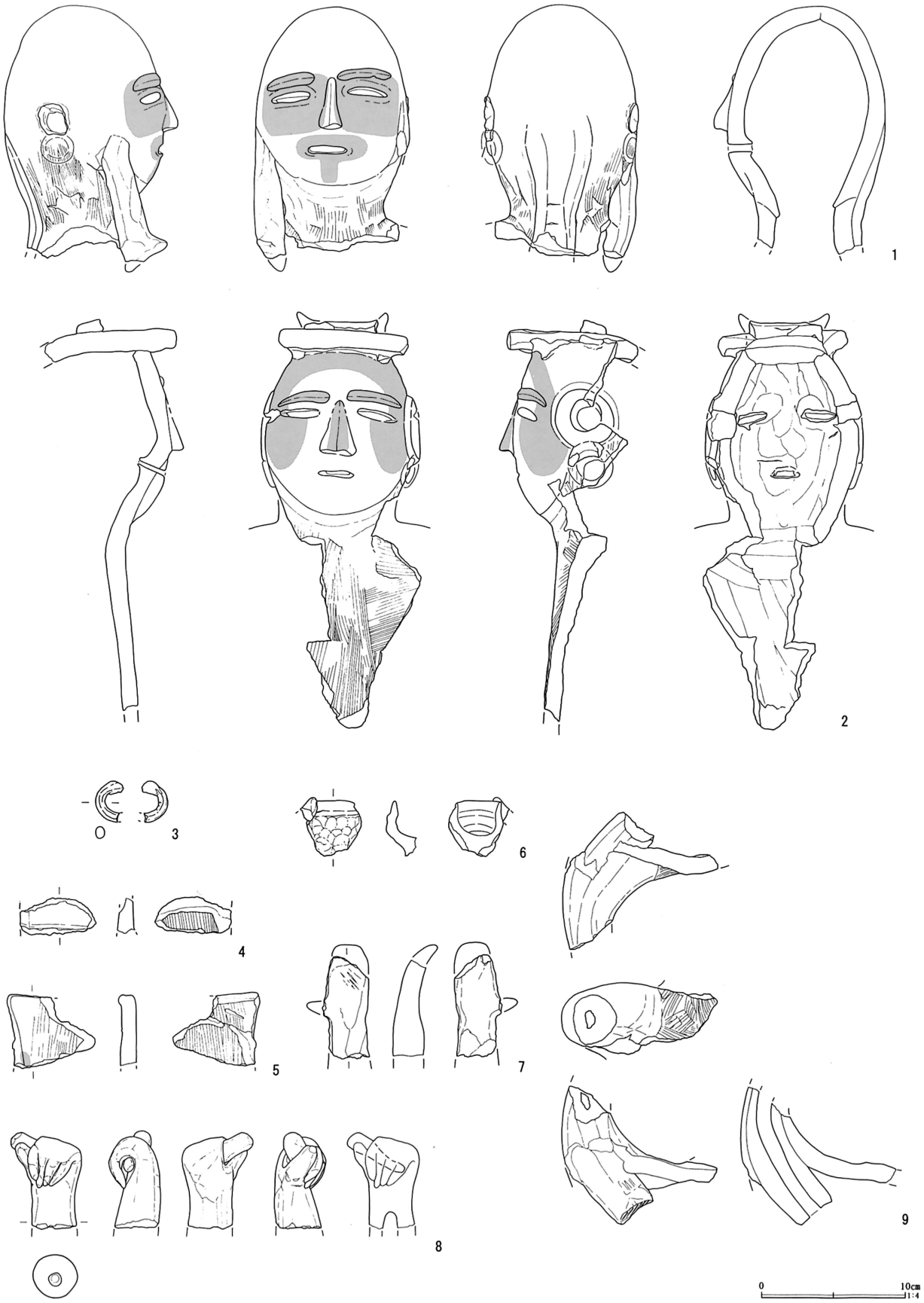
出土した遺物の大半が形象埴輪の破片で、円筒埴輪の破片は少量出土しただけである。

１から15は人物埴輪の破片である。１は坊主頭の男子で、顔は目から頬にかけてと口の周りに赤彩が施される。棒状の下げ美豆良と垂髪を表現するが、頭部は丁寧にナデが施され、被り物や頭髪などの剥離した痕跡はない。耳は円孔を穿ち、下端に耳環を貼付していたようである。２は島田髷の女子で、接合はしないが８の左手が同一個体と考えられる。顔は額から目の周りと鼻に赤彩を施す。耳は円環状に表現され、その下端に耳環を貼付する。３は人物埴輪に貼付された耳環の破片である。４・５は髷の破片である。４は元結部分、５は板状の台形髷であろう。６は人物が捧げ持つ壺の破片である。掌から剥離し、指の一部が残る。７はミトン形の右手で、拇指と指先を欠損する。８は２の女子と同一個体と考えられる左手で、棒状のものを握っている。指は粘土紐で一本一本表現し、腕は木芯中空成形である。９も出土位置から判断して２の女子の右腕であろう。木芯中空成形の腕を肩部に挿入している。10・11は胴部の破片で、脇の下に円孔を穿つ。直接接合しないが、出土位置から10は１の人物、11は２の人物の胴部と考えられる。12は半身像表現の裾部の破片である。台部に断面三角形の粘土紐を貼付する。13・14は腰帯の破片。15は腰帯をハの字に結んだ結目部分の破片である。

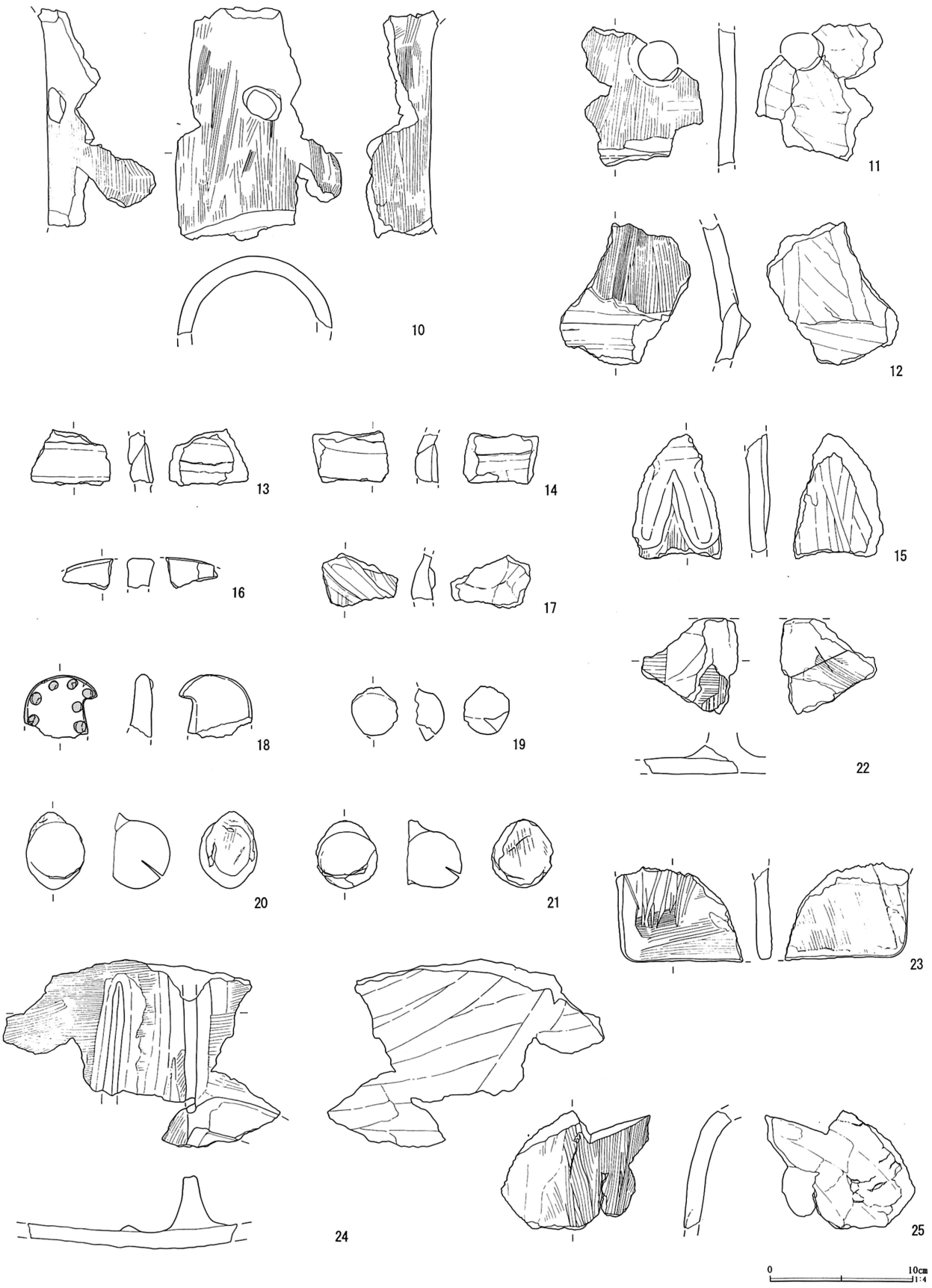
16～38は馬形埴輪の破片である。16は周溝に接する住居跡と推定される遺構から出土した鬣の破片である。17は耳の破片で、耳に回した革帯を表現する。18はｆ字形鏡板の破片で縁に粘土粒を貼付し、鋲留を表現する。また周縁と鋲の部分に赤彩を施す。19～21は胸繋などに装着された鈴である。粘土塊



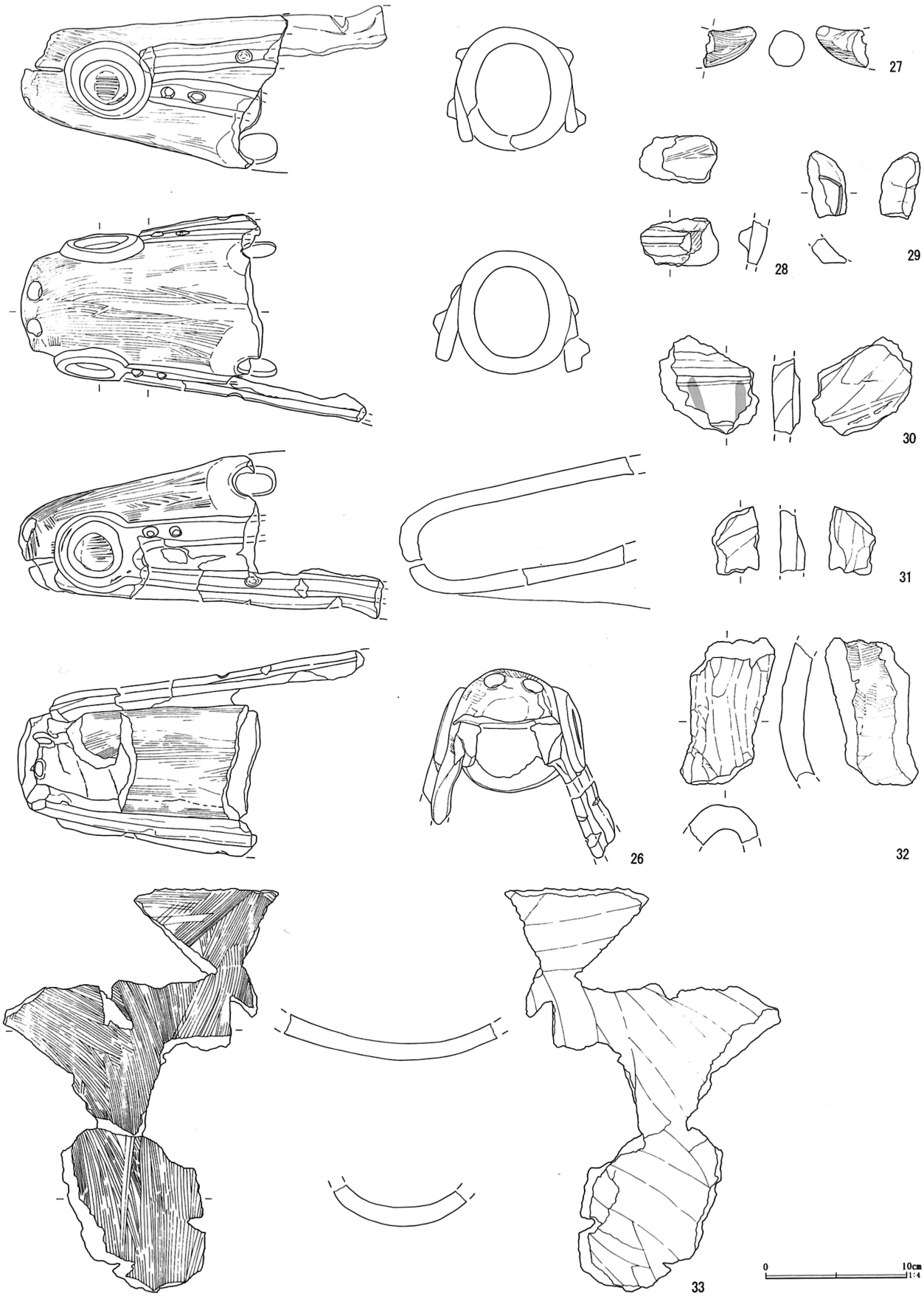
第104図　毛塚28号墳遺物出土状況図



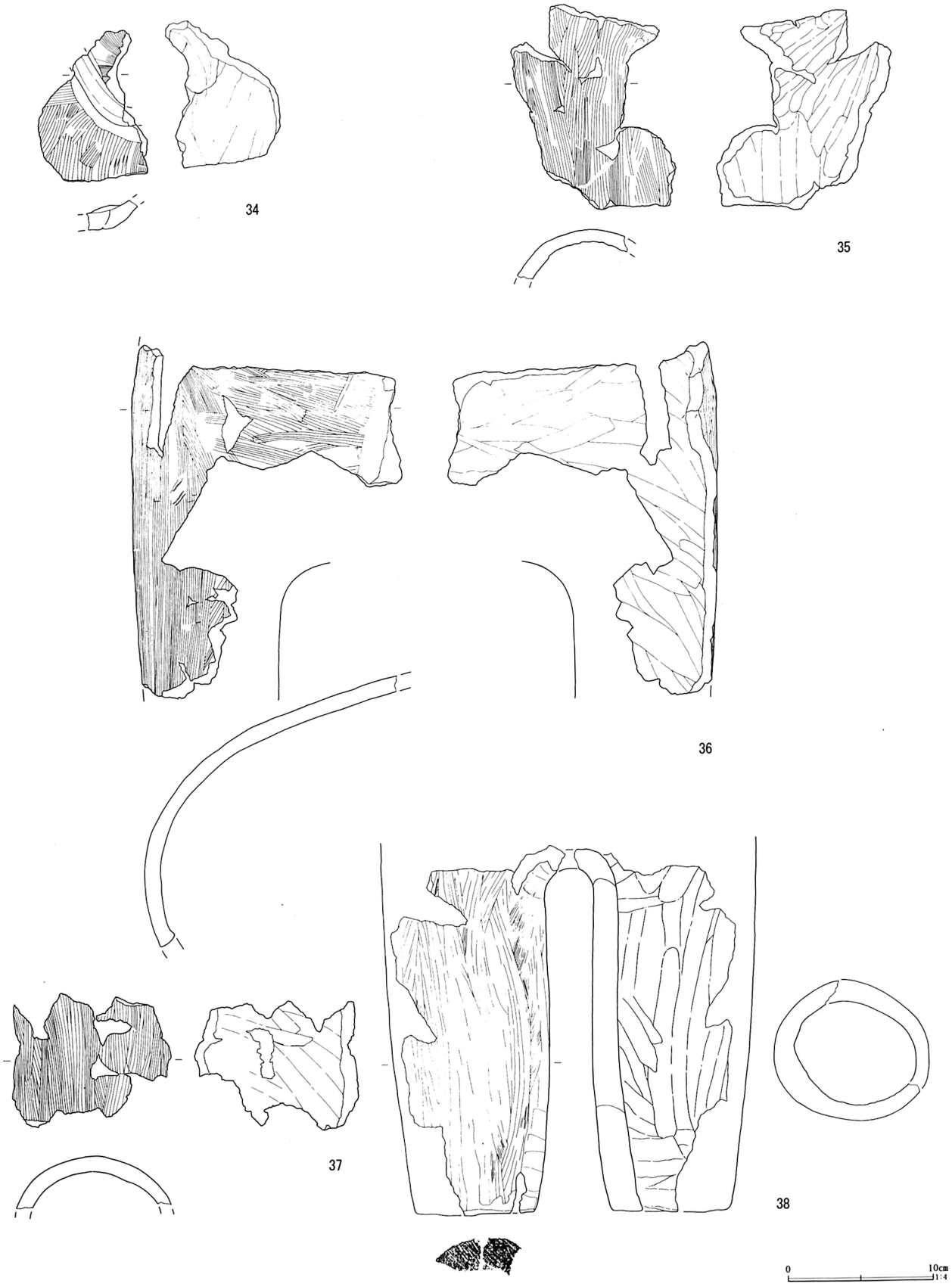
第105図　毛塚28号墳出土形象埴輪（1）



第106図　毛塚28号墳出土形象埴輪（2）



第107図　毛塚28号墳出土形象埴輪（3）



第108図　毛塚28号墳出土形象埴輪（4）

成形で、鈴口を切り込む。19は鈴口の切り込みが一部残る。22は前輪の破片で、外面に鬣が剥がれた痕跡がある。23は障泥の破片で、粘土板成形である。24は鞍の破片で、前輪と鐙をつなぐ鐙靼、胸繋の革帯が表現される。25・33・35・36・37は脚部の破片で、26の馬と同一個体であろう。33は脚から尻にかけての破片。36は尻部から後脚にかけての破片で、尻に円孔が穿たれる。26は素環鏡板付轡を装着した飾り馬の頭部で、円筒側板式である（井上1996）。立聞部分に粘土粒による鋲留表現がある。引手および手綱は粘土紐を貼付して成形し、引手壺の痕跡が突帯上の丸い窪みとして表現されている。27は馬の尻尾の先端である。28～31は馬形埴輪の部品と思われるが明確な部位は不明である。28は粘土紐を貼付する。29外面に線刻が認められる。30・31は胸繋の革帯と考えられる。30は外面に赤彩がある。31は外面に白粘土、体部に赤粘土を用いている。32は脚の接合部に用いられたU字形の粘土板である。34は尻部の破片である。尻尾に革帯がめぐる。38は白泥を塗布した馬の脚部である。18・29～31の破片と同一個体であろう。粘土紐の巻き上げ成形である。切開再接合技法はみられない。底面は木目圧痕が残る。

形象埴輪の胎土は微量の白色針状物質を含み、人物埴輪の顔の表現や腕の成形技法などに桜山窯跡群との関連性が認められることから、先の報告で指摘された6世紀中葉を中心とする年代に比定される。

第51表　**毛塚28号墳出土形象埴輪観察表**（第105～108図）

番号	器種	胎土	焼成	色調	外面調整　本/2cm	内面調整　本/2cm	備　考
1	人物　男子	ＡＦＪ	A	B	ナデ・ハケメ	ナデ	1Ｔ№229　顔面赤彩 棒状美豆良 垂髪
2	人物　女子	ＡＢＦＨ	A	B	ナデ・ハケメ　10	ナデ	1Ｔ　顔面赤彩 板状台形髷
3	人物　耳環	ＡＦＪ	A	B	ナデ		1Ｔ　粘土紐成形
4	人物　髷	ＡＦＨＫ	A	C	ナデ	ハケメ	1Ｔ№10　元結
5	人物　髷	ＡＦＨＪ	A	C	ハケメ・ナデ　11	ハケメ　11	1Ｔ№11　外面一部赤彩
6	人物　壺	ＡＦＨＫ	A	B	ナデ	ナデ	1Ｔ覆土　外面に指が残存
7	人物　右手	ＡＦＨＪ	A	B	ナデ		1Ｔ№24　ミトン形　白泥付着
8	人物　左手	ＡＦＨＪ	A	B	ナデ		1Ｔ№54　棒状物　木芯中空成形　白泥付着
9	人物　腕	ＡＢＦＫ	A	C	ナデ・ハケメ	ナデ	1Ｔ№70　木芯中空成形
10	人物　胴部	ＡＦＨＪ	A	B	縦ハケ　11	ナデ	1Ｔ№210～214　白泥付着
11	人物　胴部	ＡＦＨＪ	A	D	縦ハケ　10	ナデ	1Ｔ№63・74・75
12	人物　裾部	ＡＦＪＫ	A	B	縦ハケ　10	ナデ	1Ｔ№209　断面三角形の粘土紐貼付
13	人物　腰帯	ＡＦＨＪ	A	B	ナデ	ナデ	1Ｔ覆土　粘土紐貼付
14	人物　腰帯	ＡＦＨＪ	A	B	ナデ	ナデ	1Ｔ№22　粘土紐貼付
15	人物　腰帯	ＡＦＨＪ	A	B	ナデ・ハケメ		1Ｔ№188　結目粘土紐貼付
16	馬　鬣	ＡＢＦＪ	A	C	ナデ		1Ｔ№86
17	馬　脚部	ＡＦＪＫ	A	B	ハケメ・ナデ	ナデ	1Ｔ覆土　突帯による頭絡表現　耳部周辺
18	馬　鏡板	ＡＦＧＪ	A	D	ナデ	ナデ	1Ｔ№187　ｆ字形鏡板　鋲　外縁　赤彩
19	馬　鈴	ＡＦＪＫ	A	B	ナデ		1Ｔ撹乱　粘土塊成形
20	馬　鈴	ＡＧＨＪ	A	A	ナデ		1Ｔ　粘土塊成形　外面に白泥付着
21	馬　鈴	ＡＧＨＫ	A	A	ナデ		1Ｔ№219　粘土塊成形
22	馬　前輪	ＡＦＨＪ	A	A	ハケメ・ナデ		1Ｔ№234　鬣が剥落する
23	馬　障泥	ＡＦＨＪ	A	B	横ハケ・ミガキ　11	縦ハケ　11	1Ｔ№203　粘土板成形　外面白泥付着
24	馬　鞍	ＡＦＨＪ	A	B	ハケメ・ナデ　13	ナデ	1Ｔ№221・232 前輪破片 鐙靼、胸繋の表現
25	馬　脚部	ＡＦＨＪ	A	B	縦ハケ　13	ナデ	1Ｔ№228　覆土
26	馬　頭部	ＡＦＨＪ	A	A	ハケメ・ナデ　11	ナデ	1Ｔ№230　円筒側板　素環鏡板
27	馬　尻尾	ＡＦＪ	A	C	ハケメ		1Ｔ覆土　外面白泥付着
28	馬　不明	ＡＦＨＪ	A	B	ナデ	ナデ	1Ｔ№15
29	馬　不明	ＡＦＪ	A	D	ナデ	ナデ	1Ｔ№27　外面線刻　部位不明
30	馬　胸繋	ＡＢＦＪ	A	D	ナデ	ナデ	1Ｔ№82　外面赤彩
31	馬　胸繋	ＡＢＦＪ	A	D	ナデ	ナデ	1Ｔ№23　白粘土と赤粘土の使い分け
32	馬　股	ＡＦＨＪ	A	B	ハケメ・ナデ	ナデ	1Ｔ№238　Ｕ字形粘土板
33	馬　脚部	ＡＢＦＪ	A	A	ハケメ　12	ナデ	1Ｔ№23・185・186・190・193　覆土
34	馬　尻部	ＡＦＪＫ	A	B	ハケメ　13	ナデ	1Ｔ№184　突帯による尻撃表現
35	馬　脚部	ＡＦＨＪ	A	B	縦ハケ　12	ナデ	1Ｔ№197・198・236・237・244
36	馬　脚・尻	ＡＦＪＫ	A	A	ハケメ　13	ナデ	1Ｔ№189・191・200・201・207・216～218
37	馬　脚部	ＡＦＪ	A	B	縦ハケ　13	ナデ	1Ｔ№135・186　覆土
38	馬　脚部	ＡＢＦＨ	A	D	木口ナデ	ナデ	1Ｔ№50　外面白泥付着

Ⅴ　調査のまとめ

1．吉ヶ谷式土器をめぐる問題

今回の杉の木遺跡第４次調査では、弥生時代後期の住居跡10軒、土壙３基、溝跡１条が検出された。出土した土器は岩鼻式土器、吉ヶ谷式土器を主とし、他地域の土器を若干含む。ここでは、量的に多い吉ヶ谷式土器を中心にやや詳しくみていきたい。

（1）研究史

吉ヶ谷式土器は、1961（昭和36）年に調査された東松山市吉ヶ谷遺跡の住居跡出土遺物を基に認識されるようになったものである（金井塚1965）。報文中では、吉ヶ谷式土器という名称は用いられていないが、南関東地方の久ヶ原式とは明らかに違う土器と述べていることから独自の型式として認識されていたようである。

その後、吉ヶ谷式土器は櫛描文を施文する岩鼻式土器との関係で議論がおこなわれる。論点は、主に編年的位置づけを問題としていた。二つの土器型式を先後関係あるいは、併行関係に考えるかを問題としていた。

1982年に石岡憲雄、柿沼幹夫氏により、吉ヶ谷式土器の細分案が提示され今日的議論の出発点となった（石岡1982、柿沼1982）。柿沼氏は甕を主に取り上げ器形、輪積痕の有無、下半部の整形、縄文の施文状況をもとに分類をおこない、３時期４細分した。同様に、壺・高坏ついても分類をおこない、各時期の特徴を抽出している。その後共伴土器をもとに南関東地方の併行関係について述べている。

柿沼氏の論文は従来、一括りに考えられていた吉ヶ谷式土器を細かに分類することにより、細分をおこない時間幅が存在することを述べ、その後の論文、報告書に大きな影響を与えた。

その後の研究は、吉ヶ谷式土器の系譜、成立時期について議論がおこなわれる。系譜については、多くの人が帯状に縄文を施文する特徴や耳状の貼り付け文をもつことから宮ノ台式土器に求めている（柿沼1982、泉谷1982）。

そのような中で、中島　宏氏は池上遺跡の報告書で縄文を全面に施す土器群（池上４類）を吉ヶ谷式の祖形としている（中島1984）。富田和夫・中村倉司氏も同様の意見を述べている（富田・中村1986）。柿沼氏は、池上４類と吉ヶ谷式土器との縄文の撚りの傾向を調べ、池上４類ではＬＲが多く、吉ヶ谷式ではＲＬが多いことから両者の断絶を認め、直接の系譜関係として捉えられないとして慎重な態度をとっている（柿沼ほか1989）。

また、柿沼氏は系譜問題に直接絡む問題であるが、吉ヶ谷式土器の開始時期を後期中頃以降に変更する意見を提出した（柿沼1994）。この点に関しては小出輝雄氏より反論がだされている（小出1996）。

佐藤康二氏は高坏口縁部の分析を通して吉ヶ谷式の古段階の土器の抽出を試みている（佐藤1997）。

いずれにしろ、吉ヶ谷式土器系譜、開始時期を考察するにあたり、柿沼氏がおこなったように土器の分類をおこない、その後に問題についてアプローチしていく必要性がある。ここでは出土土器の分類をおこないその問題点や特徴について述べ、吉ヶ谷式土器の分布範囲を定め、その祖形等の問題に見通しを述べてみたい。

（2）出土土器の分類

今回の調査で出土した吉ヶ谷式の器種は壺・甕・高坏・無頸壺・甑・器台である。出土土器量は多いが、遺構に伴わないものも多い。また、破片資料を中心とするため器形全体が推定できるものは少ない。ここでは、出土量の多い甕・壺・高坏について分類をおこなってみたい（第109図）。

ａ．甕の分類

甕は概観してみると、胴部の最大径以上を中心に

文様を施文する。ここでは、破片資料も多いことから口唇部・口縁部から胴部上半に別けて分類する。胴部下半についてはハケ調整、ナデ調整がみられる。吉ヶ谷式土器の細分をおこなった柿沼氏は、器形及び胴部下半の調整技法も細分の大きな基準にしている（柿沼 1982）。しかし、前述のように今回の出土資料は破片資料が多いことから、器形・胴部下半については、今回は問題としない。

口唇部

１類　縄文を施文するもの。（１）

２ａ類　ヘラ状工具によりキザミを施す。（５・６）

２ｂ類　木口状工具によりキザミを施す。（２～４）

３類　無文のもの。

口縁部～胴部上半

輪積痕の有無により大きく二つに別けることができる。更に縄文の施文方法により細分が可能である。

１ａ類　輪積痕なし。縄文を器面の下から上に横位施文する。（４）

１ｂ類　輪積痕なし。縄文を器面の上から下に横位施文する。

２ａ類　輪積痕をもつ。段差の明瞭な輪積痕上を輪積痕の幅に合わせて縄文を器面の下から上に横位施文する。（３・５）

２ｂ類　輪積痕をもつ。段差のない輪積痕上を輪積痕の幅に関係なく縄文を施文する。（１・２・６）

また、輪積痕の有無に関わらず、口縁部直下に幅狭な無文帯をもつものがみられる。この無文帯は、縄文を施文後に強く横ナデすることにより作り出されている。以下、これを幅狭な無文帯と呼ぶことにする。

今回出土の輪積痕をもつ甕は、概ね輪積痕の範囲にのみ縄文を施文している。しかし、ＳＸ１出土例（第 30 図 13）のように輪積痕の範囲を超えて縄文を施文しているものもある。類例としては、熊谷市玉太岡遺跡第 14 号住居跡（高崎 1990）、深谷市四反歩遺跡南地区第４号住居跡（金子 1993）出土土器が挙げられる。今回は、この土器を分類項目して取り上げなかったが、今後、一つの分類項目として考えてく必要があるかもしれない。

ｂ．壺の分類

甕と同様に胴部下半は文様を施文しない。ここでは口縁部・頸部・胴部上半に分けて分類をおこなう。

口縁部

１類　輪積痕が１段のもの。折り返し口縁状のもの（段差のあるものと、ないものとが存在する）。（７～10）

２類　段差のある輪積痕を２から３段作るもの。（11・12）

３類　段差のある輪積痕を３段以上作るもの。（13・14）

これらは、それぞれ、輪積痕上に縄文を施文するもの（a）、キザミを施すもの（b）、縄文を施文し、キザミをもつもの（c）、無文のもの（d）に細別できる。

頸部

概ね無文帯となるが、耳がつくものも認められる。

胴部上半

１類　縄文帯が１帯施文される。

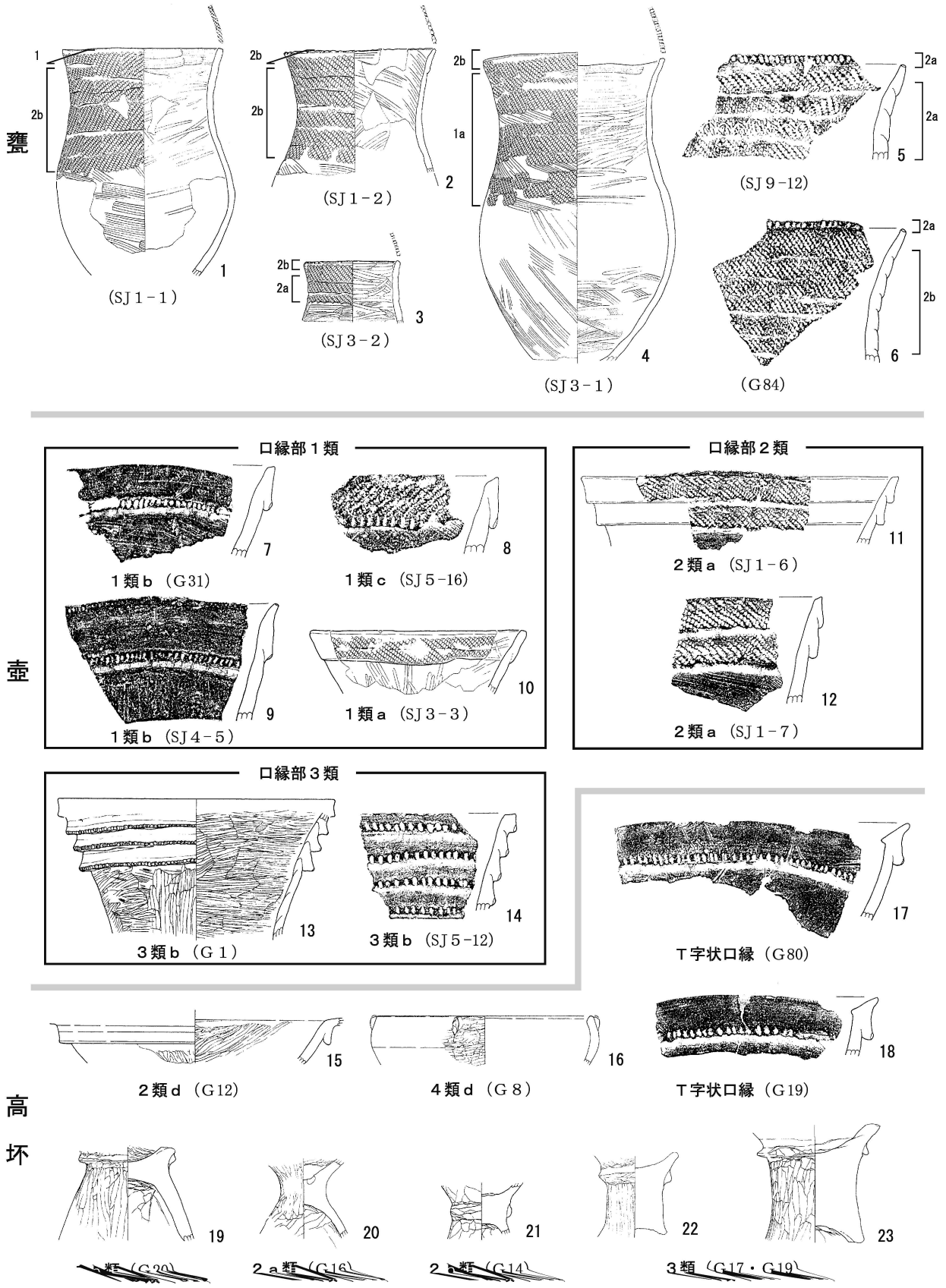
２類　縄文が２から３帯施文される。

１類については、縄文の帯が幅広に施文されるものが他の遺跡で認められる。杉の木遺跡では、破片資料のためか明確に幅広のものは確認できなかった。

ｃ．高坏の分類

高坏の口縁部装飾は壺と共通するので、ここではその分類に準ずるものとする。ただし、壺では認められなかった単純口縁のものが認められる（第 109 図 16）。以下これを４類とする。同様に壺には認められなかったが、口縁部に縦長の貼り付け文がつくものがある。

また、壺との相違点として特徴的な口唇部形態が認められる。第 109 図 17・18 のように内傾する端部が内外方向に短く伸び、Ｔ字状の形態をなすものである。ここではＴ字状の口縁部と仮称する。



第109図　吉ヶ谷式土器の分類

坏部の形態については、内湾気味に立ち上がるものが多い。ただ、第40図12のよう内湾度が緩やかなものも認められる。

接合部から脚部

１ａ類　坏部と脚部の接合部分の厚さが薄く、接合部に突帯が認められないもの。

１ｂ類　坏部と脚部の接合部分の厚さが薄く、接合部に突帯がつくもの。(19)

２ａ類　坏部と脚部の接合部分の厚さが厚く、接合部に突帯が認められないもの。(20)

２ｂ類　坏部と脚部の接合部分の厚さが厚く、接合部に突帯がつくもの。(21)

３類　中実の柱状脚状のもので、突帯がつくもの。(22・23)

（３）出土土器の特徴と位置づけ

以上のように杉の木遺跡出土の吉ヶ谷式土器を分類した。吉ヶ谷式では、今回確認されなかった特徴をもつ土器も存在する。出土土器の編年的位置や特徴を考えるため、若干の比較をおこなってみる。

ａ．編年的位置づけ

滑川町船川遺跡第３号住居跡（金井塚・高柳1987)、東松山市観音寺遺跡第３次調査第４号方形周溝墓（宮島1995）出土例のように、輪積痕をもたず頸部の括れ部を中心に縄文を施文する甕がある。船川遺跡では、口縁部から胴部上半に縄文を施文する広口壺が伴っている（註１)。しかし、他は底部破片のみであり詳しい時期はこれだけでは判断できない。観音寺遺跡では方形周溝墓の溝中からであるが、輪積痕が４から14段ある甕が伴い、柿沼編年のⅠ期の指標となる。

これらのことから、数は少ないが輪積痕をもたず頸部にのみ縄文を施文する土器群は、吉ヶ谷式の古段階或いはそれに先行する土器群の指標となろう。前述のように杉の木遺跡では認められないことから、本遺跡の時期を考える上で重要な示唆を与えるものであろう。

壺では口縁部上端、下端の両方にキザミを施す土器は第21図５を除き認められていない。また、単純口縁の壺もみられなかった。口縁部の上端と下端の両方にキザミを施す土器は、玉太岡遺跡で数多く認められる（高崎1990)。時期的には柿沼編年のⅠ期に多いが、やや後まで残るようである。単純口縁の壺は吉ヶ谷式では少数であるが、各時期に一定量認められる。破片資料のため甕と誤認した場合も考えられるが、地域的な特徴として捉えておきたい。

Ｔ字状の口縁部形態をもつ高坏については、佐藤氏が高坏の口縁部上位から端部形態について分類した際、「１の亜種形態」として捉えたものと同様である。佐藤氏も述べるように出土量は極少数である。他時期の遺構からであるが、駒堀遺跡古墳時代第１号住居跡から出土している（栗原ほか1973)。他地域の高坏の口縁部形態とも見比べてみても特異な例であり、その系譜、発生時期については不明な点が多い。今後の課題となろう。

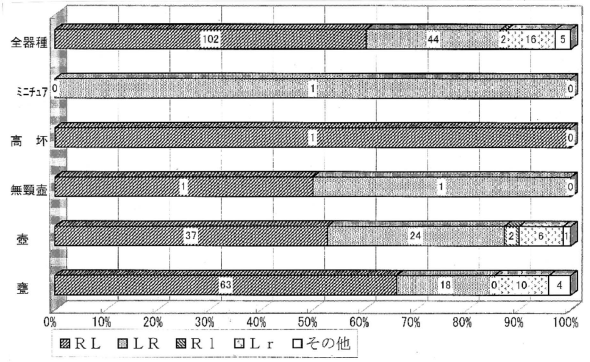
出土土器の編年的位置については、積極的根拠は乏しいが、柿沼編年Ⅱ期の中にほぼ収まると考えられる。

ｂ．縄文施文の特徴

吉ヶ谷式土器の縄文については、その特徴については柿沼氏が南関東の土器群に比べ目の粗いことを特徴として述べたことがあった（柿沼1982)。その後、礒崎　一氏は、深谷市白草遺跡の報告の中で具体的に縄文原体について言及され、０段多条、多くは０段３条の原体であることを述べている（礒崎1992)。また、柿沼氏は、前述のように吉ヶ谷式土器の撚りの傾向を調べている（柿沼1989)。

今回の観察の結果も同様に０段３条の原体が主なものである。一方、撚りの傾向については、第110図に示すように、壺・甕においてはＲＬがＬＲより多い結果となった。また無節においてもＬｒがＲｌより多いことが見て取れる。これは、ＲＬの前段の撚りはＬｒであることからも首肯できる。

その他とした縄の中には自縄結節のものがみられ



第110図　縄文原体の構成比率

る（第20図13）。器形や胴部下半の調整技法から吉ヶ谷式と思われる。残念ながら胴部上半を欠く為どのような文様構成になるかは不明である。ただ、吉ヶ谷式では従来知られてなかったものであり、南関東系土器との関係を考える上で重要であろう。

（4）分布について

現在見つかっている吉ヶ谷式土器を主体とする遺跡は第111図に示したとおりで、比企丘陵及び松山台地周辺に分布の中心がある。分布の南限は、川越市霞ヶ関遺跡、上組遺跡、女堀遺跡の小畔川右岸の遺跡である。北限は、児玉郡周辺であるが、群馬県地方の樽式土器との分布の境界が不明確である。

小畔川以南では、武蔵野台地上の富士見市南通り遺跡、和光市花ノ木遺跡や大宮台地上の戸田市鍛冶谷・新田口遺跡、さいたま市下野田稲荷原遺跡などから出土している。しかし、あくまでも南関東系の土器を主体とする中に客体的に存在し、吉ヶ谷式土器が主体となる遺構及び遺跡は検出されていない。

県外の吉ヶ谷式土器については、浜田晋介・宮川和也両氏により、52遺跡が集成されている（浜田・宮川2003）。遺跡により出土数の多寡はあるがいずれも客体的な出土であり、概ね北武蔵野台地、大宮台地と状況は同じである。

また、現在の荒川以北の妻沼低地で吉ヶ谷式土器及びその集落跡が検出されたことは重要であろう。深谷市明戸東遺跡では住居跡及び小竪穴が16軒、土壙が6基検出されて本格的な集落が営まれていた（礒崎1989）。五領期の土器も検出されていることから弥生時代後期後半から古墳時代前期に継続した集落であることも分かっている。低地の開発や赤城山南麓に分布する赤井戸式土器と関係を考える上で注目される。

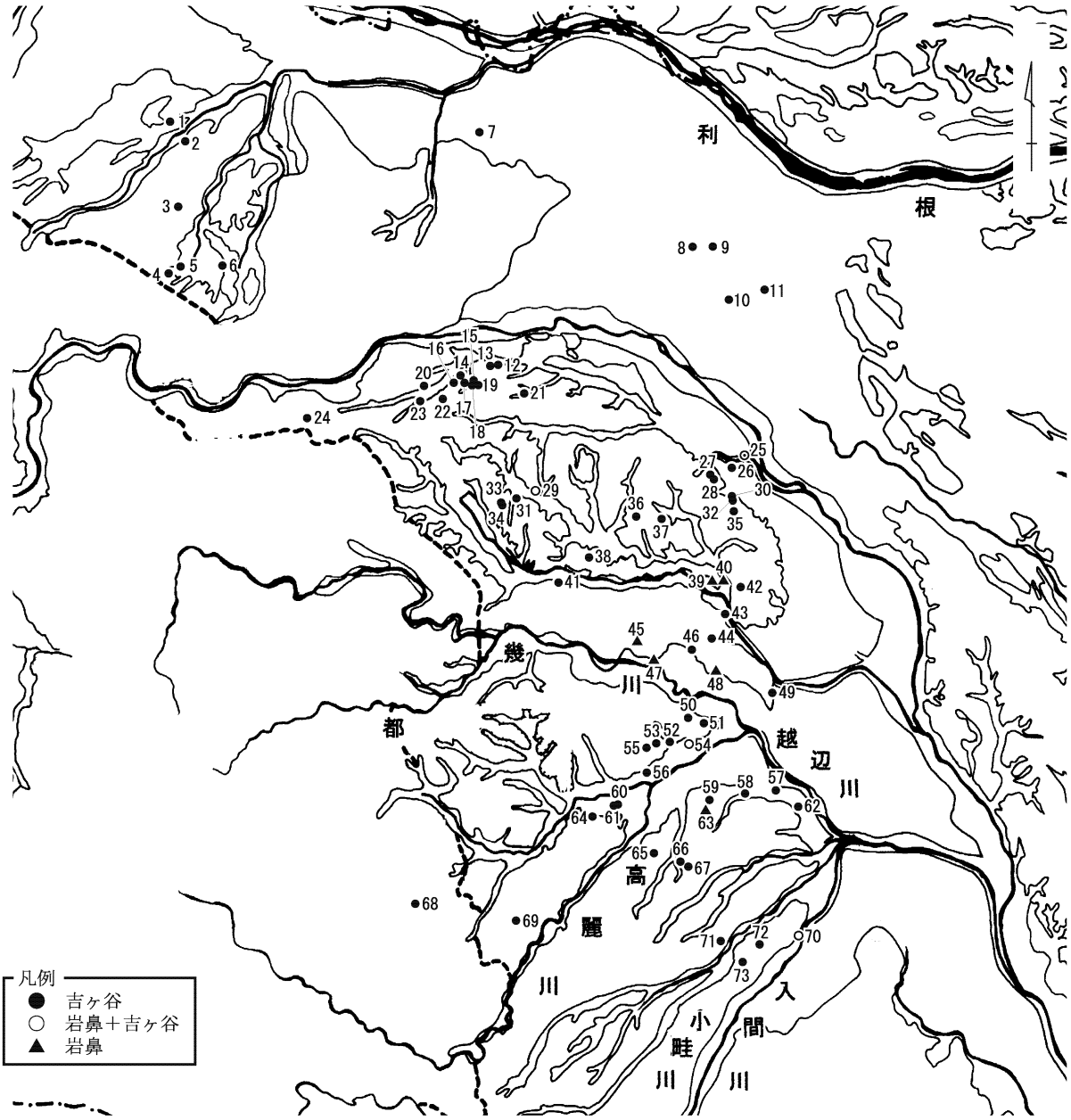
吉ヶ谷式土器の分布範囲では遺跡調査の多寡の問題もあるが遺跡が集中する地点がいくつかみられる。即ち、荒川の支流、吉野川左岸の江南台地上、和田吉野川沿いの台地、滑川右岸の比企丘陵上、杉の木遺跡が位置する松山台地縁辺部である。これらは、吉ヶ谷式期の生業などを考える上で重要であろう。

（5）今後の課題

以上のように、出土土器の分類とその特徴を述べ、吉ヶ谷式土器の分布についてみてきた。もとより今回の調査では、吉ヶ谷式土器の編年を云々することはできないが、若干の問題点が指摘できるであろう。

今回の調査で、甕において輪積痕があるものとないものが同一遺構内で出土している。従来、輪積痕の有無は吉ヶ谷式土器の編年的位置を決める上で重要な指標であった。しかし、前述のように、船川遺跡や観音寺遺跡の例から輪積痕のない甕が古くから存在することも確かである。このことは輪積痕のない甕はそれ自体で一つの系統で変化するかもしれない。しかし、このことが直ちに池上4類をもって吉ヶ谷式の祖型とするということを意味するものではない。現状では、北島式を間に挟んでもそのヒアタスを埋めることはできない。また、甕の分類で述べたように、輪積痕の有無に関わらず口縁部直下を強く横ナデする土器がある。これらの技法は、岩鼻式の甕によくみられる技法である。今後その影響を考えていく必要があろう。

土器分布の上からも宮ノ台式や池上式とは一部で重なる地域もあるが、異なっている。このことからも吉ヶ谷式が宮ノ台式や池上4類から直接系譜を引いているとは言うことができないであろう。ここでは岩鼻式に後続する土器群として吉ヶ谷式土器を捉



1	大久保山	16	円阿弥	31	大野田西	46	篭田	61	広面
2	村後	17	四反歩	32	船木	47	附川	62	木曽免
3	志度川	18	万願寺	33	蟹沢	48	西浦	63	相撲場
4	羽黒山	19	山ノ上	34	芳沼入	49	下道添	64	稲荷前
5	神明ヶ谷戸	20	上本田	35	大境	50	高坂三番町	65	花影
6	中山	21	久保	36	新井	51	大西	66	一天狗
7	明戸東	22	焼谷	37	吉ヶ谷	52	桜山	67	鶴ヶ岡
8	北島	23	上本田前	38	大谷	53	舞台	68	中在家
9	田谷	24	伊勢原	39	岩鼻	54	杉の木	69	新しき村
10	小敷田	25	下田町	40	八幡	55	根平		(下中尾)
11	池守	26	成願	41	屋田	56	駒堀	70	霞ヶ関
12	富士山	27	玉太岡	42	八耕地	57	附島	71	鶴ヶ丘
13	姥ヶ沢	28	北廓	43	観音寺	58	勝呂	72	女堀
14	白草	29	船川	44	五領	59	勇福寺	73	上組
15	荷鞍ヶ谷戸	30	円山	45	雉子山	60	中耕		

第111図　吉ヶ谷式・岩鼻式土器出土遺跡

えるのが妥当と考える。

以上、杉の木遺跡の土器の分類を通して思うところを述べてきた。従来の議論では、吉ヶ谷式の祖形を求めるにあたり、ごく一部の特徴を問題としてきた観がある。もとより、土器型式はその大きさに違いはあろうが、先行する型式からの変化や他地域からの影響を受け独自のものとなったときに我々が認識できるものと考えられる。このことからも一つの要素をもってその影響を考えるのは問題が残るであろう。多方面からの影響があってしかるべきである。今後、吉ヶ谷式土器の型式内容をより豊かにするためにはこのような視点に立ち、細かな分類を行いその関係を考えていく必要がある。

（宅間清公）

註

（1）報告書では台付甕としているが、ここでは広口壺とした。

2．毛塚古墳群の提起する問題

（1）はじめに

今回の杉の木遺跡第４次調査及び試掘調査によって、４基の古墳跡（毛塚28・32・33・34号墳）の具体的な内容が明らかとなった。今まで諏訪山古墳群や高坂古墳群の影に隠れ、正当な評価をうけていなかった毛塚古墳群について、今回の調査成果は古墳群の形成過程の把握、桜山窯跡群との需給関係の解明、埴輪棺にみられる副次的埋葬施設のあり方など、多岐にわたる問題について重要な手がかりを与えてくれた。

（2）古墳跡出土土器について

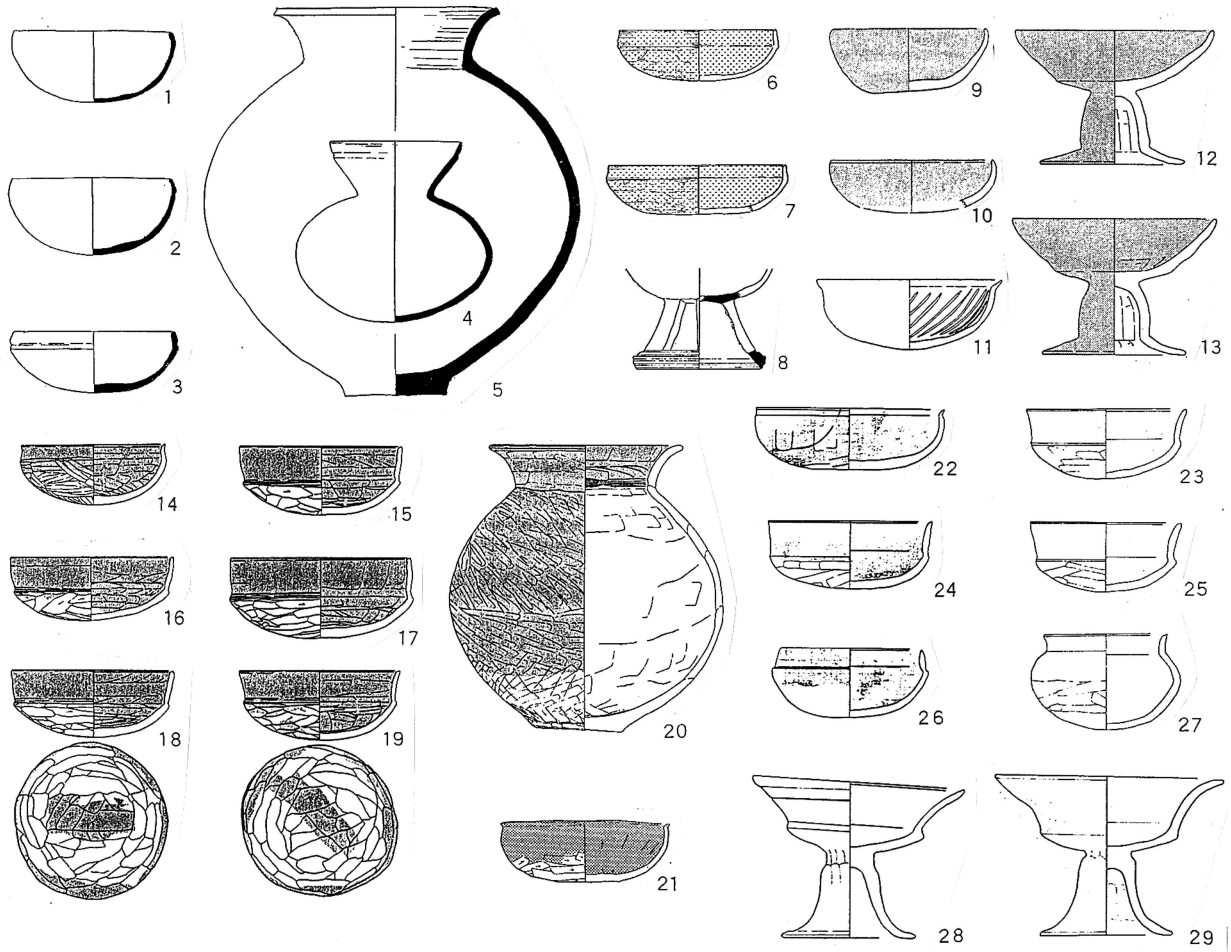
古墳跡から出土した土器をもとに各古墳の築造年代を中心に検討する。

a．編年的位置づけ

毛塚32・33号墳の２基から所謂「比企型坏」が出土している。比企型坏に関しては水口由紀子、尾形則敏の両氏によって、精度の高い相対編年が組み立てられている（水口1989、尾形1999）。ここではそれらの成果に照らしながら出土土器の編年的位置づけについて検討する。

毛塚33号墳からは、法量の異なる大小の坏が出土している（第61図１・２）。１は口径14.3㎝、器高5.8㎝の深身で、口唇部が長く外反し、赤彩のないものである。２は口径12.8㎝、器高4.6㎝のやや小振りのもので、口唇部が短く外反し、赤彩が施されている。このうち２は、水口編年Ⅰ段階第２・３小期、尾形編年Ⅱ期に位置づけられる。年代は、水口Ⅰ段階が５世紀末～６世紀前半に比定され、第２・３小期はその後半にあたる。また、尾形Ⅱ段階の年代は６世紀１／５で、須恵器型式のＭＴ15併行期に比定されている。これらから毛塚33号墳の築造年代に関して、６世紀前葉を中心とする時期に捉えておきたい。

周辺では、赤彩された半球形坏と須恵器坏身模倣坏を出土した諏訪山５号墳（金井塚ほか1970）や、半球形坏と内斜口縁坏を出土した代正寺11号墳（鈴木1991）、ＴＫ23型式の須恵器高坏と須恵器坏身模倣坏を出土した下道添１号墳（坂野1987）などが、先行段階の５世紀末葉に位置づけられる。比企型坏を出土した古墳では、さいたま市白鍬宮腰４号墳（岩田1998）が最古相を示す。須恵器蓋坏を模倣した模倣坏と比企型坏が共伴しており、６世紀初頭を中心とする時期に比定される。また、帆立貝式古墳の岩鼻２号墳（宮島・江原1989）や、さいたま市側ヶ谷戸11号墳（石原2002）からも比企型坏が出土している。時期的には毛塚33号墳に後続する６世紀中葉段階であろう。



1～5 諏訪山5号墳　6～8 下道添1号墳　9～13 代正寺11号墳　14～20 白鍬宮腰4号墳　21 側ヶ谷戸11号墳
22～29 岩鼻2号墳　（S＝1/6）

第112図　古墳関連出土土器

次に、毛塚32号墳からは、口径14㎝台の大振りで扁平な比企型坏が2点出土した（第45図1・2）。ともに口径14㎝以上で、口縁部は内屈し、口唇部が短く外反する。2点とも型式的には同じで、水口編年Ⅲ段階第1小期、尾形編年Ⅳ期第1小期にそれぞれ位置づけられる。水口Ⅲ段階の年代は6世紀末～7世紀初頭、尾形Ⅳ段階第1小期の年代は6世紀4／5～5／5に比定されている。これらから年代的には6世紀後葉から末葉に位置づけることが妥当であろう。しかし、後述するように円筒埴輪の年代観からみた本墳の築造年代は6世紀中葉頃と考えられることから、両者の年代観には大きな齟齬がある。追葬などの可能性を含め、今後微調整が必要である。

b．土器の使用状況

古墳における土器の使用状況に目を向けると、両者は対照的なあり方を示している。毛塚32号墳では、周溝の底面に伏せた状態で土器を2箇所に配置していたのに対し、毛塚33号墳では墳丘から周溝内に転落した状態で出土している。

このような土器の配置の差異が、葬送儀礼のどのような位相を反映しているのかは明らかでないが、古式群集墳の出現以降、坏を単独あるいは複数重ねて周溝底面に置くような斉一的な土器配置のあり方が認められ、それまでの壺や甕などの貯蔵用途の土器を主体とした土器供献儀礼との間に大きな断絶があることが指摘されている（山田2005）。今後は周

辺地域を含む古式群集墳における出土土器の類型的な把握から、より具体的な葬送儀礼を復元することが肝要であろう（註１）。

ｃ．湖西産須恵器と古墳の終末

古墳跡ではないが、第１号性格不明遺構から須恵器長頸瓶（第69図１）が出土した。遺構の性格については明確にし得ないものの、毛塚古墳群における古墳終末の問題を考える上で重要な鍵を握る。

長頸瓶は、器形、胎土などの特徴から静岡県の湖西窯産の搬入須恵器と考えられる。後藤健一氏による湖西産須恵器の分類によれば、肩部に鋭い稜をもち、口縁端部を上下に引き延ばす特徴から長頸瓶Ａｅ２に分類される。年代は第Ⅳ期第１小期に位置づけられ、701～715年の８世紀第１四半期前半代に比定されている（後藤1989）。ここでは本遺構の年代について、やや幅をもたせ７世紀末葉から８世紀初頭に位置づけておきたい。先に指摘した終末期古墳との関連性をうかがうことができるとすれば、古墳の終末時期を考える上で重要な指標となる。

（３）円筒埴輪について

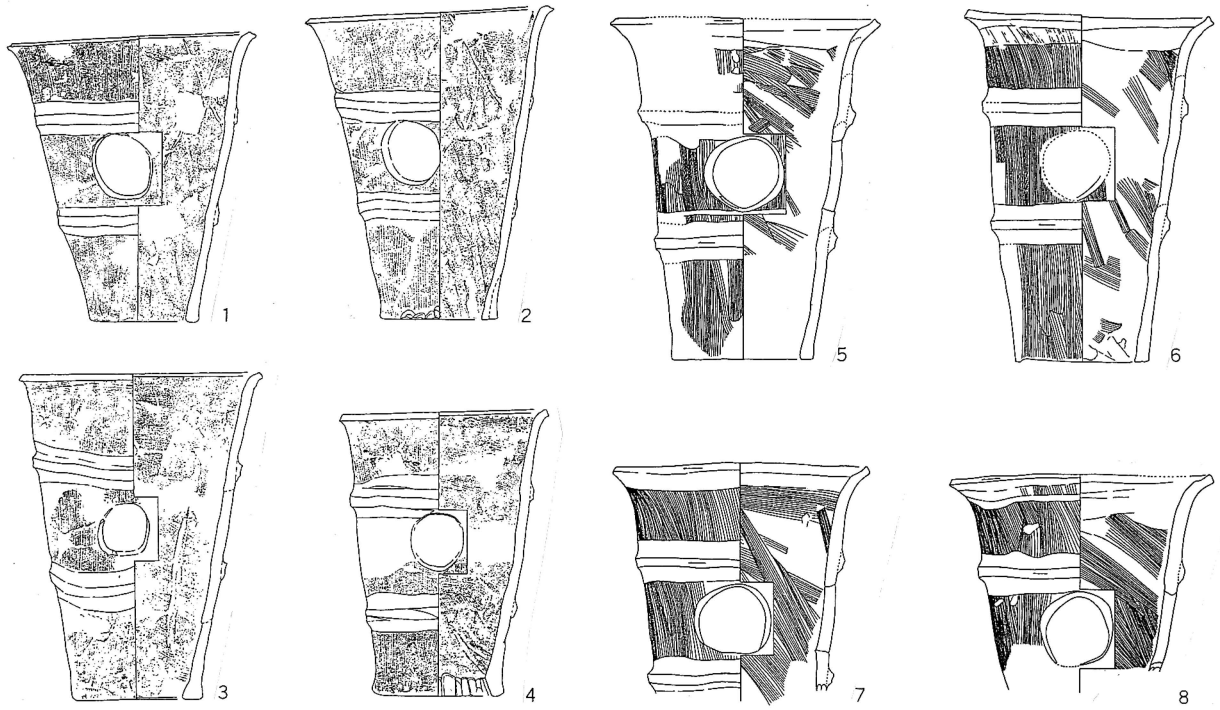
今回の調査において、古墳跡と第１号埴輪棺、埴輪集中区から円筒埴輪が出土した。円筒埴輪の編年的位置づけについては、埼玉県内の円筒埴輪の形態的変化を基軸に４期区分した山崎　武氏の円筒埴輪編年（山崎2000）と、桜山窯跡群の編年を試みた飯塚武司、江原昌俊氏（飯塚1984、江原2004）の研究成果を参照する。

毛塚33号墳は６世紀前葉に築造された古墳で、周溝から円筒埴輪の破片がわずかに出土した。外面に赤彩を施し、断面台形の突帯をめぐらし古相を呈する。出土量が少なく、実際に埴輪が樹立されていたかどうかは判断に苦しむが、周辺に５世紀にさかのぼる古墳跡が眠っている可能性を示唆する。

毛塚28号墳は、第３次調査の際に円筒埴輪が出土したが、今回の試掘では形象埴輪のみの出土であった（宮島・江原2003）。円筒埴輪は２条突帯３段構成に、３条突帯４段構成が客体的に含まれている。３条突帯のものは全体の器形の判明するものがないため、２条突帯の円筒埴輪を中心にみると、各段の幅が均等に割り付けられ、口縁部が大きく開く特徴的な器形である。器高30～34㎝の小型品で、突帯は低平なＭ字形、内面に「×」のヘラ記号がある。形態的特徴から６世紀中頃のやや古い段階に位置づけられる。

毛塚32号墳では、北西周溝からまとまった状態で円筒埴輪が出土した。円筒埴輪は２条突帯３段構成のものが主体で、一部大型円筒埴輪の破片が含まれている。２条突帯３段構成の円筒埴輪の特徴を列記すれば、（１）口縁端部内面のヨコナデによる匙面、（２）稜の明瞭な断面低台形の突帯、（３）透孔穿孔後の入念なナデ調整、（４）突帯下側にめぐる連続的な擦痕、（５）胎土中の白色針状物質の混入、などが挙げられる。これらの特徴に類似した円筒埴輪を周辺で探すと、直線距離にして約700ｍしか離れていない桜山窯跡群の１号～５号窯跡灰原、Ｂ群南斜面下灰原出土品の中に類例が存在することが判明した（水村1982）。特に、断続ナデ技法に類似する突帯の下側をめぐる連続的な擦痕が指標となる。今回は類例の提示にとどめ、同工品論的視点から再度分析をおこないたい。

さて、毛塚32号墳からは通有の円筒埴輪に混じって、大型円筒埴輪の破片が少量出土した（第58図84～87）。図上で器高93㎝の５条突帯６段構成の円筒埴輪に復元された。この規格と同じ大型円筒埴輪が、近隣の諏訪山古墳群７号周溝から出土している（埼玉県教育委員会1983）。未報告のため詳細は不明であるが、周溝内に埋設された埴輪棺に使用されていたものである。両者を比較すると、最下段や口縁部の幅に差異が認められるため、直接的な対比は難しいが、胎土・焼成・色調などは酷似していることから、同一系譜のものであろう（註２）。なお、諏訪山古墳群７号周溝例には、円形透孔ものと方形透孔の２種類が認められ、埼玉二子山古墳出土例と



1～4 毛塚28号墳　5・6 桜山窯跡群1号～5号窯跡灰原　7・8 桜山窯跡群 B群南斜面下灰原　(S＝1/8)

第113図　毛塚28号墳及び桜山窯跡群出土円筒埴輪

の共通性が指摘されている。

このように毛塚32号墳から出土した円筒埴輪の多くは、桜山窯跡群から供給されたものと推測される。器形の特徴から山崎編年Ⅱ期に比定され、6世紀前葉から中葉の年代を与えることができる。また、桜山窯跡群の編年と対比すれば、飯塚編年の桜山第Ⅱ段階、江原編年の第Ⅱ期に概ね該当する。飯塚氏は桜山第Ⅱ段階の年代を6世紀第2四半期後半～6世紀第3四半期前半に位置づけており、参考となる。ここでは毛塚28号墳に後続する6世紀中葉から後葉の年代に位置づけておきたい。

毛塚34号墳は、周溝の一部を確認しただけの部分的な調査であったが、最下段の伸長化した円筒埴輪（第63図1）が出土しており、山崎編年Ⅲ期に位置づけられる。年代的には、毛塚32号墳に後続する6世紀後葉に比定される。

第1号埴輪棺は、毛塚32号墳の周溝外縁に埋設されていた。調査の所見では、周溝がある程度埋まった段階に側壁を掘削したと考えられる。3条突帯4段構成の円筒埴輪3個と、2条3段構成の2個を組み合わせたものである（第65図）。3条突帯のものは同工品で、一括して入手したと考えられる。第2・3段目に対向して大き目の透孔が穿孔されている。また、2条突帯のものは、毛塚28号墳例と同じ内面に縦位のヘラ記号があり、転用の可能性が高い。

埴輪集中区出土の円筒埴輪（第67図）は、特徴的な低平な突帯で、第1号埴輪棺と同じく毛塚28号墳から転用したものと考えられる。

このように第1号埴輪棺および埴輪集中区の円筒埴輪の一部には、毛塚28号墳に樹立されていたものが転用された蓋然性が高い。そのため、遺構自体の年代は厳密には明らかにし得ないが、毛塚32号墳の築造後、さほど時間をおかない範囲での所産と想定される。

（4）形象埴輪について

試掘調査ながら毛塚28号墳では人物や馬などの形象埴輪が良好な状態で出土したほか、毛塚32号

墳に帰属する可能性の高い形象埴輪の破片がある。毛塚28号墳では、坊主頭の男子と島田髷の女子からなる３体以上の人物群、環状鏡板付轡の馬とｆ字形鏡板付轡の馬の２体が少なくとも樹立されていた。いずれも全体像の判るものはないが、墳丘径17ｍの円墳としては十分すぎる内容である。

坊主頭の男子は、神奈川県登山古墳出土の男子にその風貌が似ているが、先端部をつまみ出したＴ字形の棒状美豆良と垂髪を表現し、耳孔に接するように耳環を貼付した剥落痕がみられた。下げ美豆良の類例は桜山窯跡群でも出土している。顔の表現は鼻筋の通った三角形の鼻や目・口の形状、顎の造作などは基本的に共通しているが、眉が桜山窯跡群のように一本の粘土紐で表現せず、左右別々の粘土紐で表現されている。全体の表現は岩鼻５号墳から出土した鋸歯状冠帽を被る男子に類似している。

女子は、男子と同じ丸顔で目・口・鼻などの造作も類似していることから同一の工人（製作者）の手になるものであろう。異なる点としては、耳の表現が、耳孔の周りに貼付した円板状の粘土帯でなされている。このような耳の表現は女子に限られた表現である。やはり顔の表現は岩鼻５号墳出土の女子に類似し、同一系列の工人による作品であろう。なお、接合はしなかったが、この女子像は左手に棒状のものを握っていた。棒状のものがいったい何を表現しているのか定説はないが、通常は右手にもつ場合が多く特異な例である。

この他にも人物が捧げもつ壺などが出土しており、さまざまな役割を演じた人物から構成された埴輪群像が樹立されていたことをうかがわせる。

次に、毛塚32号墳について検討する。前述したように確実に古墳に伴うものはなく、いずれも重複遺構からの出土である（第71図）。破片資料が多く明確なものはほとんどないが、円筒埴輪と同じく胎土に白色針状物質を含む在地窯の製品である。

人物埴輪では、円環状の耳の表現や木芯中空技法による腕部の成形、粘土紐による指の表現など、いずれも桜山窯跡群にみられる特徴である。また馬形埴輪では粘土紐で縁金具を表現したｆ字形鏡板や尻繋に垂下された三鈴杏葉などの馬具表現は６世紀前半代に多くみられるものである。これらの点から円筒埴輪と同じく桜山窯跡群から供給された可能性が高いといえよう。

（5）おわりに

毛塚古墳群をめぐる二、三の問題点について述べてきた。その結果、６世紀前葉に毛塚33号墳が築造され、その西側に人物、馬などの多彩な形象埴輪群を樹立した毛塚28号墳が６世紀中葉に築造された。相前後して毛塚32号墳が築造され、桜山窯跡群から埴輪が供給されていたことが明らかとなった。そして、６世紀後葉には毛塚34号墳が築造されたものと推測される。このように６世紀前葉以降、間断なく古墳が築造された状況が復元される。周辺の高坂古墳群や諏訪山古墳群のように群中に有力な前方後円墳は築造されていないが、６世紀を中心に造墓活動が繰り返されたと想定される。

紙幅の都合で埴輪棺などの副次的埋葬施設の性格（註３）ついては、まったくふれることができなかった。小規模埋葬施設に葬られた被葬者の性格や中心埋葬施設の被葬者との関係性などの問題については、別稿で検討したい。また、毛塚古墳群を含む高坂台地周辺の古墳群の成立と展開について、現在、当団によって調査が進められている、低地部に立地する反町遺跡などの古墳群の様相が解明された時点をまって、再び検討をおこないたい。

（大谷　徹）

註

（１）鴻巣市新屋敷古墳群では、陸橋部脇の周溝底面に土師器坏と滑石製紡錘車をセットで置いた事例が多く検出された。古墳群ごとの葬送儀礼の個別性と斉一性の検討が今後の課題である。

（２）東松山市教育委員会の江原昌俊氏の御高配により東松山市文化財センターにて実見。

（３）埼玉県内における副次的小規模埋葬施設について長滝歳康氏は、系譜と類例を検討し、被葬者の性格についてまとめている（長滝・中沢2005）。

引用・参考文献

飯塚武司　1984「北武蔵における埴輪生産の展開」『法政考古学』第９集
石岡憲雄　1982「『吉ヶ谷式』と『岩鼻式』土器について」『埼玉県立歴史資料館紀要』第４号
石原祐介　2002『側ヶ谷戸貝塚ー第４次調査ー』さいたま市遺跡調査会報告書第９集
泉谷俊憲　1982「南関東弥生時代における吉ヶ谷式土器についての一考察」『法政史論』第９号
礒崎　一　1989『新田裏・明戸東・原遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第85集
礒崎　一　1992『白草遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第118集
井上裕一　1996「武蔵の馬形埴輪」『埴輪研究会誌』第２号
岩田明広　1998『白鍬宮腰遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第227集
江原昌俊　1996「いわゆる『小代氏館跡』の区画について」『比企丘陵』第２号
江原昌俊　2004「東松山市桜山埴輪窯と製品の供給先」『埴輪研究会誌』第８号
江原昌俊・長井正欣 2004『上松本遺跡（第２次)』東松山市文化財報告書第２集
江原昌俊　2005「13. 高坂周辺遺跡」『シンポジウム　埼玉の戦国時代　検証 比企の城』
尾形則敏　1999「いわゆる『比企型坏』の編年基準の要点」『あらかわ』第２号
柿沼幹夫　1982「吉ヶ谷式土器について」『土曜考古』第５号
柿沼幹夫ほか　1989「川本町万願寺出土の遺物」『埼玉考古』第25号
柿沼幹夫　1994「吉ヶ谷式土器を出土する方形周溝墓」『検証！関東の弥生文化』埼玉県立博物館
金井塚良一　1965「埼玉県東松山市吉ヶ谷遺跡の調査」『台地研究』№.16
金井塚良一ほか　1970『諏訪山古墳群』東洋大学考古学研究会発掘調査報告第１集
金井塚良一・高柳茂　1987『船川遺跡』　船川遺跡調査会
金子直行　1993『四反歩遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第130集
栗原文蔵ほか　1973『駒堀』埼玉県遺跡調査報告書第４集　埼玉県教育委員会
小出輝雄　1996「吉ヶ谷式土器の系譜」『ＹＡＹ！』弥生土器を語る会20回到達記念論文集　弥生土器を語る会
後藤健一　1989「湖西古窯跡群の須恵器と窯構造」『静岡県の窯業遺跡』本文編　静岡県教育委員会
小峰啓太郎　1963「杉の木遺跡の調査」東松山市文化財調査報告第２集　東松山市教育委員会
埼玉県　　1982『新編埼玉県史 資料編２』原始・古代 弥生・古墳
埼玉県教育委員会　1983「諏訪山古墳群」『埼玉県埋蔵文化財調査年報』昭和56年度
埼玉県教育委員会　1987「杉の木遺跡」『埼玉県埋蔵文化財調査年報』昭和61年度
埼玉県教育委員会　1994『埼玉県古墳詳細分布調査報告書』
佐藤康二　1997「吉ヶ谷式高坏についてー弥生時代後期土器の一様相ー」『人間・遺跡・遺物３ー麻生優先生退官記念論文集ー』　発掘者談話会
塩野　博　2004『埼玉の古墳』比企・秩父　さきたま出版会
鈴木孝之　1991『代正寺・大西』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第110集
高崎光司　1990『玉太岡遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第90集
富田和夫・中村倉司1986「埼玉県における中期後半の櫛描文土器について」『東日本における中期後半の弥生土器』第７回 三県シンポジウム
中島　宏　1984『池守・池上』埼玉県教育委員会
長滝歳康・中沢良一　2005『広木大町古墳群　後山王地区 後山王遺跡Ｅ地点』美里町遺跡調査会報告書第６集　美里町遺跡調査会
仲山英樹　1990「研究ノート 地下式土坑墓の一様相」『栃木県考古学会誌』第12集
浜田晋介・宮川和也　2003「吉ヶ谷式土器の拡散と変容」『埼玉考古』第38号
坂野和信　1987『下道添遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第67集
東松山市　1985『東松山市の歴史』中巻
松本　完　2003「後期弥生土器形成過程の一様相ー埼玉県中央・北西部の事例からー」『埼玉考古』第38号
水口由紀子　1989 「いわゆる“比企型坏”の再検討」『東京考古』７
水村孝行　1982『桜山窯跡群』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第７集
宮島秀夫・江原昌俊　1993『岩鼻遺跡（第２次)』東松山市文化財調査報告書第21集　東松山市教育委員会
宮島秀夫　1995「銅釧・鉄剣出土の方形周溝墓　観音寺遺跡第４号方形周溝墓」『比企丘陵』創刊号
宮島秀夫・江原昌俊　2003『杉の木遺跡（第３次)』東松山市文化財調査報告書第24集　東松山市教育委員会
山崎　武　2000「埼玉県の円筒埴輪の編年について」『埴輪研究会誌』第４号
山田俊輔　2005「古墳時代中期群集墓分析の新視角」『考古学ジャーナル』№.528